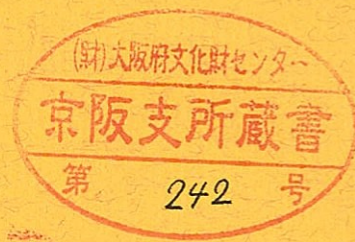


大阪文化財センター調査報告 XXXIII

大阪府都市計画街路貝塚中央線新設工事予定地内
脇浜・畠中・石才近義堂遺跡試掘調査報告書



昭和 55 年 3 月

財団法人 大阪文化財センター

例 言

1) 本冊子は、財団法人大阪文化財センターが、大阪府の委託を受けて実施した、大阪府都市計画街路貝塚中央線新設工事予定地内に所在する、脇浜・畠中・石才近義堂の三遺跡の試掘調査報告書である。

2) 調査費用（¥52,916,000）は、全て大阪府が負担した。

3) 調査は、財団法人大阪文化財センター業務課が担当し、昭和54年3月20日より昭和55年3月31日迄実施した。

4) 発掘、遺物整理及び報告書の作成は、下記の者が担当した。

統括責任者	業務課長	堀江門也
	業務課業務第五係長	酒井龍一
	〃 技 師	国乗和雄
	〃 技 師	森田義孝
	総務課普及係技能員	立花正治（写真担当）

5) 調査の実施にあたっては、大阪府岸和田土木事務所、貝塚市教育委員会（吉川和則・南川孝司氏）、及び地元関係者の方々に多くの点で御世話になった。記して謝意を表します。

6) 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成すると共に、カラスライドも多数作成しており、広く利用されんことを希望する。

7) 挿図、並びに図版には、第1図 国土地理院 2万5千分の1の地形図『岸和田西部』『樽井』、第2図 陸軍参謀本部 仮製2万分の1の地形図、『貝塚町』（明治18年測量）を使用した。

8) なお、『脇浜・畠中・石才近義堂遺跡試料 花粉分析報告』を付載した。

9) 挿図第3図の「地籍図」は、貝塚市教育委員会吉川和則・南川孝司両氏により作成されたものを御提供いただいた。

大阪府都市計画街路貝塚中央線新設工事予定地内
脇浜・畠中・石才近義堂遺跡試掘調査報告書

目 次

例 言

〔Ⅰ〕 調査の目的	酒井龍一	1
〔Ⅱ〕 遺跡の位置と歴史的環境	森田義孝	1
〔Ⅲ〕 調査の方法と経過	酒井龍一	8
〔Ⅳ〕 調査の結果	酒井龍一・国乗和雄・森田義孝	8
〔Ⅴ〕 まとめ	酒井龍一	36
付載 脇浜・畠中・石才近義堂遺跡出土試料・花粉分析報告		46

挿 図

第1図 調査地（貝塚中央線）の位置	2
第2図 周辺の遺跡	3
第3図 周辺の地籍図	5～6
第4図 トレンチ配置図	9～10
第5図 No.8 トレンチ遺構平面図	15
第6図 No.8 トレンチ出土遺物実測図	16
第7図 No.11 トレンチ出土遺物実測図	17
第8図 No.14・15 トレンチ出土遺物実測図	19
第9図 No.18 トレンチ出土遺物実測図	23
第10図 No.19 トレンチ出土遺物実測図	26
第11図 No.19—④ トレンチ遺構平面図	26
第12図 No.20 トレンチ出土遺物実測図	27
第13図 No.23 トレンチ出土遺物実測図	30
第14図 No.23 トレンチ遺構平面図	31
第15図 No.23 トレンチ出土遺物実測図	31
第16図 No.26—② トレンチ出土遺物実測図	34
第17図 No.26—② トレンチ遺構平面図	35
第18図 時代別遺構分布略図	42・43

図 版

- 図版第 1 No. 1・No. 2—②・No. 3・No. 4 トレンチ断面実測図
- 図版第 2 No. 2—①・No. 5—①②・No. 6 トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 3 No. 7—①② トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 4 No. 8—①② トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 5 No. 9・No. 12—①②③ トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 6 No. 10・No. 11・No. 13 トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 7 No. 14—①②③・No. 15—①②③ トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 8 No. 15—②③・No. 16 トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 9 No. 17・No. 18—①② トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 10 No. 19—①②③ トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 11 No. 19—④ トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 12 No. 20—①②③ トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 13 No. 20—④⑤・No. 21—① トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 14 No. 21—①② トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 15 No. 22—①・No. 23 トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 16 No. 25—①・No. 26—①② トレンチ断面・平面実測図
- 図版第 17 No. 22—②・No. 24—①③・No. 25—②③・No. 27—①②③ トレンチ断面実測図
- 図版第 18 調査地の現状写真
- 図版第 19 No. 1・No. 2 トレンチ写真
- 図版第 20 No. 4・No. 5・No. 6 トレンチ写真
- 図版第 21 No. 7 トレンチ写真
- 図版第 22 No. 8 トレンチ写真
- 図版第 23 No. 9・No. 10・No. 11 トレンチ写真
- 図版第 24 No. 12・No. 13 トレンチ写真
- 図版第 25 No. 14 トレンチ写真
- 図版第 26 No. 15 トレンチ写真
- 図版第 27 No. 16・No. 17 トレンチ写真
- 図版第 28 No. 18 トレンチ写真
- 図版第 29 No. 19 トレンチ写真
- 図版第 30 No. 20 トレンチ写真
- 図版第 31 No. 20・No. 21 トレンチ写真
- 図版第 32 No. 22・No. 23・No. 25・No. 26 トレンチ写真
- 図版第 33 出土遺物写真
- 図版第 34 出土遺物写真
- 図版第 35 出土遺物写真
- 図版第 36 出土遺物写真

〔Ⅰ〕 調査の目的

大阪府において現在、都市計画街路貝塚中央線新設工事の計画が、貝塚市大字脇浜・神前・畠中・石才にまたがる地になされている。当該予定地内に脇浜・畠中・石才近義堂遺跡せきさいこぎどうが含まれている為、大阪府岸和田土木事務所の委託を受けて事前に試掘調査を実施し、その範囲と特徴を確認し、保存をはかる為の資料をうるものである。

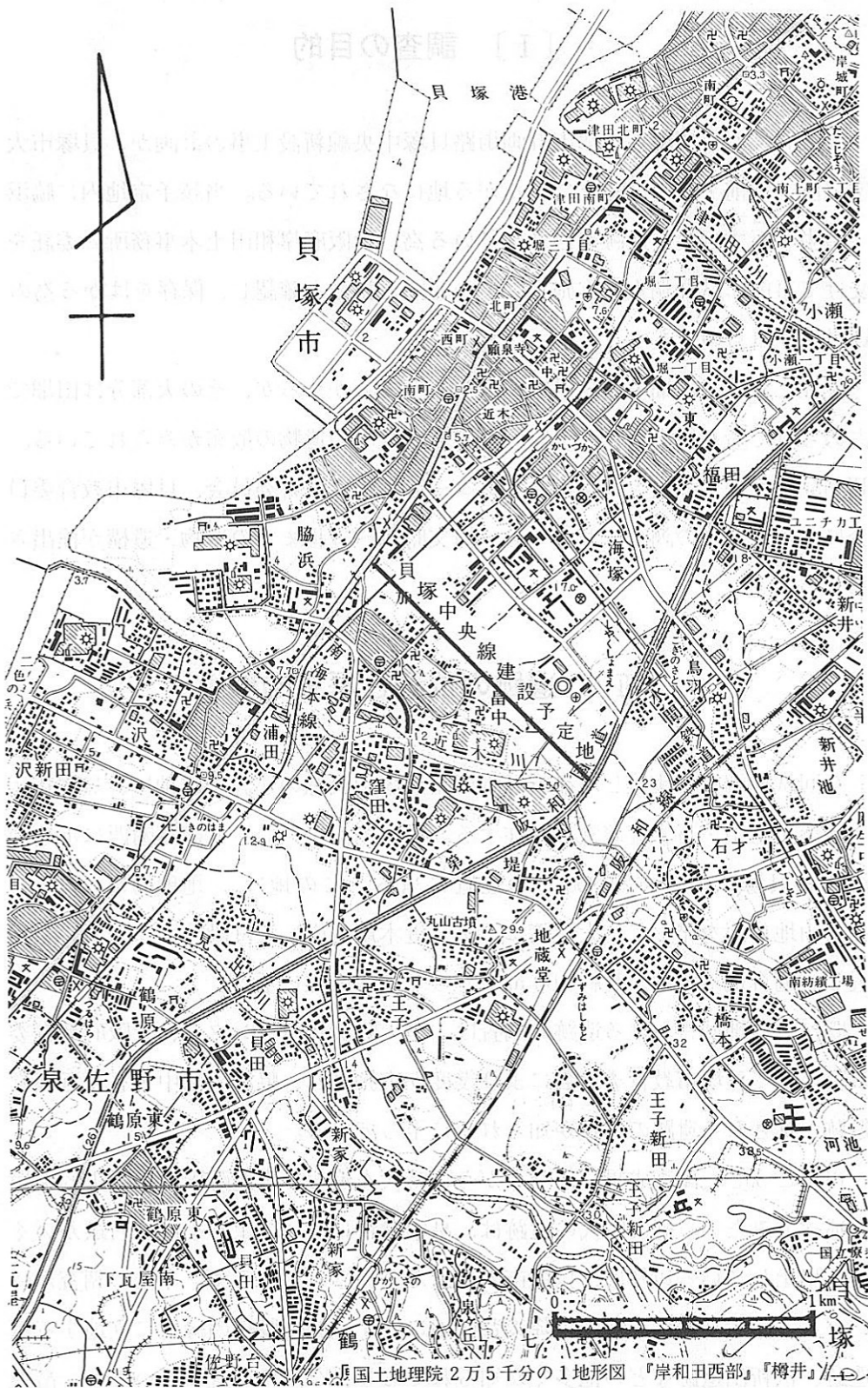
現在、地目は田畑・池・里道・水路などに分かれるが、その大部分は田畑で占められており従来から、土器・石器・古瓦等の遺物の散布がみられている。昭和50年度からの当大阪文化財センター、大阪府教育委員会、貝塚市教育委員会による幾度かの調査においても、縄文時代～近世までの遺物・遺構が検出されている。

〔Ⅱ〕 遺跡の位置と歴史的環境

今回試掘調査を実施した都市計画街路貝塚中央線の建設予定地は、貝塚市大字脇浜・畠中・石才近義堂に所在する。大阪湾沿岸に沿ってほぼ南西に走る南海本線貝塚駅の南方約 800 m の位置に当る。この地は、地理的にみると、和泉山地に源を発して、大阪湾にそそぐ近木川右岸、低位段丘上におおむね位置し、調査地最西端より約 400 m でかつての海岸線に至る。

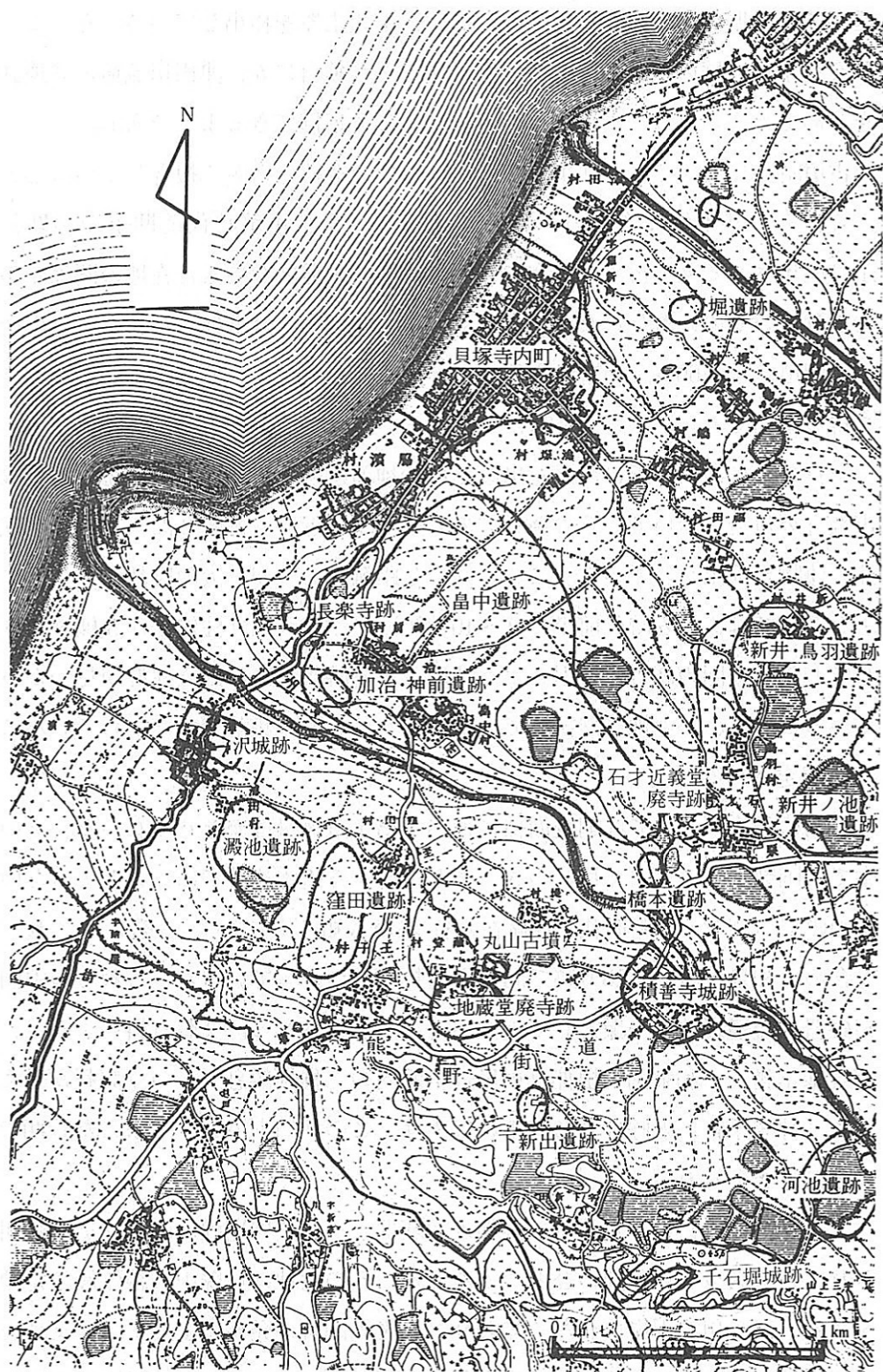
既にこの地域における遺跡の調査は、当大阪文化財センター、大阪府教育委員会そして貝塚市教育委員会により幾度か実施され、脇浜・畠中・石才近義堂遺跡(1)と称される遺跡の存在が知られるに至っている。

以下こうした調査成果によりながら、時代を追って当遺跡周辺の歴史的環境を述べてみたい。縄文時代の遺跡は、畠中遺跡において土器小片と石鏃がいくつか出土している以外は、貝塚市内で未だ発見されておらず、今後の調査が待たれる。弥生時代は、中期以降後背低地に面する低位段丘の縁辺に立地する沢遺跡、沢新出遺跡などの他多くが知られており、今回の調査においても、畠中



国土地理院 2万5千分の1地形図 『岸和田西部』『樽井』

第1図 調査地の位置



第2図 周辺の遺跡

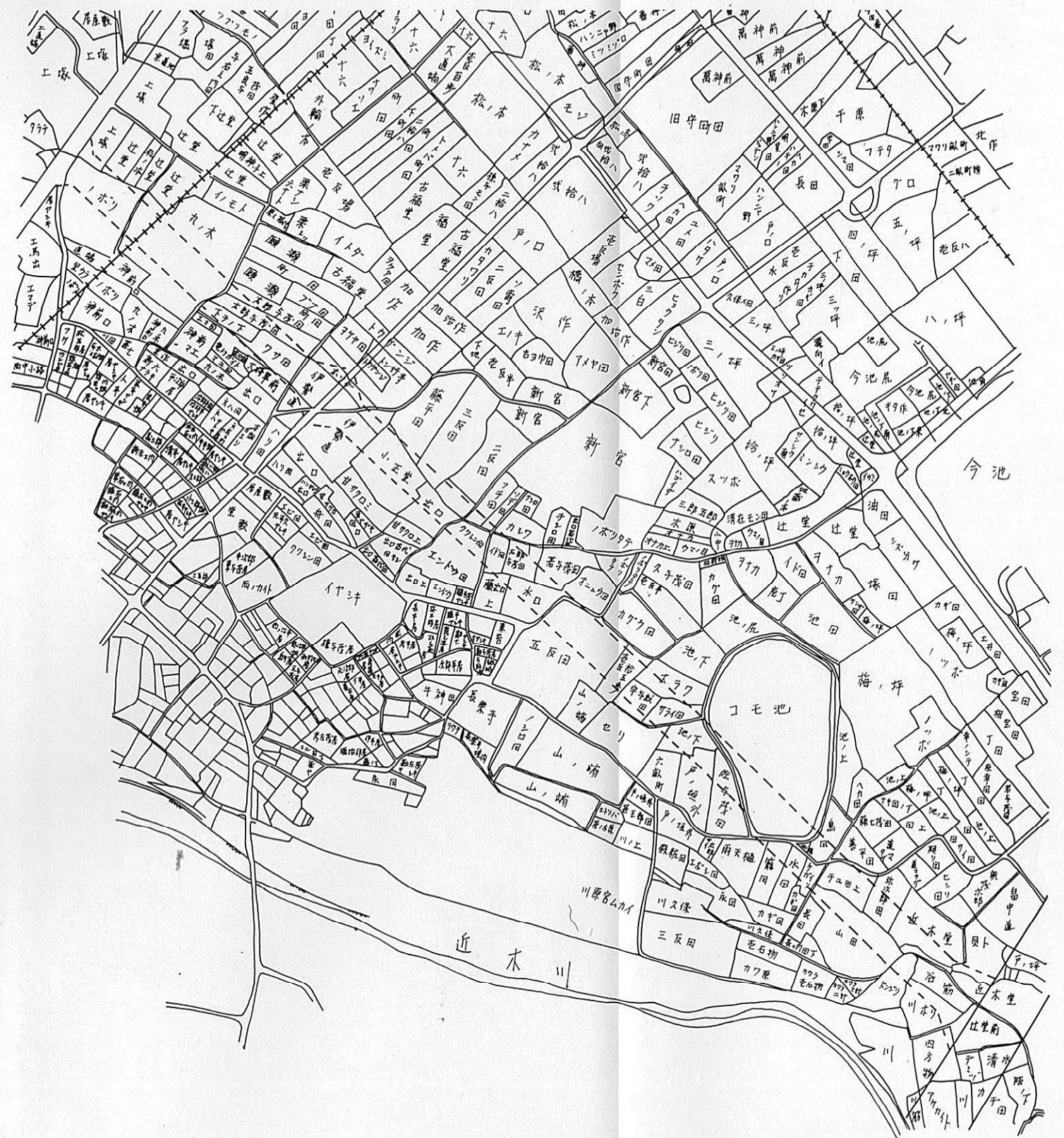
遺跡では後期のものとみられる柱穴群や弥生式土器を検出している。そしてこれら近木川流域の諸遺跡は、地理的に見てそれ独自にか、津田川流域の諸遺跡を含めてか、ひとつのまとまった遺跡群として把握できるようである。

古墳時代になっても、弥生時代と古墳時代の遺跡とが多く複合していることから、その基本的な在り方に変化は認められず、古墳時代前期末か中期初頭に編年される丸山古墳の存在に、弥生時代以来発展してきた在地の関係が集約されているのかもしれない。少なくともこの地域では単独に存在するこの前方後円墳（全長66m）の造営主体は、そのすぐ北側を流れる近木川と深い関りを持つ集団であったことはまちがいない。

奈良時代には、付近に古瓦を出した加治神前遺跡があり、畠中遺跡でも貝塚市教育委員会において、その掘り方の1辺が1m近くもある2間×3間の掘立柱の建物が検出されている。これとは少し距離をもつが、大阪府教育委員会による調査では、平安時代前半（9～10世紀）のやはり掘立柱建物が5棟確認されており、今回の調査でも引きつぐ時期（平安時代末）の掘立柱群が見つかったことは、この地に継続して一定の広がりをもつ集落が営まれていたことが想定される。

今回の調査においては調査面積に比べて出土遺物量はかなり少ないが、その中で中国製磁器片がよく目につき、また近接する橋本遺跡では、まとまった中国製磁器（鎌倉～室町時代）の存在が従来から知られていた。そしてこれらを含めて和泉地域では13遺跡で同様な遺物が見つまっているが、これらの中国製磁器の流通経路の一環として近木川河口も注目される。⁽²⁾文献資料によると、『行基年譜』に和泉国日根郡日根里近木郷内の「^{こうざきふなだまり}神崎船息」という記載が見え、また「神崎千軒」と呼ばれる集落の伝承は、この河口が港として栄えた時期の反映だと考えられる。

『高野山文書』にみられる日根郡近木荘は、その発展過程、内部構造が解明されている数少ない荘園のひとつであるが、その故地は貝塚中央線建設予定地を含み、近木川の両岸にわたっており、今後の調査の発展によっては、文献史学の成果とつぎ合わせることで近木荘の実態にアプローチできるものと思わ



第3図 周辺の地籍図

れる。

貝塚地域の海岸部には5ヶ所の平安時代寺院址が確認されており、そのうちのひとつが今回の調査対象となった近義堂遺跡（廃寺）である。従来から宝塔文の古瓦などが採集され平安時代後半の寺院であると考えられてきたが、今回の調査による出土遺物や古瓦によって、その時代観は裏づけられ、それ以降室町時代頃まで存続したことが確認された。そして遺跡名となった「近木堂」という字名は、藤原経房の日記『吉記』の承安4年（1178年）9月の条に、「廿三日丁未、天霽国静、雲曙之比、国府、巳刻着古木堂昼養、申刻信達宿^{彌勒堂}」（傍点筆者）と見える「古木堂」と対照でき、この寺院は、熊野参詣の皇族や貴族達の宿泊、休憩所として機能していたようである。そして挿図第2図の明治18年の地形図を見ると、熊野街道が近義堂遺跡よりも、500mほど山側を走っており、この両者の位置関係は、熊野街道のコースの検討の手がかりになるかもしれないという指摘もある。

また挿図第3図の地籍図には、先の「近義堂」のほか、「一ノ坪」「三ノ坪」といった条里に関する字名が多く残り、また周辺にも条里地割の名ごりがみられ、これらも重要な歴史的環境を形成している。

注(1) 『都市計画道路貝塚中央線建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書』（財）大阪文化財センター

『畠中遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 大阪府教育委員会

『貝塚市遺跡群発掘調査概要・Ⅰ』 貝塚市教育委員会

上記の三書は本文を書くに当って大変参考にさせていただいた。

(2) 西山要一「大阪府貝塚市橋本遺跡の遺物」『摂河泉文化資料』5

(3)(4) 佐川林「日根郡近木荘の惣社と近義堂及び五十四座」

『摂河泉文化資料』18

〔Ⅲ〕 調査の方法と経過

貝塚中央線新設工事予定地内（全長1150m、幅員32～40m）の両側端に、幅2mのトレンチを設定し、地表下～地山面迄の土層堆積の観察・遺構有無の確認・遺構の調査・遺物の採集・花粉分析用土壌サンプルの採集などの作業を実施すると共に、土層断面・遺構平面の測図並びに写真撮影による記録化を行なった。

試掘トレンチは、地形並びに道路他の規制によりNo.1～No.27トレンチに区別して設定し、更に畦、水路などに応じてそれを①～⑤に細分して掘削した。

調査にあたっては、隣接農耕地への影響を十分配慮した為、トレンチの設定位置及び長さについては、現地の状況に即して設定した。

調査を完了したトレンチは、遺構面より20cm迄海砂を用いて保護をし、さらにその上位を排土した土で埋めもどして原状に復した。

〔Ⅳ〕 調査の結果

遺構の有無、その時期と性格などについて、その概要を挿図第18図に示すと共に、各トレンチの状況については図版第1～17図に示した。

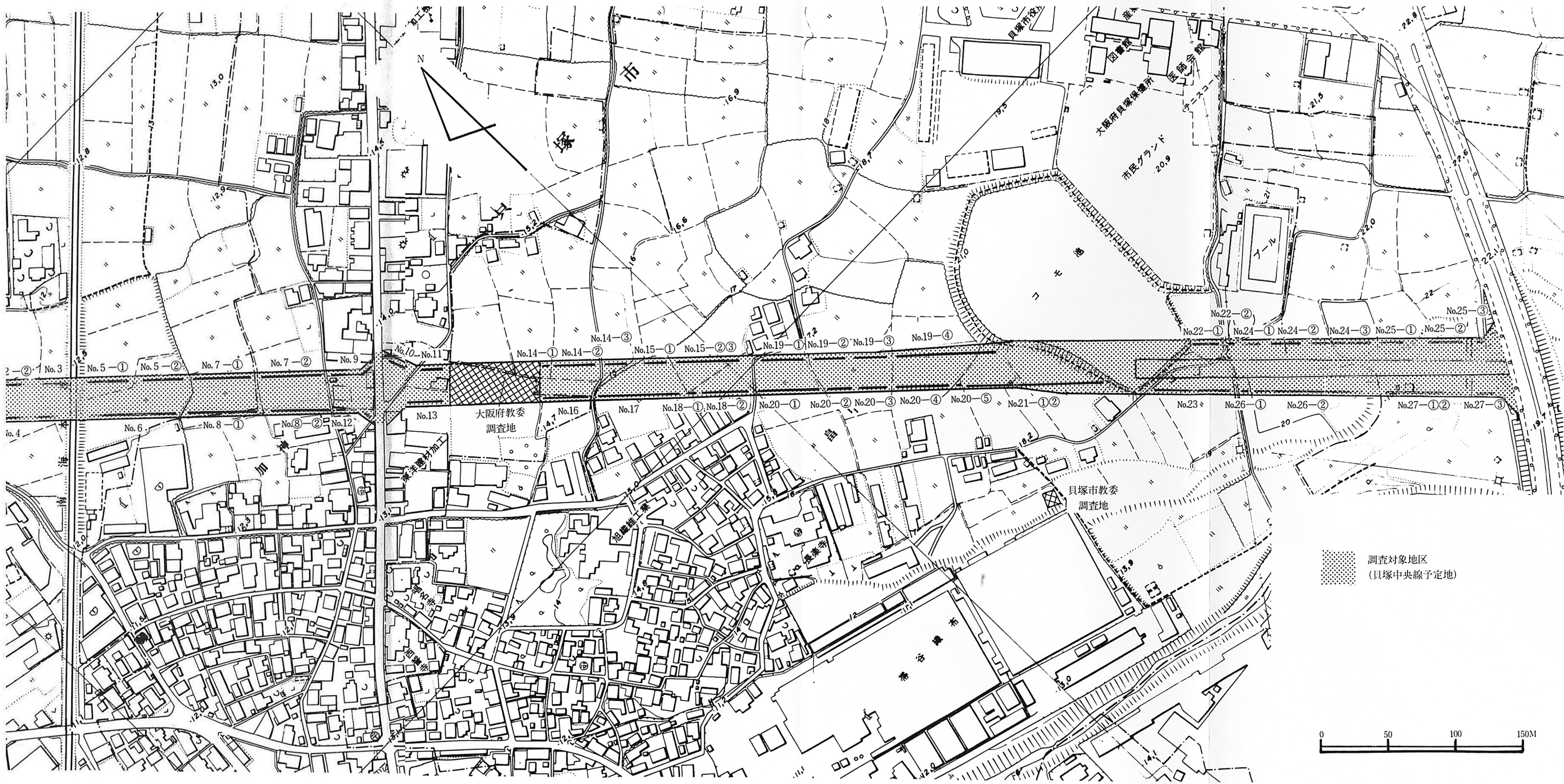
ここでは、調査地域全体のおおまかな基本層序を示し、次いで各トレンチの状況を報告することとする。

1. 基本層序

トレンチ毎に層序の差やかなりの個性も認められるが、おおむね次のようなものになる。

第Ⅰ層	耕土・床土	近世～現在
第Ⅱ層	黄色系土層	中世～近世
第Ⅲ層	灰色・褐色系土層	中世
第Ⅳ層	黒色系土層	古墳時代～中世
第Ⅴ層	褐色系土層	それ以前
第Ⅵ層	地山（黄色系粘土・灰色系砂礫・混礫黒褐色系土層他）	

第4図 トレンチ配置図



2. 各トレンチの状況

No.1 トレンチ

本トレンチは、調査地内の最も西端、国道26号線の東側に接する。

耕土を除くと、すぐさまトレンチ東側にて石炭ガラをつまった幅2m以上、深さ0.3mの廃棄物処理坑があらわれた。印判による染付磁器片や瓦片もふくまれており、層序も考えあわせると明治時代あるいはそれ以降のものである。

トレンチの西半分では、床土の下に厚さ10cm程度の灰褐色土層があり、その下はただちに灰褐色砂礫地山層があらわれる。もし人為的な遺構が掘りこまれているとすれば、この砂礫層より上からであろうが、先述の処理坑以外は何等の遺構もみられなかった。砂礫層は、60cmの厚さで堆積し、その下は砂層となっていた。

本トレンチの周辺は、明治時代以来の大規模な粘土採掘により、旧地形が大きく改変された所が多いが、当該部分は、地表下にすぐさま砂礫層があるため、採掘による旧地形の削失はまぬがれたものとみられる。

No.2 トレンチ

国道26号線と南海本線とのあいだに設けた長いトレンチだが、地形と水路に規制されて①と②に2分して掘削した。

① トレンチ 貝塚中央線が国道26号線にとりつく部分に設けたため、それに応じてトレンチの形状も「く」の字形となる。

この地は、南・西・北側と比べて0.5～1m程度高いことから、粘土採掘がされなかった可能性が強かった。調査の結果、そのことを確認すると共に、いくつかの遺構も検出した。

耕土・床土・黄色土層を除くと、トレンチ西半では淡黄灰色微砂質土の薄い

堆積層があり、この土をふくむ幅10cm、深さ3cm程度の細く浅い溝状遺構が幾条もみられた。遺物としては、瓦器・土師器の極細片がわずかにみられ、中世あるいはそれ以降の遺構と考えられる。同様の遺構は、No.20トレンチなど、いくつかのトレンチでみられた。

これより下では、トレンチ中央部で幅8m、深さ0.5mもの大きな落ち込みがあり、中には黒褐色粘土層と黄色・橙色粘土のブロック層が堆積していた。遺物の出土はなく、層序からみて中世より以前のものと判断できる。

この落ち込みの上位や両側一帯には、径10cm弱の杭状小ピットが多数分布している他、径50cm前後の大きなピットもいくつかみられる。後者は、形状からみて必ずしも柱穴とは判断できない。遺構の検出されるのは、トレンチ東半では黄褐色粘土地山面、西半では灰褐色砂利混地山面である。

② トレンチ ①と連続するが、現地表面はそれより50cm程度低い。

耕土・床土を除くと、トレンチ西半ではただちに砂礫地山層があらわれた。対して、中央部より東半では各種粘土と礫の混った軟弱な土層があらわれた。この部分が、従来からいわれる粘土採掘坑である。採掘坑は、地山層中の黄色・白色・灰白色粘土層をおって東にむかって深くなっており、東端では現地表下2m以上にもたつする。粘土層の下は、礫層となる。トレンチ西半の砂礫層は、粘土層を切りこむものである。

人為的な遺構がみつかりとすれば、この砂礫層の上面であろうが、先述の採掘坑以外は何等の遺構も検出されなかった。すでに旧地表面が削りとられているのであろう。

No.3 トレンチ

南海本線のすぐ西側に設けたトレンチで、No.2—②トレンチの東につづく。

耕土・旧耕土を除くと、全面に粘土と礫の混った軟弱な土層があらわれた。粘土採掘坑である。トレンチ東端では、現地表下1.2mにて採掘坑の底をみと

めたが、さらに西にむかって深まっており、最深部では2 mにもたつするものと思われる。採掘坑の底については部分的に確認したが、埋土が軟弱な土層であるため、隣接農耕地への影響を考慮して全体を確認するにはいたらなかった。

このように、当該トレンチ部分は、粘土採掘により全体的に旧地形が削られており、遺構はまったくのこっていないかった。

No.4 トレンチ

国道26号線と南海本線とのあいだに設けた長いトレンチである。現地表面で50cm程度の段差ある地形にまたがっており、低い西側と高い東側とでは土層堆積にも差がみられた。ただしいずれも遺構の確認はまったくなかった。

西側では、耕土および旧耕土を除くと、ただちに黄色砂礫層あるいは黄色砂粘土層があらわれた。これらの土層は、湧水がはげしく軟弱だが、いわゆる地山層と理解できる。ここにも各種粘土のブロックの混る軟弱な埋めもどし土がみられ、やはり部分的に粘土採掘がおこなわれていた。垂直に掘りこまれた最深部は、現地表下1.2 mをはるかにこえる。

こうしたことや、この地が周囲と比べて低いことを考えあわせると、旧地形は大きく削りとられているとみられる。

トレンチ東側は、耕土下すぐさま灰褐色砂礫層があらわれる。上面での遺構はまったく確認されない。砂礫層の下は、淡灰黄色砂混粘土層がある。

No.5 トレンチ

南海本線のすぐ東側の低地に設けたトレンチである。

耕土を除くと、ただちに黄色粘土地山層があらわれた。それを切りこんで砂礫をふくむ自然流路が幾条もみられる。トレンチ中央には、粘土採掘坑がある。この埋土の中に黒色粘土のブロックがふくまれることから、採掘の以前にかけて黒色土層の堆積があったことをうかがえる。

遺構の確認はない。

No.6 トレンチ

南海本線のすぐ東側の低地に設けたトレンチである。

トレンチ東側の層序は、耕土・暗茶褐色混礫土・そして灰褐色混礫粗砂層となる。西半は、耕土・黄褐色粘質土・もしくは灰褐色粘質土層となる。いずれも耕土の下は、ただちに地山層があらわれた。地山層上面では、6ヶ所の粘土採掘坑がみつかった。埋土の中に黒色粘土ブロックがふくまれることから、かつて黒色土層の堆積があったことを示している。

遺構の確認はない。

No.7 トレンチ

南海本線と市道小瀬王子線にはさまれた地の中央に設けた長いトレンチである。No.5・6トレンチの位置する西側の低地と比べると、現地表面は1m以上も高い。

耕土・床土の下には、灰黄色土・黄灰色土・あるいは灰色粘質土層など、土師器・瓦器・陶磁器・須恵器細片をふくむ土層がある。

床土を除いた時点で、トレンチ最西端に印判染付磁器片をふくむ方形の掘りこみを、中央寄りに灰色粘質土層上面では数条の溝や落ち込みを、また最東端では井戸状の掘りこみを検出した。出土遺物の層序からみて、近世～近代のものだと判断できる。

灰色粘質土層の下は、土師器・瓦器・須恵器片をふくむ灰褐色粘質土層が、次いで須恵器片をふくむ黒色土層となる。黒色土層を除くことにより、黄色粘土・砂質・砂の地山面があらわれた。この面で、黒色土をふくむ各種落ちこみを数ヶ所で検出した。遺物の出土もなく、人為的なものか否かの判断はむつかしい。人為的な遺構としては、トレンチ東端近くで、幅70cm、深さ40cmの溝が

ある。層序からみて、中世よりさかのぼるものであろうか。

このように、当該トレンチでは遺構の検出をみたが、全体的には希薄で、遺物の数も少ない。そうした点では、平行して設定したNo.8トレンチの状況と著しく異なる。

No.8 トレンチ

南海本線と市道小瀬王子線のあいだにはさまれた地の中央に設けた長いトレンチである。今回の調査で最も集中して遺構群が検出されたトレンチの一つである。遺構の実測図及び写真では、東半をNo.8-①、西半をNo.8-②とした。

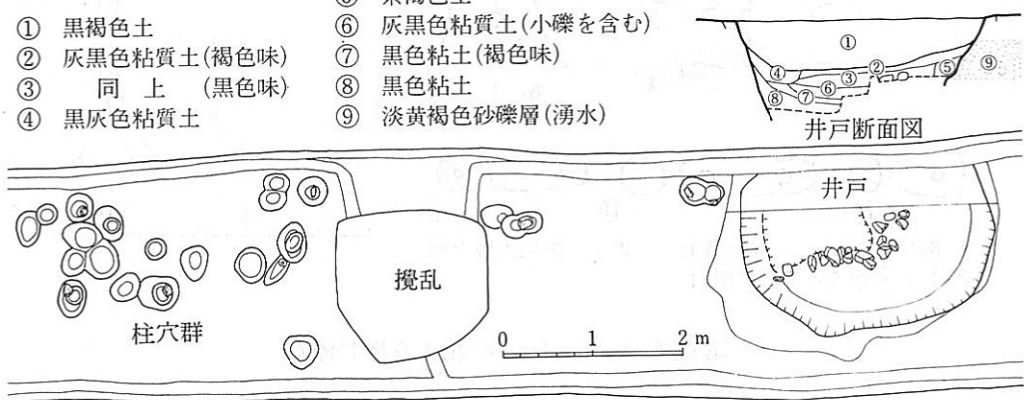
トレンチ東半では、耕土・灰褐色土・灰黄色土・黒色土の層序をなし、この下が地山層となる。

遺構群が集中して検出されたのは、黒色土層上面で、多くの柱穴を主体に、井戸・溝・その他落ち込みがある。(挿図第5図) 出土遺物として瓦器や土師器片をふくんでおり、平安時代後期あるいはそれに近い時代のものと考えられる。柱穴には、根石とみられる礫がおかれているものもある。柱穴群の東に接して、径約3mの井戸がある。内に河原石が多く出土し、井筒上位にかけて石組がなされた可能性もある。井戸の下底部は湧水が激しく、周囲の砂層がくずれはじめたので掘削を途中で断念した。遺物には、瓦器・土師器・そして須恵

井戸内堆積土層名称

- ① 黒褐色土
- ② 灰黒色粘質土(褐色味)
- ③ 同上(黒色味)
- ④ 黒灰色粘質土

- ⑤ 茶褐色土
- ⑥ 灰黒色粘質土(小礫を含む)
- ⑦ 黒色粘土(褐色味)
- ⑧ 黒色粘土
- ⑨ 淡黄褐色砂礫層(湧水)



第5図 No.8トレンチ 遺構平面図(部分)

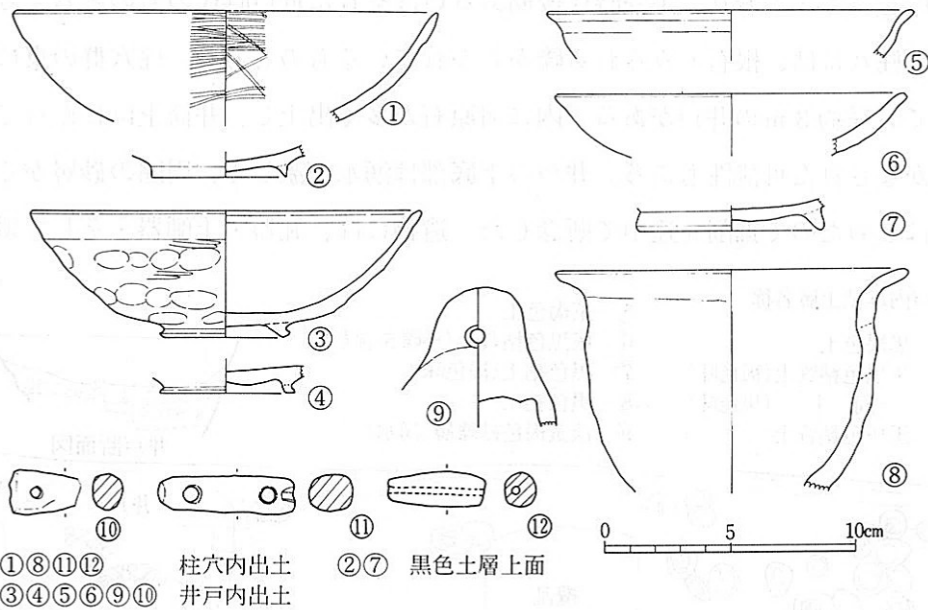
器蛸壺や土師質土錘などがある。(挿図第6図)

なおトレンチ東側では、流路ともみられる砂の堆積する大きな落ちこみの一部を検出した。層序からして中世以降のものとおもわれる。

トレンチ西半では、耕土・旧耕土・黄灰色土・黄色粘土・黒色土の層序をなし、この下が地山層となる。地山面を形成するのは、西端近くでは黒色砂礫土層で、それより東側では暗黄色土層である。地山層直上の黒色土層中には、瓦器・土師器片もふくまれ、中世の堆積土層であることがわかる。

遺構としては、耕土を除いた時点で、トレンチ西端にて近世遺物をふくむ落ちこみを、地山面では、柱穴・溝や各種落ちこみを検出した。地山面の落ちこみの一つから瓦器碗を、2ヶ所のピットからは焼土を、その他土師器片等の出土をみた。よって地山面の遺構は、平安時代後期頃のものと考えられる。

このように、当該トレンチにおいては、東半部と西端近くの2ヶ所に遺構の集中する地を確認する結果をえた。柱穴および井戸があり、瓦器などの遺物をふくむことから、平安時代後期頃の集落の一部が確認されたものと判断できる。



第6図 No.8トレンチ 出土遺物実測図

No.9 トレンチ

市道小瀬王子線の西側に設定したトレンチで、貝塚中央線とのとりつき部分に位置する。そのため、形状も「く」の字形をなす。都合で2分して掘削した。

現地地表下50cmまでは盛土で、以下耕土・旧耕土・灰褐色土・淡褐灰色土の層序をなす。他のトレンチで見られる黒色系土層は、トレンチ西端の1部にしかみられず、その下は淡灰褐色砂礫地山層となる。

旧耕土を除いた時点で、砂礫地山層より湧水が激しくなり、遺構の検出は困難をきわめた。地山面では、不明瞭ながら数ヶ所の落ち込みやピットを検出し、土師器・須恵器・瓦器細片の出土をみた。

No.10 トレンチ

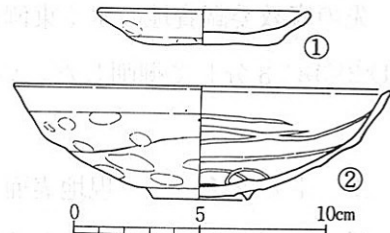
市道小瀬王子線の東側に接して設けたトレンチで、かつてこの地一帯が繊維工場であったことから盛土やコンクリートの基礎がみられる。

盛土の下は、耕土・旧耕土・暗灰茶色砂質粘土層の層序をなし、この下が灰褐色粘質土地山層となる。地山面では、暗灰茶褐色砂質粘土や黒色土をふくむ落ち込みを数ヶ所で検出した。湧水が激しく調査は困難であった。

No.11 トレンチ

市道小瀬王子線の東側に設けたトレンチで、先の大阪府教育委員会が発掘調査した地（以下、府教委調査地と称する）の西側に接する。

盛土・耕土・旧耕土・床土を除いた淡灰褐色地山面で、落ちこみ2ヶ所を検出した。落ちこみ-1からは、土師器小皿1個体が、落ちこみ-2からは、瓦器碗1個体と瓦器小皿3個体が重ねおかれた状態で出土した。（挿図第7図）



①② No.11トレンチ 落ち込み-2出土

第7図 No.11トレンチ 出土遺物実測図

No.12 トレンチ

市道小瀬王子線の西側に接して設けたトレンチで、「く」の字形をなす。現水路に規制されて3分にして掘削した。

全体に表土と盛土が厚い。盛土の下は、黄色・灰色系土層が3～4層にわたって堆積し、その下が灰褐色砂礫地山層となる。No.9～11トレンチと同様、湧水がはげしく、トレンチ中央でのみ地山面で落ちこみを検出したにとどまった。内に黄灰色粘土と黒色粘土のブロックが堆積しており、土師器細片の出土があった。

No.13 トレンチ

市道小瀬王子線の東側に設けたトレンチである。かつて繊維工場跡であり、多くの攪乱坑やコンクリート基礎が集中する。そのため、トレンチの3分の1で遺構面が遺存するにとどまった。

現地表面下約1mまでは、工場廃絶時以降の盛土であり、以下耕土・旧耕土・床土・褐色土・淡茶色土の層序をなす。その下には、淡灰褐色砂地山層がある。

遺構は、淡茶色土層上面で落ちこみと柱穴ともみられるピット3ヶ所を検出した。

No.14 トレンチ

先の府教委調査地のすぐ東側に設けたトレンチで、現在の水路に規制されて①②③に3分して掘削した。いずれも遺構の検出をみた。

① トレンチ 現地表面から地山面までは、わずか40cm程度しかない。

耕地の下には、灰白色土と黄褐色粘質土層があり、土師器・陶器細片が少数出土した。

淡灰色砂礫地山層上面には、黒色土をふくむ溝、灰茶色土をふくむ落ちこみを検出したが、遺物の出土はなかった。

② トレンチ ①トレンチと同様な層序をなし、やはり現地表面から地山面までは35cmと浅い。黄褐色粘質土層より、須恵器・磁器・瓦質土器細片が出土した。

灰褐色砂礫地山面では、茶黒色土をふくむ溝や落ちこみを検出した。溝内からは、土師器片が十数点出土した。

③ トレンチ 現地表面から地山面までは、トレンチの西端で70cm、東端で50cmあり、地山面は東高西低の緩傾斜地形となる。

耕土の下の3層には、中近世遺物がふくまれており、その下の暗茶灰色土層上面で、中世遺物をふくむ遺構面を検出した。遺構として、トレンチ東域にかたよって溝・落ちこみ・ピットなどがある。

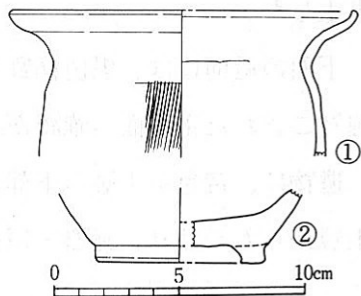
中世遺構面の直下には、灰黄色砂礫あるいは砂質土地山面があり、ここでも溝・落ちこみ・ピット・柱穴などの遺構を検出した。溝内や落ちこみ内からは、土師器・須恵器片の遺物が出土した。(挿図第8図)

このように当該トレンチにおいては、東域③トレンチで中世遺構の、また下位の地山面では全域①②③トレンチにわたって奈良時代の遺構が確認された。

No.15 トレンチ

府教委調査地の東方に位置する。現水路や畦畔に規制されて①②③に3分して掘削した。

① トレンチ 耕土の下の黄色系土層は厚さ約50cmだが、土層断面の観察では4層に細



① No.14-③トレンチ 溝-1出土
② No.15-②トレンチ 灰褐色土層出土

第8図 No.14・15トレンチ 出土遺物実測図

別される。この内3層の上面では、近世の陶磁器や瓦を大量にふくむ落ちこみを検出した。また灰黄色土層と下の暗黒色土層との境では、須恵器・土師器片がかなり出土したが、この面では灰黄色土をふくむ浅い数条の溝を検出するにとどまった。

暗黒褐色土層も、色調や質の差から3層に細別できるが、いずれも遺物の出土はみなかった。

その下の地山面では、不定形な落ちこみやピットを検出したが、やはり遺物の出土はみなかった。ただ落ちこみの一つに、礫を多数堆積させるものがみられた。

② トレンチ 現地表面から黒褐色粘質土層までの深さは、トレンチ西端で70cm、東側で50cmを測る。耕土の下の黄色系土層は、東へゆくにつれて薄くなっている。

遺構が検出されたのは、黒褐色粘質土層の上面、およびその下面、そして下の灰褐色粘質土層の除去面の3面である。

上面の遺構は、トレンチの中央にて幅5m、深さ0.2mの溝、あるいはそれを切っている幅0.3mの溝、土師器片をふくむピット、不定形の落ちこみ、さらには全面に散在する枕状小ピットなどがある。

中間の遺構には、トレンチ西端にて幅4m、深さ0.6mの溝がある。溝内には、黒褐色粘質土層が堆積しており、遺物として焼けたとみられる土塊が数個出土した。

下面の遺構には、黒色粘質土をふくむ溝1条がある。ただし湧水がはげしく、掘りこまれた土層面の確認が不十分となった。

遺物は、黄色系土層の下部に多く、瓦器・須恵器・土師器細片が、黒褐色粘土層からもやはり、瓦器・須恵器・土師器細片の出土をみている。

③ トレンチ 本トレンチは、②より1段高い地に位置する。遺構の検出されたのは、黒色粘質土層の上面と、その除去面の2面である。

上面では、トレンチ東域にて幅0.5 m、深さ0.1 mの溝がある。同時に、この溝の埋没以降に穿たれた小ピットもみつかった。この小ピットには、近世初頭の土師器小皿がふくまれていた。この他、ピットや落ちこみも散在しており、そのいくつかからは土師器や瓦器細片の出土がある。

下面の遺構として、不定形の落ちこみやピットがあるが、時代の判別できる遺物の出土はなかった。

このように当該トレンチでは、いずれも2～3面の遺構面が確認できた。上・中面については層序や出土遺物から近世・中世のものと考えられるが、下面については出土遺物もほとんどなく、層序からしてそれらより先行するものと理解したにとどまった。

No.16 トレンチ

府教委調査地のすぐ東側に接するトレンチである。既に調査地でも平安時代の掘立柱建物5棟など遺構の存在が知られており、当該トレンチでもその続き部分とみられるいくつかの遺構が検出された。

耕土・床土を除くと、瓦器・土師器細片を含む黄褐色土層がある。この下には、トレンチ東端以外では、黒色土層の堆積をみる。東端だけは、すぐさま黄色細礫混黄褐色地山層があらわれる。対して西端では、深さ20cm程度の広範囲な落ちこみがあり、黒色粘土層が堆積している。

これより東側一帯の高い地には、多数の柱穴やピット、あるいは径2 m程度の不定形の落ちこみなどが散在する。重複して、これらより新しい杭状小ピットもまた散在する。これらの遺構の内には、黒色土・黒褐色土あるいは暗灰色粘質土の各種の土をふくむものがあり、その掘りこみ面にも若干のレベル差が認められる。

ただし、遺構が集中する割には、出土遺物が極端に少なく、その時代判定が困難である。層序的には、中世堆積土層の下にあること、黒色土層中より土師

器極細片の出土をみたこと、あるいは隣接する調査地の所見などを考えあわすと、それらは中世をさかのぼる遺構と推定できよう。

No.17 トレンチ

No.16トレンチの東側に位置するものである。掘削の最終段階でトレンチ中央部の南壁が土圧並びに激しい湧水により、2度にわたって崩壊しはじめたので、南接する耕地に被害がでぬようその部分を急掘埋めもどした。よって観察に一部不十分が生じた。

耕土・床土を除くと、灰黄色粘質土層や灰褐色粘土層の堆積がある。

トレンチ西端近くでは、灰褐色粘土層をきりこんで、2ヶ所の柱穴を検出した。径30~40cm、深さ20cm程度で、灰色粘土をふくむ。両者の間隔は、2.7m。遺物の出土はないが、層序から中世以降のものと理解している。

この下には黒色土層が堆積しており、これを除くといくつかの遺構がみいだせる。

トレンチ西半では、東西にのびる幅1m、深さ0.2mの溝、中央では、幅5m、深さ0.5mの大きな落ちこみが、東半では、径1.8×1.2m、深さ0.3mの落ちこみがそれぞれ検出された。いずれも黄色砂質あるいは黄褐色砂地山層に掘りこまれているが、遺物の出土はない。

以上のように当該トレンチでは、2面の遺構面を確認した。層序から、前者は中世以降、後者はそれ以前とみられるが、確証されない。

No.18 トレンチ

No.17トレンチのさらに東側に位置する。現水路に規制されて①②に2分して掘削した。

① トレンチ 長さ12mの短いトレンチである。耕土・床土を除くと、

瓦器細片をふくむ黄灰色粘質土層や灰褐色粘土バンド層がある。

これらを除くと、トレンチ中央にて、幅 0.8 m、深 0.2 m の溝を検出した。下位の黒色土層上面に掘りこまれ、内部には黒褐色粘土が堆積している。遺物の出土はない。

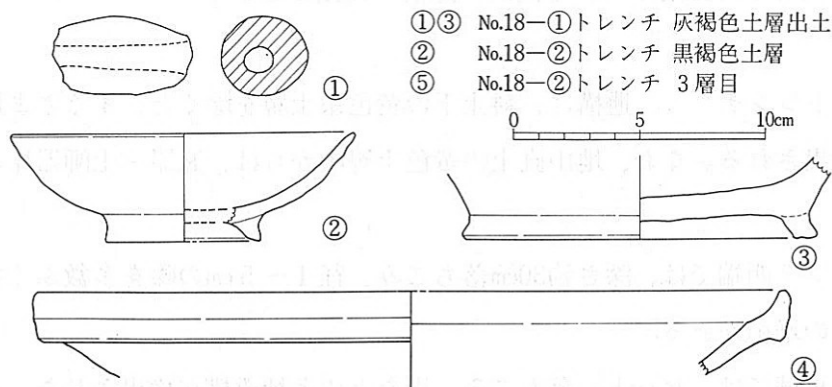
地山面であろう混礫黒褐色土層上面では、トレンチ東半にて径 20cm 程度のピット、あるいは径 50cm 程度のピットなどがある。この東半地山面は、全体的にかなりの起伏を生じている。

トレンチ西寄りには、幅 2 m、深さ 1 m 以上にもおよぶ大きな落ちこみがある。はげしい湧水による底部のくずれにより、現地表下 1.8 m までの掘削にとどまった。

いずれも出土遺物はない。

② トレンチ 耕土・床土を除くと、トレンチ中央と東端では部分的に混礫黒褐色地山層があらわれる。東半では、地山面の低い部分に黒色土の堆積をみるが、西半では、黄色土層や灰褐色土層が直接遺構面である地山面にのっており、黒色土は部分的にみられるにすぎない。遺構は、トレンチ全体で各種検出できた。

トレンチ東端では、幅 1.5 ~ 0.8 m、深さ 0.3 m の南北にのびる溝、中央付近では、径 1 m、深さ 0.5 m の落ちこみがある。



第 9 図 No.18 トレンチ 出土遺物実測図

中央から西側では、径30cm前後の柱穴がかなり集中して検出された。その中には、深さ60cmにも達する深いものもみられる。

西端寄りには、幅4.8m、深さ1mもの大きな溝状の落ちこみがあり、黒褐色粘土ブロックや砂の堆積をみせている。

それと重複して、トレンチの北壁下に方形とみられる深い掘りこみの一部を確認した。ただしその大半が調査区域外におよぶため十分に把握されないが、形状や堆積土層からして井戸とも考えられる。現地表下2mまで掘り下げた。層序や位置関係から、先の柱穴群との関係が考慮されよう。いずれも遺物は極端に少なく、柱穴の一つから土師器細片がいくつか出土したにとどまった。

遺構として、これらの他にもトレンチ西端においても大型の掘りこみの一部を壁際で検出している。

このように、当該トレンチにおいては全面的に遺構の分布を検出する結果をえた。特に注目されるのは柱穴群と井戸状遺構(?)である。時代的には、層序と極少数の遺物から奈良時代頃のものとして推測している。遺構の重複関係から、遺構面は2面あるものと理解される。

No.19 トレンチ

コモ池の西方に位置する長いトレンチで、現水路や畦畔の規制により、①②③④に四分して掘削した。全面的に遺構の検出がされた。

① トレンチ 遺構は、耕土下の黄色系土層を除くと、すぐさま地山面にて検出される。なお、地山直上の黄色土層中からは、瓦器・土師器片の出土をみる。

トレンチ西端では、深さ約30cm落ちこみ、径1～5cmの礫を多数ふくむ黒茶色土層の堆積がある。

また東域では、ピット、落ちこみ、溝などの各種遺構が検出された。ピットは、径30cm、深さ55cmのもので、内より焼け土塊、炭化物、焼け土などが出土

した。落ちこみ内からは、少数の土師器片、溝内からは、土師器片と共に、径12cm～15cm、厚さ12cmの砂岩質礫の出土もみた。

② トレンチ 耕土の下には、黄色系土層が30～35cmの厚さで堆積している。この上半より染付磁器・陶器・須恵器・瓦器・土師器片が出土し、下半より瓦器・土師器・須恵器細片が出土した。下の層序は、淡灰黄色土層・暗灰茶色土層、そして黄色粘土地山層となる。

淡灰黄色土層中からは、奈良時代の土師器・須恵器片が出土し、地山面では、径5～10cmの杭状小ピットを多数検出した。トレンチ中央付近の杭状小ピット直下には、暗黄灰色土層が幅広く堆積しており、それを除去すると幅11m余の落ちこみと、その西側で幅60cm、深さ10cmの溝を検出した。遺物はみられない。

③ トレンチ 遺構は、淡黄灰色粘質土地山面で検出された。

トレンチ東域では、幅60～80cm、深さ20cmの溝がある。その方向・規模から④トレンチのものと連続するとみられる。溝底から大きい礫3個が出土しており、状況からして人為的に搬入されたものと考えている。溝内には、暗茶褐色粘質土層が堆積している。

トレンチ西域では、やはり地山面で杭穴状のピット、あるいは不定形な落ちこみを検出した。

④ トレンチ 耕土・床土を除くと、中近世遺物片をふくむ黄色砂質土層があり、それ以下各層上面で遺構が検出された。

黄色土層上面では、トレンチ西域で瓦器片をふくむ数十条の細く浅い溝状遺構が、黄褐色土層上面では中央付近にて土師器片をふくむ3条の溝が検出された。両堆積土層中からも、土師器・須恵器・埴輪片ともみられる細片などの出土がある。

淡灰黄色土地山面からは、トレンチ西域で5条の溝を検出し、その内1条(溝一3)は③トレンチのものと連続するであろう。幅1m余、深さ0.3mの溝内

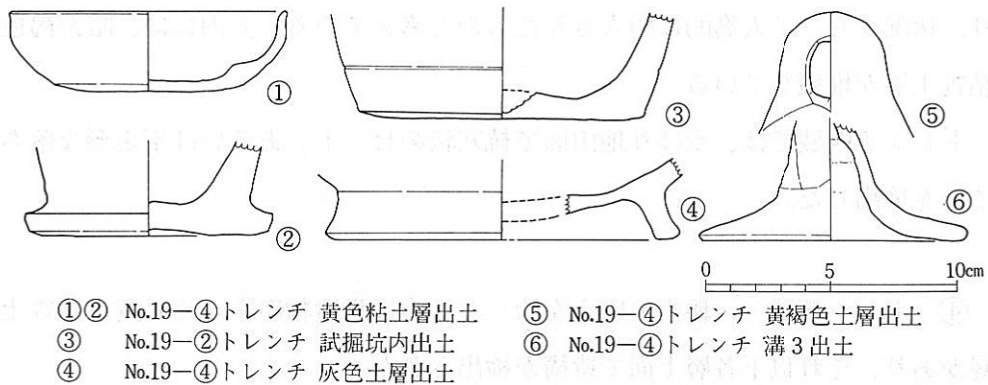
からは、飛鳥時代の土師器・須恵器片の出土をみた。(挿図第10図) その他の溝は、黒色土の堆積するものと、暗灰茶色土のものの区別があり、切りあい関係も認められる。遺物として、各溝とも土師器細片がある。

トレンチ東域では、遺構の検出はなかったが、黄褐色粘土層と地山層とのあいだに堆積する黄褐色粘質土層から、弥生式土器とみられる土器細片がいくつか出土した。

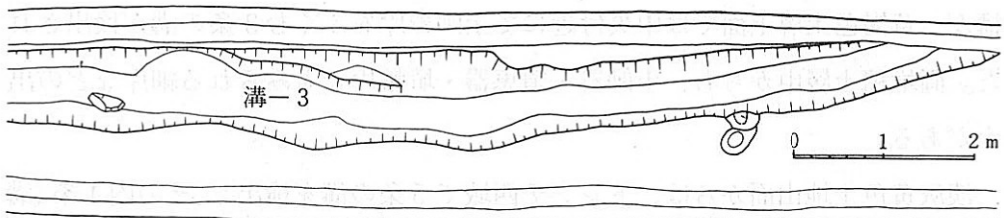
以上のように当該トレンチでは、数面にわたって遺構面を確認すると共に、飛鳥時代の溝の存在を知りえた。注目されるのは、コモ池に最も近い地にて、最下層に弥生時代の可能性がある堆積土層を認めたことである。

No.20 トレンチ

コモ池の西側に設けた長いトレンチで、水路・畦畔・小径に規制されて①②③④⑤に5分して掘削した。全面的に遺構が検出されたが、特に①トレンチで



第10図 No.19トレンチ 出土遺物実測図



第11図 No.19-④トレンチ 遺構平面図(部分)

は飛鳥～奈良時代頃の遺構・遺物が確認された。

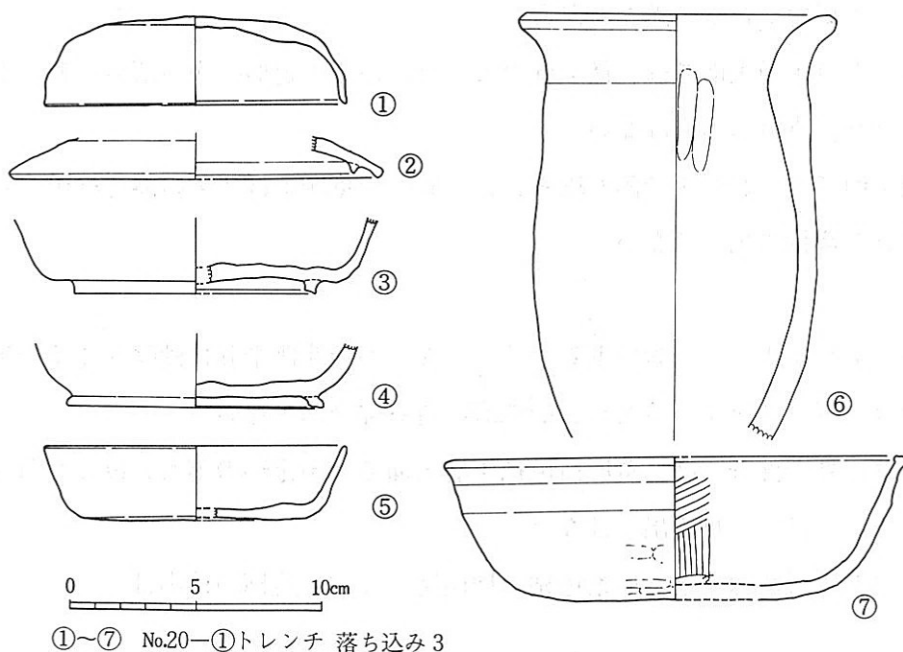
① トレンチ 耕土・旧耕土・床土を除くと、黄色系土層がみられる。2～3層に細分が可能で、上部では近世遺物、下部では中世遺物片をふくむ。遺構は、この下の暗灰茶褐色土層上面と、地山面の2面に検出できた。

上面の遺構としては、土師器甕片などをふくむ柱穴2ヶ所がある。両者の間隔は、2.4mを測る。また落ち込み-3は、須恵器・土師器片が比較的多く出土した。いずれも飛鳥～奈良時代のものである。この他、焼けた土塊をふくむ落ち込み-4がみられるが、共伴遺物はなかった。

下面の遺構には、落ち込み2ヶ所、溝2条、ピット数十ヶ所などがある。いずれも遺物の出土はない。

② トレンチ 遺構は、トレンチ東域では黒色土層上面で、西域では黄灰褐色土層上面で検出した。

遺構には、南北方向の幅1m、深0.1mの溝、ピット・落ち込みなどがある。



第12図 No.20トレンチ 出土遺物実測図

遺構にふくまれる土には、黒色土と灰色土の別がある。

黄灰褐色地山面で検出されたものとして、灰褐色粘土をふくむ大きな落ち込みがある。

③ トレンチ 耕土・旧耕土・黄色系土層という層序は、他と同様である。以下、褐色土層・暗褐色土層・そして黄色粘土地山層となる。ただし、東域では地山層と暗褐色土層とのあいだに茶褐色土層がたまりこむ状況でみられる。

遺構は、暗褐色土層を除いた時点で検出できた。杭状の小ピット、20ヶ所弱の不定形な落ち込みがある。トレンチ西端のものは、柱穴としての可能性もあるが、いずれも遺物の出土をほとんどみない。

④ トレンチ 遺構が検出されたのは、暗褐色土層上面、暗茶褐色土層上面、そして黄褐色粘土（灰茶色砂礫）地山面の3面である。

暗褐色土層上面では、7ヶ所の不定形落ち込みと、3ヶ所の柱穴、あるいはトレンチ東端で新しい溝などがある。

暗茶褐色土層上面では、径4mの大きなものや不定形の浅い落ち込みなどがみられた。遺物の出土はない。

地山面では、数ヶ所の落ち込みと、トレンチ東域では2条の溝を検出した。いずれも遺物の出土はない。

⑤ トレンチ 短いトレンチで、なおかつ北側半分に砂礫をふくむ近世の大きな掘りこみがあるため、旧地形の遺る部分は少ない。

それ以外の部分では、黄灰白色粘土層上面では不定形の落ちこみ3ヶ所を検出した。ただし遺物の出土はない。

その粘土層を除くと、灰茶色粘土地山層となる。遺構の検出はない。

No.21 トレンチ

コモ池のすぐ西側に設けたトレンチである。延長が100メートル近くもあり、便宜的に中央で2分し、西域を①、東域を②とする。いずれも遺構の検出をみた。

① トレンチ 遺構は、耕土の下の黄色系土層を除いた面と、地山面の2面で検出した。

黄色系土層を除いた暗灰茶色粘質土層上面では、土壇・落ち込み、溝などの遺構がある。土壇の平面形には、長方形と正方形の2者があり、深さは40～50cmを測る。遺物として、土壇・溝から土師器・須恵器細片が出土している。

地山面では、溝や不定形の落ち込みがある。遺物の出土は皆無で、遺構面にある暗灰茶色粘質土層から、土師器細片が少数出土しただけである。

② トレンチ 当トレンチの上層部も①と同様、黄色系土層がある。下層部は①に堆積する暗灰茶色粘質土層が途中でなくなり、地山面の暗褐色砂礫層となる。

黄色系土層下の暗灰茶色粘質土層からは、古墳時代後期の土師器、須恵器・形象埴輪ともみられる細片が出土した。数的には、土師器片が多い。

地山面の遺構には、溝・ピット・土壇などがある。西方の遺構からは、少数の土師器・須恵器細片が出土したが、東方の遺構は比較的しっかりしているにもかかわらず、東端の溝上部でわずかに少数の須恵器・土師器細片が出土しただけで、無遺物のものがほとんどであった。

No.22 トレンチ

コモ池のすぐ東南側に接して設けたトレンチである。現道路に規制されて①②に2分して掘削した。遺構の検出は、①だけにとどまった。

① トレンチ 耕土・床土に続いて黄灰色砂質土層を除くと、トレンチ

東半では赤褐色砂礫地山層上面があらわれる。この砂礫層は、トレンチ中央付近で段をなして低くなる。低い部分には、瓦器細片をふくむ灰色粘質土層が堆積する。低い部分の底には更に幅1m、深さ0.3mの「く」の字形をなす溝があり、遺物として須恵器甕細片が出土した。

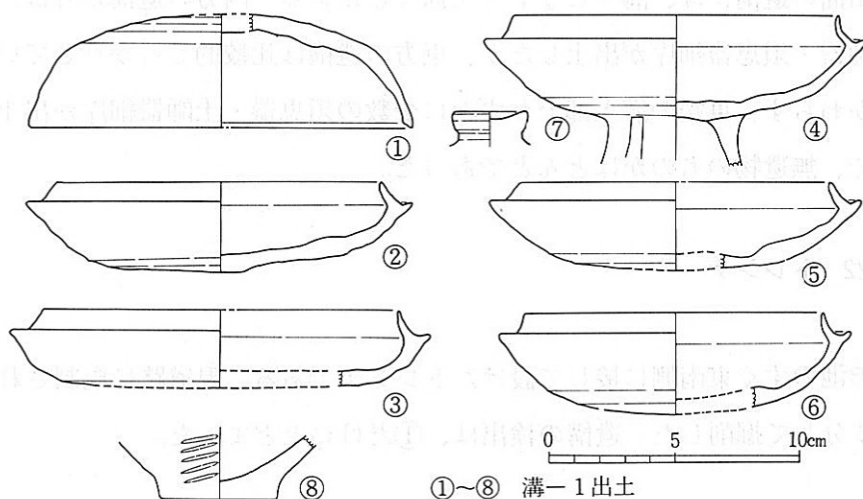
東域の高い地山面では、径70~80cmのピット2ヶ所の一部を検出した。いずれも調査区域外におよんでおり、形状は確認できない。遺物として、須恵器細片がある。

② トレンチ 全体に産業廃棄物が厚く堆積しており、さらに下位には灰黒色ヘドロ層が厚さ1mにもおよぶ。これを除くと、薄い旧耕土と、次いでただちに砂礫地山層があらわれる。遺構・遺物の検出はない。

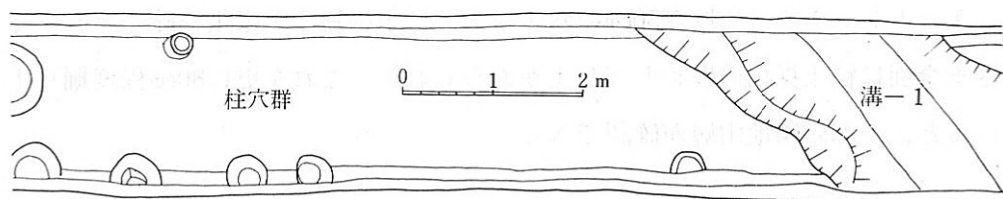
No.23 トレンチ

コモ池のすぐ南側に設けたトレンチである。以前に実施された試掘調査でも顕著な遺構・遺物の検出があった地域であり、今回も同様に検出された。(挿図第13・14図)

耕土・床土を除くと、トレンチ東域ではただちに黄橙色砂質地山層があらわ



第13図 No.23トレンチ 出土遺物実測図

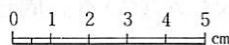
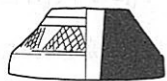
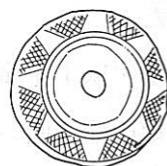


第14図 No.23トレンチ 遺構平面図 (部分)

れる。対して、西域では茶褐色土層の堆積をみて、この下が地山層となる。全体として、西低東高の地形をなす。

茶褐色土層を除くと、トレンチ西端近くに集中して、径30~40cm、深さ40cm程度の柱穴5ヶ所が検出された。中世の柱穴と比較して規模もやや大きく、粗い叩き目痕のある土器細片の出土をみることから、あるいは弥生時代後期にさかのぼる可能性も考慮される。

この柱穴群の東側には、古墳時代後期の溝2条がある。西側の溝-1は、ほぼ南北にのび、幅約2m、深0.5mを測る。内部には、黒褐色土と下に砂の堆積をみる。遺物としては、黒褐色土層中にて多数の礫と共に、須恵器片が主体となって出土した。同時に弥生式土器(後期)底部も混在していた。また鋸歯文を施こされた滑石製紡錘車1点も伴出した。(挿図第13・15図) 東側の溝-2は、東西にのびるが、途中で急に立ちあがって東側で浅くなる。幅1.1m、南壁下で深さ0.5mを測る。溝内には、上位より混砂利黒褐色土、砂礫主体、そして灰褐色土層が堆積し、古墳時代後期の須恵器片の出土をみた。



第15図 No.23トレンチ
出土遺物実測図

No.24 トレンチ

コモ池の東南方に設けたトレンチで、水路・畦畔に規制されて①②③に3分して掘削した。周辺と比較して低い地形に位置する。

調査の結果、いずれのトレンチも粘土採掘により旧地形が削りとられており、遺構は遺存していなかった。

① トレンチ 厚さ50cmの盛土があり、下の耕土・床土を除くと、すぐさま全面に粘土採掘の埋めもどし土があらわれる。これを更に80cm程度掘り下げると、一部砂礫地山層が確認できる。

② トレンチ 本トレンチも全体に粘土採掘による掘り下げがなされており、旧地形は大きく削りとられていた。

③ トレンチ 本トレンチも全体に粘土採掘による掘り下げがなされており、旧地形は大きく削りとられていた。

No.25—① トレンチ

この付近では最も高位の地形に設けたトレンチであり、旧地形の削失はない可能性は強かった。調査の結果、そのことを確認すると共に、中世の遺構も検出した。

耕土・床土を除くと、トレンチ西端ではすぐさま黄色粘土地山層があらわれる。地山面の低い東側部分には、灰色砂質土層が堆積しており、これを除くと2条の溝が検出される。

溝は隣接しており、幅60cm、深さ20～30cmの規模である。いずれも瓦器片をふくんでいる。周辺には径20cm前後のピットも分布しており、小規模ながら柱穴とも考えられる。

No.25—②③ トレンチ

段丘直下、第2阪和国道のすぐ西側の低地に位置するトレンチである。今度の調査地内の最東端にあたる。段丘上に設けたNo.25—①トレンチとの比高差は、5mもある。

いずれも遺構の検出はなかった。

② トレンチ 全体に盛土がなされており、以下耕土・床土・灰黄色粘質土・灰色砂層の層序が確認される。遺構・遺物の検出はない。

③ トレンチ 全体に40～80cmの盛土がなされており、以下耕土・床土・灰褐色混砂粘質土・灰黄褐色土層の堆積をみる。下位の2層は、中～近世の堆積層ともみられ、土師器極細片がわずかに出土した。

その下位には、灰色砂礫地山層がある。遺構は検出されない。

No.26 トレンチ

コモ池東方の段丘上に設けた長いトレンチである。その西端は一部谷状の低地にかかる。従来より、この地一帯に寺院址関係の遺構が存在するのではないかと考えられていた。調査の結果、直接寺院址は検出されなかったが、平安～室町時代頃の瓦類を大量に採集すると共に、中世の遺構をも検出した。地形に規制されて、トレンチを①②に2分して掘削した。遺構は主として②の西半、瓦類はその東半にてみいだせた。

① トレンチ 低い谷状低地に設けた短いトレンチである。

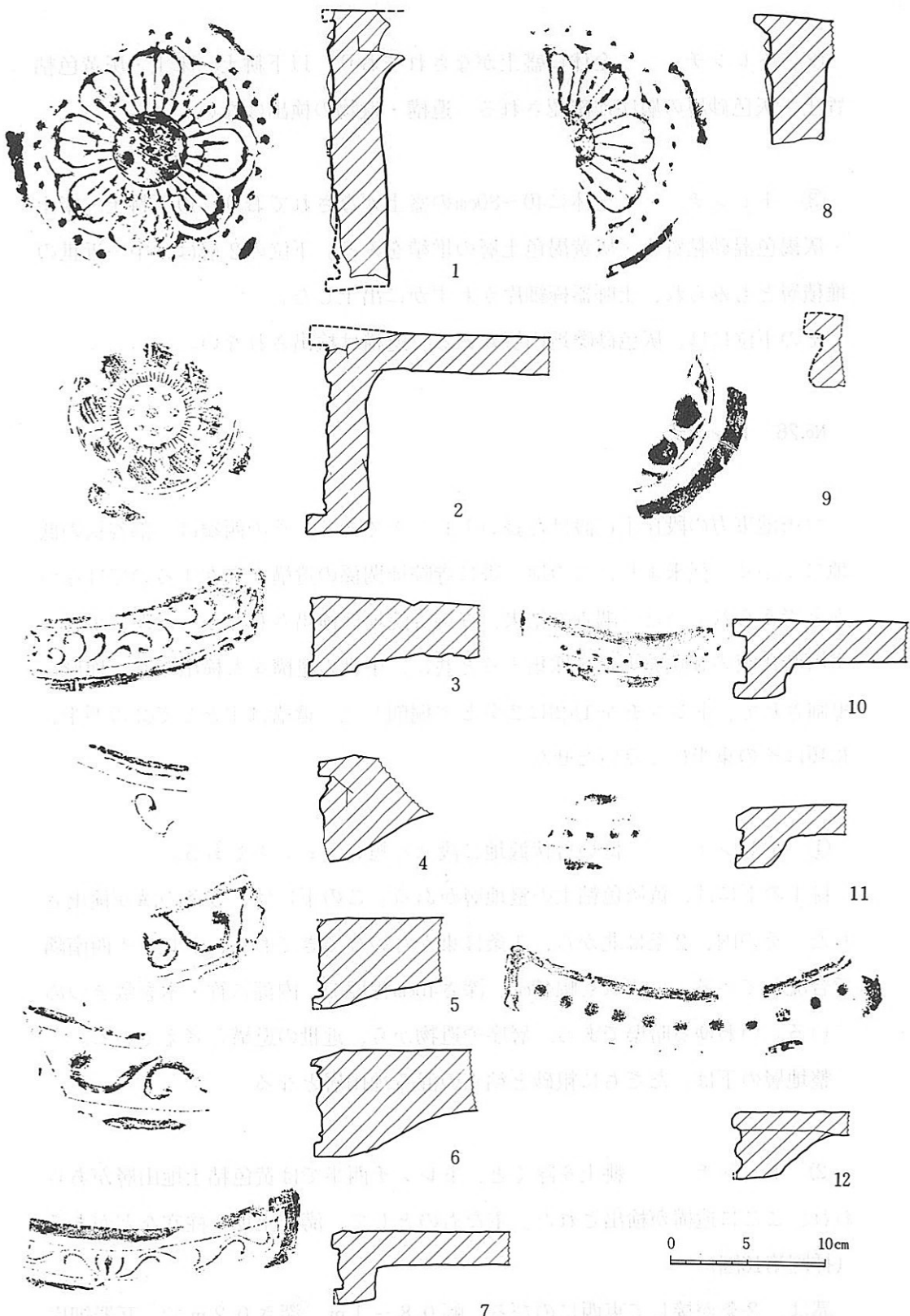
耕土の下には、黄灰色粘土の整地層がある。この下には、3条の溝が検出された。その内、2条は北から、1条は東からのびてきており、トレンチ西南隅で合流している。いずれも幅40cm、深さ40cm程度で、内部に竹・木を敷きつめている。いわゆる暗渠である。層序や遺物から、近世の遺構と考えている。

整地層の下は、ただちに粗砂と粘土の混る地山層となる。

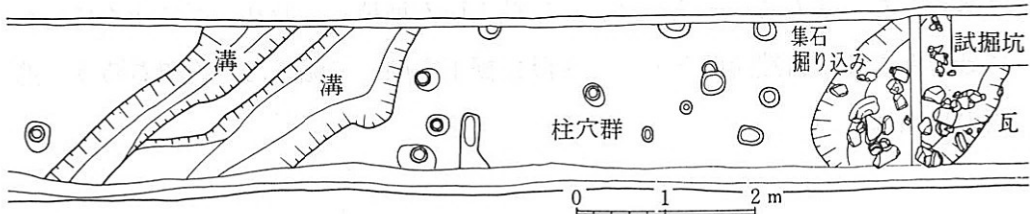
② トレンチ 耕土を除くと、トレンチ西半では黄色粘土地山層があらわれ、ここに遺構が検出された。主なものとして、溝・土壇・柱穴などがある。

(挿図第16図)

溝は、2条が接して東西にのびる。幅0.8～1m、深さ0.2mで、瓦器細片



第16図 No.26-②トレンチ 出土遺物実測図



第17図 No.26-②トレンチ 遺構平面図（部分）

の出土をみた。

周辺に分布する柱穴は、径20～40cmの掘り方をもつ小規模なもので、なかに10～15cmの柱痕とみられる土層の観察できるものも多い。やはり瓦器・土師器細片の出土をみる。

土壇は、東西2m以上、南北1.7mの楕円形プラン、深さ15cmを測り、内に多くの巨礫・瓦が集中していた。代表的なものとして、複弁蓮華文軒丸瓦（挿図17図-1）がある。ただし伴出して室町時代頃の瓦片も含まれており、土壇そのものの時代は下がる。

トレンチの東半は、全体に粘土採掘による地下げがおこなわれており、旧地形は全く遺存しない。よって遺構は全く遺存しない。ただし埋めもどし土の中に大量の瓦類がふくまれていた。（挿図第17図）同時に多くの円礫・板石もみられた。

以上のような諸状況を考え合わせると、当該トレンチに近接して寺院址関係の遺構の存在する可能性は強い。

No.27 トレンチ

調査地の最東端、第2阪和国道のすぐ西側に設けたトレンチである。段丘下に位置し、その比高差は5mもある。地形やコンクリート構築物に規制されて、①②③に3分して掘削した。いずれも遺構・遺物の検出はない。

① トレンチ 耕土・攪乱層を除くと、トレンチ東端では礫地山層があらわれる。その上面は、西にむかって下っており、トレンチ中央にて急激に深

く落ちこむ。落ちこみ上位には、黄色粘土層が堆積しており、下にゆくにつれて砂層となる。自然流路とみられ・段丘裾下を削って流れたものであろう。遺物の出土はない。

② トレンチ 全体に0.6～1mの盛土がされており、以下耕土・床土・黄色粘質土・そして灰色礫地山層という層序をなす。遺構・遺物の検出はない。

③ トレンチ 全体に盛土がなされ、その下はただちに灰色砂礫地山層となる。遺構・遺物の検出はない。

[V] ま と め

試掘調査の結果をまとめると、次のようになる。

[遺構・遺物を検出したトレンチ]

No.2—① トレンチ	No.16 トレンチ
No.7—①② ♪	No.17 ♪
No.8—①② ♪	No.18—①② ♪
No.9 ♪	No.19—①②③④ トレンチ
No.10 ♪	No.20—①②③④⑤ ♪
No.11 ♪	No.21—①② ♪
No.12 ♪	No.22 トレンチ
No.13 ♪	No.23 ♪
No.14—①②③ ♪	No.25—① ♪
No.15—①② ♪	No.26—①② ♪

[遺構・遺物を検出しなかったトレンチ]

No.1 トレンチ	No.6 トレンチ
No.2—② ♪	No.24—①②③ ♪

No. 3	ク	No.25—②③	ク
No. 4	ク	No.27—①②③	ク
No. 5	ク		

調査地域の西端、国道26号線と南海本線とのあいだで遺構の検出をみたのは、No.2—①トレンチだけで、他は、明治時代以降の大規模な粘土採掘により旧地形が削りとられていたり、地山礫層が耕土直下に露出していたりして遺構の検出は全くされなかった。遺構が検出された地は、現地表面も高く、そうした採掘をまぬがれたものである。この付近で高い地形をのこしているのは、わずかにNo.2—①トレンチを設けた水田地・アパート跡地だけである。よって現地表面の様子と各トレンチの調査結果を考えあわせれば、貝塚中央線新設予定地内の広域な地は、かつて遺構が形成されていたとしても、大部分が粘土採掘により削失してしまったものと考えられる。また西南方に離れた工事用進入路予定地に設けたNo.1トレンチでは、粘土採掘はなされていなかったものの、耕土下にすぐさま礫層があらわれ、遺構の検出はされなかった。

なお、No.2—①トレンチで検出された遺構は、今回の調査ではその性格を把握できうるものではなかったが、一応旧地形が遺存し、周辺部にも遺構の検出されうる可能性を示唆するものとして、脇浜遺跡の一部と理解するにとどまった。

南海本線のすぐ東側の低地に設けたNo.5およびNo.6トレンチも、その西側と同様、粘土採掘により旧地形は大きく削りとられていた。よって遺構の存在は確認できなかった。

No.5・6トレンチの東側は、水路・畦道をはさんで1mほど高い地形をみせており、旧地形もそのまま遺存している可能性は、当初より強い地域であった。調査の結果、そのことを確認すると共に、特に貝塚中央線予定地内の南側に設けたNo.8トレンチにおいて顕著な遺構群を検出することとなった。とりわけ、ト

レンチ東半では多くの柱穴が集中するに加えて、井戸も発見された。遺物として、瓦器・土師器・蛸壺・土錘などが出土し、この地に平安時代後期頃の集落址が存在することを示唆している。同時代の遺構は、同レンチ西端にも検出されており、少し距離をおきつつ広範囲に分布している。ただし、No.8レンチの北側に平行して設けたNo.7レンチでは、こうした遺構の検出は、両者が近接しているにもかかわらず、少なかった。こうしたことから、遺構の広がりむしろ貝塚中央線の南側にあるものと推測される。ただし遺構の広がりの北端はNo.7レンチにまでおよばないとしても、貝塚中央線予定地内に大きくくいこむことは明らかである。集落の実態は当然明らかにされないとしても、蛸壺や土錘といった漁業関係の遺物の出土は、その性格の一端をあらわしている。大阪湾沿岸地に近接立地する地理的条件にも合致している。

No.7レンチでは、更に下の層位にて、不定形の深い落ち込みがいくつか検出されたが、出土遺物もなく、それが人為的なものかについても確認されなかった。ただし、レンチ東端で、人為的な溝1条を検出した。

市道小瀬王子線の両側には、No.9・10・12レンチを設けた。これらはいずれも湧水が極めて激しく、掘削・調査が困難な状況にあった。地山層下位に水脈のあることを予測させる。先のNo.8レンチの井戸も、こうした水脈層上に穿開されたものであろう。遺構としては、いくつかの落ち込みを検出したにすぎない。

小瀬王子線の東方には、既に大阪府教育委員会の発掘調査により、遺構の存在が明らかな地域がある。ここでは、平安時代前半期の掘立柱建物5棟他が検出されたことにより、この地に当時の集落址が広がっていることが知れる。

この調査地とすぐ西側に接して設けたNo.11およびNo.13レンチでは、必ずしも関連遺構は検出されなかったが、No.11レンチでは、落ち込み遺構の中に瓦器塚と土師器小皿の出土をみた。時代的には、むしろ小瀬王子線をこえた西方のNo.8レンチとの関連がうかがえる。

今回の調査では、府教委調査地の西側では、平安時代前半期の遺構を全く検出することはなかったことから、当時の集落の広がりがあるとすれば、それ以外の方向ということになる。

府教委調査地の東側には、No.14～18トレンチを設定し、いずれも各種遺構が検出された。これらの中には、調査地のすぐ東側に接したNo.16トレンチでは、柱穴の可能性が強いピットが確認されたものもある。残念ながら出土遺物がほとんどなかったことから、時代判別が困難であり、先の掘立柱建物との関係は掴みえなかった。同様に、これらとは少し距離をおいたNo.18トレンチ西半にて、柱穴群と井戸状落ち込みを検出した。ただし、その地に集落址の存在する可能性を認めうるとはいえ、やはり出土遺物は極端に少なく、古代というばく然とした時代が想定しえても、より厳密な年代観はえられなかった。

No.14～18トレンチでは、奈良時代の遺物をふくむいくつかの遺構がみられた。例えばNo.14—②③トレンチの溝やピットである。必ずしも数的には多くないが、それより東方一帯、とりわけコモ池西側にてそうした時代、あるいは近い時代の遺構が分布することを考えあわせられよう。

この他、時代判別が困難であるNo.15—②トレンチの焼けた土塊出土地や、No.16トレンチの中世以降の柱穴等が注目される。とりわけ焼けた土塊は、この他No.19—①トレンチやNo.20—①トレンチでも、地山層を掘りこむ位置にてみいだせるが、その時代や性格は明らかでない。

コモ池の西側の広い地域には、No.19～21トレンチを設定した。いずれのトレンチにおいても各種遺構が検出された。この地域で注目されるのは、飛鳥～奈良時代の遺構・遺物が、かなり広範囲に散在して検出されたことである。例えば、No.19—①③④トレンチ、No.20—①トレンチなどがあげられる。遺構として確認されるのは、溝と不定形の落ち込みがあげられるが、この他No.19—①トレンチ、No.20—①トレンチ、No.21—①トレンチのピットも、こうした時代の柱穴の可能性をうかがわせるものである。

この他、No.19-①トレンチやNo.20-①トレンチの焼けた土塊もある。またコモ池に最も接近するNo.19-①トレンチにおいては、地山直上の堆積層中に弥生式土器細片がふくまれていたことは、コモ池の南側で検出した柱穴群とのあるいは関連がでてくるものと理解される。

コモ池の南側に設けたNo.23トレンチも、遺構・遺物の検出が顕著であった。まず、トレンチ西端近くでは、弥生時代後期にあるいはさかのぼるかもしれない柱穴群が検出されたことである。ピット内や周辺から叩き目をもつ土器片が出土していることから、そうした可能性をうかがわせる。とすれば、コモ池西側の弥生式土器細片を包含する地山直上の堆積層と合わせて、コモ池近辺に弥生時代の遺構がみいだせることも十分に考える。

またこれらに近接して、古墳時代後期の溝2条が検出されると共に、かなりの須恵器や鋸歯文の施こされた滑石製紡錘車も出土した。とりわけ後者の遺物は特殊なものであり、注目されよう。

これらの遺構の検出された地も、広く畠中遺跡の範囲にふくみこませるとすれば、「畠中遺跡は、弥生時代～平安時代末頃までの複合遺跡」として理解されることになる。なおかつ、従来より縄文時代の遺物もいくつか採集されていることもみのがせない。

また、コモ池の東南方、小さな谷地形をこえた台丘上に設けたNo.26-②トレンチでは、柱穴・溝・土壇などの中世遺構を検出するに加えて、コンテナ10数杯にもたつする古瓦をも採集することとなった。土壇の中や周辺には、人頭大の円礫や板石も散在しており、こうしたことを考えあわせると近辺に寺院址関係の遺跡の存在をうかがわせる。ただし残念ながら、この地においても大規模に粘土採掘が実施されており、No.24-①②③トレンチやNo.26-②トレンチ東半は、旧地形を全く削りとられていた。大多数の古瓦は、こうした採掘坑の埋めもどし土中に混在していたものである。古瓦には、複弁蓮華文軒丸瓦や唐草文軒平瓦、連珠文軒平瓦をはじめとして、平安時代～室町時代にいたる各種の

ものがみられ、寺院の存続時代を現わしているものとみられる。

周辺地域の字名を検討された地元研究者、吉川和則、南川孝司の両氏によれば、近接して、「近義堂」をはじめとして、寺院にかかわる字名ののこっていることが指摘されている。よって近義堂遺跡と称されるゆえんである。

この他、粘土採掘をまぬがれて、瓦器をふくむ中世遺構が検出されたのは、No.25-①トレンチである。先のNo.26-②トレンチの遺構とあわせて、広くこの地域に小規模な建物や溝の分布があったことを示している。

このように今回の調査では、中世遺構の検出や大量の古瓦の採集をみたものの、明確な寺院址関係の遺構は確認されなかった。将来の課題としてのこることになる。

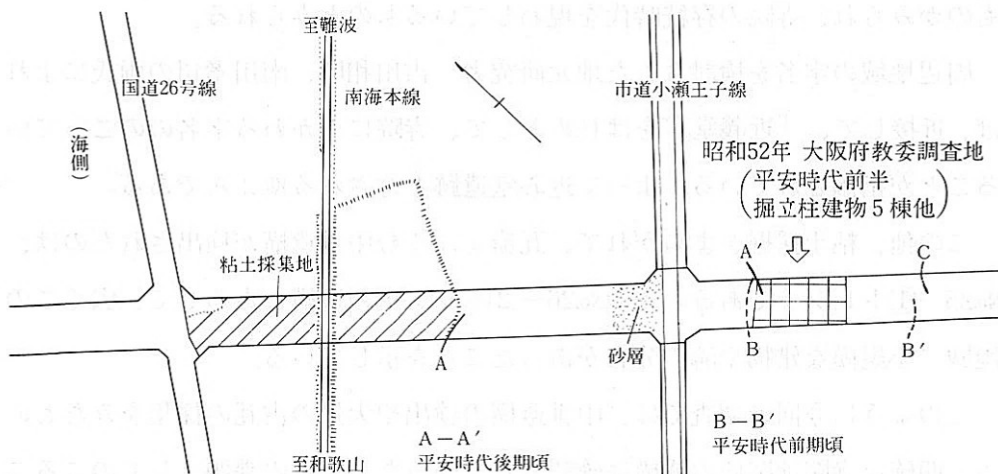
これより以東～第2阪和国道とのあいだの地は、段丘下の低い地形となる。ここに設けたNo.25-②トレンチ、No.27-①②③トレンチでは、地表下すぐさま礫層が露出し、遺構・遺物はまったく検出されなかった。No.25-②トレンチとNo.27-①トレンチでは、自然流路の存在もうかがわれ、段丘裾下をいつの時代にか激しく浸食していたものとみられる。

最東端のNo.25-③トレンチのみ、幾枚かの中世以降の包含層状の土層堆積をみたが、遺構の検出はなされなかった。

以上の調査結果や従来の知見をも総合すると、国道26号線以東～第2阪和国道以西、延長1150 mにわたる貝塚中央線予定地内においては、時代的にもいくつかの遺構群に区分しうることになる。時代をおってとりまとめておきたい。

先土器時代 全く確認されなかった。

縄文時代 今回の試掘調査では確認されなかったが、これまで少数の遺物散布が知られている。先に大阪府教委の調査地で指突文土器片1、またコモ池～第2阪和国道の範囲内で打製石鏃の採集がある。遺跡としての実態は不明。



第18図 時代別遺構分布略図

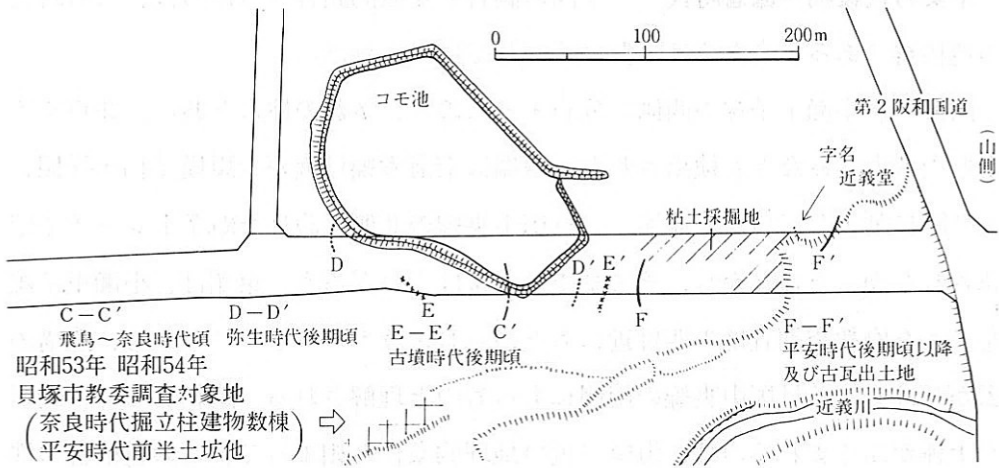
弥生時代 今回の調査で遺物の出土、堆積土層の確認、あるいは遺構の検出をみたのは、コモ池付近に限られる。コモ池の西側に接して堆積土層、そして南側では柱穴が検出された。後者については十分時代的に確認されなかったとしても、第Ⅴ様式の土器片の出土も近接してみられ、その可能性は強い。西側の堆積土層中の土器は、かなり磨滅をしているとしても第Ⅳ様式あるいはそれ以降のものと考えられる。こうしたことから、現在のコモ池の位置する地域に重複して、中期末～後期にかけての遺跡があることは予測される。

この他、小瀬王子線の東側に位置する府教委調査地においては、中期前葉（第Ⅱ様式）とされる土器の出土もある。ただし遺構の検出はなかった。

古墳時代 今回の調査で明確に遺構・遺物が確認されたのは、コモ池の南側だけであり、古墳時代後期である。遺構として溝2条、遺物として須恵器・土師器・滑石製紡錘車がある。先の弥生時代後期の可能性をもつ柱穴群と近接した地にある。コモ池の西側にも遺物細片がわずかに散布しており、そうしたことからコモ池近辺にこの時代の遺跡が存在することをうかがわせる。遺物のなかに埴輪ともみられるものもいくつかあったが、極細片であるため確認は得がたい。

古墳時代前半期の遺構・遺物は確認されなかった。

飛鳥～奈良時代 この時代の遺構・遺物は、府教委調査地の東側～コモ池



の西側という極めて広範囲な地に散在した。溝・落ち込み・柱穴・その他不定形のピットなどがみられ、須恵器・土師器の出土があった。そのあり方は、必ずしもどこかの地に集中したというよりは、散在したと表現するのが妥当かと思われる。焼土塊が数ヶ所のトレンチにて出土したが、伴出遺物も少なく、時代が決めがたい状況であった。

最近、貝塚市教育委員会による調査で、コモ池の西側で奈良時代とみられる掘立柱建物の存在が知られている。

平安時代 先の大阪府教委の調査により、平安時代前半期の掘立柱建物5棟が検出されている。今度の試掘調査では、その西側でそれと連続するとみられる柱穴他の遺構を検出した。ただし出土遺物はなく、時代判別が困難である。同時代の遺構・遺物は、それ以外の地で検出されなかったことから、さほど大きくは広がらないものと考えられる。

この他、コモ池の西側でやはり貝塚市教委によりこの時代の大量の土器類を出土させた土壇が知られている。

コモ池の南東側一帯においては、いわゆる「近義堂廃寺」にかかわるとみられる古瓦類が大量に散布しており、今回も多くを採集した。その内には、単に平安時代のものにとどまらず室町時代頃までのものまである。一応、その創建時代については平安時代前半期とみることは可能であろう。

平安時代後期～鎌倉時代 今回の調査で比較的顕著だったのは、この時代の遺構群である。大きくは2群に分かれて検出された。

西群は、小瀬王子線の西側に分布するもので、多数の柱穴と共に、井戸や不定形の落ち込みなども検出された。西端は南海本線付近が大規模な粘土採掘により既に削失していた。北端は、貝塚中央線の北側に設けたNo.7トレンチで確認されなかったことから、そこまではおよばないだろう。東端は、小瀬王子線をこえた府教委調査地の西付近にもとめられよう。そうしたことから、遺構の広がりはいわゆる貝塚中央線の南側にあるものと理解される。遺物として、蛸壺や土錘がふくまれるのは、海岸に近い地理的条件と相まって、この遺構群の性格がうかがえる。

対して、東群は、コモ池の南東方、いわゆる「近義堂廃寺」の地に近接して存在するものである。小規模な柱穴や溝などがあり、必ずしも直接寺院跡にかかわるものではない。とはいえ、出土古瓦類の年代観と考えあわせても、ある時代には並存していた可能性は強く、何らかのかかわりがあった遺構であろう。この地一帯にも、後世の大規模な粘土採掘が実施されており、現地表面が低い部分は地下げの結果遺構が消滅している可能性は強い。ただし、大量の古瓦類は、こうした採掘坑の埋めもどし土中に包含されていることに注意をはらわれるべきである。

室町時代 必ずしもこの時代の遺構は検出されなかった。ただし、先の古瓦類からして、この時代あるいは相前後する時代にまで瓦を使用した建物が存続したことを示している。

それ以降の時代 調査地の広い範囲にわたって、現地表面は水田・畑地として近年まで耕作されていた。よって現地表層を形成するのは、耕土であり、以下床土を除去すると、おおむね黄色系土層が存在する。この土層の中位より上半に染付磁器片をはじめとした近世遺物の包含をみる。こうしたことから、この地域に極めて大がかりな整地作業が実施されたことがうかがわれる。現耕作地の造成がなされた時代の一端をつかめようか。

(補記) 今回の調査では、地山層中からの湧水が激しいトレンチが多く、排土や遺構の検出に困難が伴った。加えて、隣接農耕地の入水・排水による調査トレンチへの漏水も多く、今後の調査においてはこうした問題への対策が必要となろう。

付載 脇浜・畠中・石才近義堂遺跡出土試料花粉分析報告

1. 試料

試料はトレンチ壁の遺構内、その他より採取された黒色土～黒色粘土を主とするもので合計20点である。これらの試料の試料番号、採取地点、及び花粉・孢子化石産出傾向については付図—1、第1表「試料表」に記載した。

2. 結果及び考察

花粉分析結果は鑑定した花粉・孢子化石総数を基数とする100分率で各試料における花粉・孢子の割合を表わし、付表—1として後掲した。さらに写真図版(Plate 1.2.3)を作成したので参照されたい。

今回の分析の結果、以下に列挙した花粉・孢子化石が検出された。

◀AP—1(針葉樹花粉)▶

Abies (モミ属)、*Pinus* (マツ属)、*Tsuga sieboldii* (ツガ)、*Taxodiaceae* (スギ科)、*Cryptomeria* (スギ属)、*Sciadopitys* (コウヤマキ属)、*T. C. T.* (*Taxaceae*、イチイ科、*Cupressaceae* ヒノキ科、*Taxodiaceae* スギ科)。

◀AP—2(広葉樹花粉)▶

Juglans (クルミ属)、*Pterocarya* (サワグルミ属)、*Salix* (ヤナギ属)、*Alnus* (ハンノキ属)、*Betula* (カバノキ属)、*Carpinus* (クマムシデ属)、*Corylus* (ハシバミ属)、*Castanea* (クリ属)、*Castanopsis* (クリカシ属)、*Cyclobolanopsis* (アカガシ亜属)、*Lepidobalanus* (コナラ亜属)、*Aphananthe* (ムクノキ属)、*Celtis* (エノキ属)、*Zelkova* (ケヤキ属)、*Aesculus* (トチノキ属)、*Lonicera* (スイカズラ属)。

◀NAP(草本花粉)▶

Persicaria (サナエダテ属)、*Caryophyllaceae* (ナデシコ科)、*Chenopodiaceae* (アカザ科)、*Cruciferae* (アブラナ属科)、*Umbelliferae* (セリ科)、*Carduoideae* (キク亜科)、*Artemisia* (ヨモギ属)、*Cichorioideae* (タンポポ亜科)、*Gramineae* (イネ科)、*Cyperaceae* (カヤツクグサ科)、*Sagittaria* (オモダカ属)、*Fagopyrum* (ソバ属)。

《FP (形態分類花粉)》

Tricolpate pollen (三溝型花粉)、Tricolporate pollen (三溝孔型花粉)、Inaperturate pollen (無口型花粉)。

《FS (羊歯類孢子)》

Lycopodiaceae (ヒガゲノカズラ科)、Qsmundaceae (ゼンマイ科)、Polypodiaceae (ウラボシ科)、Pteris (イノモトソー属)、Monolete spore (単条型孢子)、Trilete spore (三条型孢子)。

《その他の微化石》

Pseudoschizaea (淡水生藻類)、Botryococcus (藻類)。

次に各試料別に花粉・孢子構成の特長、及び古環境について述べる。

◎No. 1 (No. 8 トレンチ) 試料

針葉樹花粉は合計で 4.4% と少なかった。

広葉樹花粉は合計で 25.6% であった。主なものとして、クリ属が 10.6%、コナラ亜属が 7.5%、アカガシ亜属が 3%、ハシバミ属が 1.9%、クリカシ属が 1.3% 検出された。

草本花粉は合計で 46.2% であった。主なものとして、ヨモギ属が 28%、イネ科が 11.9%、キク亜科が 3.8% 検出された。

羊歯類孢子は合計で 5% であった。主なものとしては単条溝孢子が 2.5%、三条溝型孢子が 1.9% 検出された。

従って古植生は、ヨモギ属を主体とし、イネ科、キク亜科などが生育する草地が考えられる。この草地の周辺には、クリ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、などの広葉樹類が生育していたものと考えられる。

古気候は古植生から温帯であると推定される。又この試料から淡水生藻類の微化石が検出されたことから、水の影響も考えられる。

◎No. 2 (No. 8 トレンチ) 試料

針葉樹花粉は、マツ属が 3.1% 検出されただけであった。

広葉樹花粉は、クリ属が 3.2%、コナラ亜属が 3.1% 検出された。

草本花粉は合計で 56.2% であった。主なものとして、ヨモギ属が 39%、イネ

科が12.5%、キク亜科が 3.1%検出された。

羊歯類孢子は合計で15.6%であった。主なものとして単条溝型孢子と三溝型孢子がそれぞれ 6.2%検出された。この他にウラボシ科、イノモトソウ属が僅かに検出された。

従って古植生は、ヨモギ属を主体とし、イネ科、キク亜科、などが生育する草地が考えられる。この草地の周囲にはマツ属、クリ属、コナラ亜属が若干生育していたものと考えられる。

古気候は古植生から温帯であると推定される。

◎No. 3 (No. 9 トレンチ) 試料

針葉樹花粉は合計で 6.0%であった。主なものとしてスギ科が 2.2%、マツ属が 1.9%検出された。

広葉樹花粉は合計で 1.9%と少なかった。

草本花粉は合計で86%と非常に多かった。主なものとしては、イネ科が42%、ヨモギ属が32.9%、タンポポ亜科が 5.1%、アブラナ科が 2.3%が検出された。

羊歯類孢子は合計で 5.6%であった。主なものとしては、単条溝型孢子が2.7%、三条溝型孢子が 1.4%検出された。この他にゼンマイ科、ウラボシ科、イノモトソウ属が僅かに検出された。

従って古植生は、イネ科、ヨモギ属を主体とし、タンポポ亜科、アブラナ科、等が育生する草地が考えられる。この草地の附近には、スギ科、マツ属などの針葉樹も僅かに生育していたことが推定される。

古気候は古植生より温帯であろうと思われる。

◎No. 4 (No. 12 トレンチ) 試料

針葉樹は合計で20.4%であった。主なものとしては、マツ属が14.9%、スギ科が 4.3%検出された。

広葉樹花粉は 1.6%と少なかった。

草本花粉は合計で77.6%と非常に多かった。主なものとしては、イネ科が 60.7%、アブラナ科が 8.6%、ヨモギ属が 4.7%検出された。

羊歯類孢子は合計で 0.4%と少なかった。

従って古植生は、イネ科を優占とし、ナブラナ科、ヨモギ属からなる草地が推定される。この草地の周囲には、マツ属、スギ科も育生していたものと考えられる。この試料から藻類の微化石が検出されたことから水の影響も考えられる。

◎No. 5 (No. 12 トレンチ) 試料

この試料は花粉・胞子化石が合計で33個体と非常に少なく、古植生は古気候について考察するには不十分な試料であった。検出された花粉・胞子化石には、イチイ科、ヒノキ科、スギ科と思われる花粉、ヨモギ属、無口型花粉、ウラボシ科の胞子などがあげられる。

◎No. 6 (No. 14-①トレンチ) 試料

この試料も、花粉・胞子化石が合計42個体と非常に少なかった。従って古植生、古気候を推定するには不十分なものであった。検出された花粉・胞子化石には、マツ属、ハンノキ属、クリ属、ヨモギ属、イネ科、奥口型花粉、単条溝型胞子等がある。

この試料から淡水生藻類の微化石が検出されたことから水の影響も考えられる。

◎No. 7 (No. 14-②トレンチ) 試料

針葉樹花粉は合計で 4.2%であり主なものとして、マツ属が 2% 検出された。

広葉樹花粉は合計で 4.2%であり主なものとして、クリ属が 2% 検出された。

草本花粉は合計で13.7%であった。主なものとして、ヨモギ属が 9.4%、イネ科が 2.1% 検出された。

羊歯類胞子は合計で65.3%と非常に多かった。主なものとして単条溝型胞子 59% 検出され非常に多かった。

従って古植生は羊歯類胞子が優占し、ヨモギ属、イネ科などの草本が生育する草地が考えられる。草地の附近には、マツ属、クリ属なども僅かに生育していたと考えられる。

◎No. 8 (No. 14-③トレンチ) 試料

針葉樹花粉は合計で 9.2%であった。主なものとしては、イチイ科、ヒノキ

科、スギ科に相当する花粉が 4.0%、マツ属が 3.9% 検出された。

広葉樹花粉は合計で 2.6% と少なかった。

草本花粉は合計で 36.9% であった。主なものとして、ヨモギ属が 26.4%、イネ科が 7.9% 検出された。

羊歯類胞子は合計で 34.2% であった。主なものとして、単条溝型胞子が 17.2%、ウラボシ科が 11.8%、三条溝型胞子が 3.9% 検出された。従って古植生は、ヨモギ属、イネ科などの草本類とウラボシ科などの羊歯類が良好に繁茂する草地が考えられる。この草地の附近には、マツ属やイチイ科、ヒノキ科、スギ科と思われる針葉樹類も若干育生していたと考えられる。

古気候は古植生から温帯であろうと考えられる。

◎No. 9 (No. 16 トレンチ) 試料

この試料は花粉・胞子化石が合計 38 個体と非常に少なく、古植生、古気候を推定するには不十分な試料であった。検出された花粉・胞子化石には、ヨモギ属、タンポポ垂科、三溝孔型花粉、ウラボシ科、単条溝型胞子、三条溝型胞子等があげられる。

この試料からは淡水生藻類の微化石が検出されたことから水の影響も考えられる。

◎No. 10 (No. 16 トレンチ) 試料

この試料も花粉・胞子化石が合計で 12 個体と非常に少なく古植生、古気候を推定するには不十分な試料であった。検出された花粉・胞子化石には単条溝型胞子、三条溝型胞子などがあげられる。

◎No. 11 (No. 18—①トレンチ) 試料

この試料も花粉・胞子化石が合計で 47 個体と少なかったので古植生、古気候を推定するには不十分な試料であった。検出された花粉・胞子化石には、マツ属、ヨモギ属、イネ科、三溝口型花粉、無口型花粉、ウラボシ科、単条溝型胞子、三条溝胞子などがあげられる。

◎No. 12 (No. 19—①トレンチ) 試料

針葉樹花粉は合計で 13.5% であった。主なものとして、マツ属が 9.4%、ス

ギ科が3%、検出された。

広葉樹花粉は合計で27.1%であった。主なものとして、クリ属が18.1%検出された。その他ハシバミ属、エノキ属がそれぞれ3.1%検出された。

草本花粉は合計で41.7%であった。主なものとして、ヨモギ属が17.8%、イネ科が15.6%、検出された。その他タンポポ亜科、キク亜科、スゲ科、オモダカ属が若干検出された。

羊歯類孢子は合計で10.4%であった。主なものとして、単条溝型孢子が9.4%検出された。

従って古植生は、ヨモギ属とイネ科を主体とし、タンポポ亜科、キク亜科、スゲ科及び羊歯類からなる草地が考えられる。この草地の周囲には、クリ属、マツ属、スギ科等の樹木も良好に生育していたであろう。

古気候は古植生から温帯であろうと推定される。

◎No. 13 (No. 19—②トレンチ) 試料

針葉樹花粉は合計で8.3%であった。主なものとして、スギ科が4.2%、マツ属が3.3%検出された。

広葉樹花粉は7.1%であった。主なものとして、クリ属、コナラ属がそれぞれ2.1%、アカガシ亜属が1.3%検出された。

草本花粉は合計で52.0%であった。主なものとして、ヨモギ属28.4%、イネ科が20.4%検出され、その他オモダカ属等が若干検出された。

羊歯類孢子は合計で31.3%であった。主なものとして、単条溝型孢子が16.2%、イノモトソウ属が7.1%、三条溝型孢子が6.3%、ウラボシ科が1.3%検出された。

従って古植生は、ヨモギ属、イネ科等の草本やイノモトソウ属等の羊歯類が良好に繁茂する草地が考えられる。この草地の周辺にはスギ科、マツ属等の針葉樹と、クリ属、コナラ亜属等の広葉樹が若干生育していたとも推定される。

古気候は古植生から温帯であろうと推定される。

◎No. 14 (No. 19—②トレンチ) 試料

針葉樹花粉は、マツ属とイチイ科、ヒノキ科、スギ科と思われる花粉がそれ

ぞれ 2.4%検出されただけであった。

広葉樹花粉はまったく検出されなかった。

草本花粉はサナエタデ属とオモダカ属がそれぞれ 1.2%検出されただけであった。

羊歯類孢子は合計で91.6%であった。主なものとして、単条溝型孢子が53%、三条溝型孢子が18.1%、イノモトソウ属が16.9%、ウラボシ科が 2.4%検出された。

従って古植生は、イノモトソウ属、ウラボシ科等の羊歯類が非常に多く繁茂する特別な環境が考えられる。

古気候は古植生から温帯であろうと推定される。

◎No. 15 (No. 19—②トレンチ) 試料

針葉樹花粉は合計で 3.9%であった。主なものとして、ツガが 1.9%、コウヤマキ属が 1.0%検出された。

広葉樹花粉は合計で10.7%であった。主なものとして、コナラ亜属が5.3%、クリ属が 1.9%検出された。

草本花粉は合計で19.9%であった。主なものとしては、ヨモギ属が10.7%、イネ科が 5.8%、キク亜科が 2.9%検出された。

羊歯類孢子は合計で62.6%と非常に多かった。主なものとして、単条溝型孢子が29.1%、三条溝型孢子が18%、イノモトソウ属が 5.8%、ウラボシ科が5.3%、ゼンマイ科が 3.9%検出された。

従って古植生はイノモトソウ属、ウラボシ科、ゼンマイ科等の羊歯類が優占し、ヨモギ属、イネ科、キク科等の草本を加えた草地が考えられる。

この草地の周囲には、コナラ亜属、ツガ、クリ属等の樹木も僅かに生育していたのであろう。

古気候は古植生から温帯であろうと推定される。

◎No. 16 (No. 19—④トレンチ) 試料

針葉樹花粉は合計で 5.3%であった。主なものとして、スギ科が 2.3%、マツ属が 2.2%検出された。

広葉樹花粉は合計で 7.4%であった。主なものとして、コナラ亜科が 4.5%、ケヤキ属が 1.4%、アカガシ亜属が 1.4%検出された。

草本花粉は合計で47%であった。主なものとして、ヨモギ属が23.9%、イネ科が18.7%、スゲ科が 1.8%検出された。

羊歯類孢子は合計で34.7%であった。主なものとして、単条溝型孢子が19.6%、三条溝型孢子が 6.2%、ウラボシ科が 4.9%、イノモトソウ属が 4%検出された。

従って古植生は、ヨモギ属、イネ科等の草本類とウラボシ科、イノモトソウ属等の羊歯類からなる草地が考えられる。

草地の周辺は、コナラ亜科、スギ科、マツ属等の樹木も若干生育していたと考えられる。

古気候は古植生から温帯であろうと推定される。

◎No. 17 (No. 20—②トレンチ) 試料

針葉樹花粉は合計で 7.7%であった。主なものとしては、マツ属が 3.5%、スギ科が 2.4%、ツガが 1.2%検出された。

広葉樹花粉は合計で19.1%であった。主なものとして、コナラ亜属が8.9%、クリ属が 3.6%、ハシバミ属とアカガシ亜属が 1.8%検出された。

草本花粉は合計で57.7%と多かった。主なものとして、ヨモギ属が29.1%、イネ科が24.4%、他にセリ科、タンポポ亜科、スゲ科がそれぞれ 1.2%検出された。

羊歯類孢子は合計で14.3%であった。主なものとして、単条溝型孢子が 7.1%、三条溝型孢子が 3%、ウラボシ科が 2.4%検出された。

従って古植生は、ヨモギ属、イネ科、および羊歯類のウラボシ科などからなる草地が考えられる。

この草地の附近には、コナラ亜属、クリ属、マツ属、スギ科等の樹木が生育していたと考えられる。

古気候は古植生より温帯であろうと推定される。

◎No. 18 (No. 21-①トレンチ) 試料

この試料は花粉・胞子化石が合計で19個体と非常に少なかったので、古植生、古気候について考察することが出来なかった。

検出された花粉・胞子化石には、スギ科、ヨモギ属、イネ科、ウラボシ科、単条溝型胞子、三条溝型胞子等があげられる。

◎No. 19 (No. 23-①トレンチ) 試料

この試料も花粉・胞子化石が合計で26個体と非常に少なかったので、古植生、古気候については考察することが出来なかった。

検出された花粉・胞子化石には、ヨモギ属、イネ科、無口型花粉、ウラボシ科、単条溝型胞子、三条溝型胞子等があげられる。

◎No. 20 (No. 23-②トレンチ) 試料

この試料も花粉・胞子化石が合計で10個体と非常に少なかったので、古植生、古気候について考察することが出来なかった。

検出された花粉・胞子には、ヨモギ属、イネ科、単条溝型胞子等があげられる。

次に上下関係が明らかで、花粉・胞子化石が十分に検出された試料について簡単に古植生の変化について述べてみたい。

◎No. 1 (No. 8 トレンチ) と No. 2 (No. 8 トレンチ) 試料

この2試料は草本花粉の産出の点では、双方共よく似た花粉構成を示すが、樹木花粉とくに広葉樹花粉の産出の点ではNo. 2 (No. 8 トレンチ) がNo. 1 (No. 8 トレンチ) に比べて、クリ属、コナラ亜属が少なかったこと、ハシバミ属、アカガシ亜属、クリカシ属が検出されなかったことなど相違がみられた。

◎No. 13 (No. 19-②トレンチ) と No. 14 (No. 19-②トレンチ) と No. 15 (No. 19-②トレンチ) 試料

この試料はNo. 3 ~ No. 15にかけて上から下に採取されたものである。花粉・胞子構成の特長からNo. 15とNo. 14は羊歯類を多産する構成を示しているが、No. 13はそれほど多くはなく、むしろ草本の割合が高かった。従ってNo. 15、No. 14では、イノモトソウ属、ウラボシ科等の羊歯類が繁茂する湿潤な草地であったが、No.

13では、ヨモギ属、イネ科、主体の草地へ変化したことがうかがえる。

(付)

◎オモダカ属花粉について

No.12 (No.19-①トレンチ) No.13 (No.19-②トレンチ) No.14 (No.19-②トレンチ) の3試料からは、湿地を好んで生育する、オモダカ属花粉が検出された。

従ってこれらの試料は池沼の環境を示していると言えよう。

第1表 試料表

試料番号	採取地点	花粉・孢子化石、産出傾向*
No. 1	No. 8トレンチ 黒色土層 (溝内)	C
No. 2	No. 8トレンチ 地山層	R
No. 3	No. 9トレンチ北東部 暗灰色砂 (溝)	A
No. 4	No. 12トレンチ 表土	A
No. 5	No. 12トレンチ 黄灰色砂中の茶黒色粘土	RR
No. 6	No. 14-①トレンチ ①黒色土 (溝内)	RR
No. 7	No. 14-②トレンチ 茶黒色土 (遺溝内)	R
No. 8	No. 14-③トレンチ 茶黒色土	R
No. 9	No. 16トレンチ 黒色粘土 (上)	RR
No. 10	No. 16トレンチ 黒色粘土 (下)	RR
No. 11	No. 18-①トレンチ 黒色粘土	RR
No. 12	No. 19-①トレンチ 暗茶灰色 (西側落込み)	R
No. 13	No. 19-②トレンチ 暗灰茶色土	A
No. 14	No. 19-②トレンチ 暗黄灰色土	R
No. 15	No. 19-②トレンチ 淡灰黄色土	A
No. 16	No. 19-④トレンチ 茶褐色粘土質土 (弥生時代遺物包含層)	A
No. 17	No. 20-②トレンチ 黒色土	C
No. 18	No. 21-①トレンチ 灰茶色土除去面土壇2	RR
No. 19	No. 23-①トレンチ 黄褐色ベース (6世紀後半溝)	RR
No. 20	No. 23-②トレンチ 灰褐色土 (溝)	RR

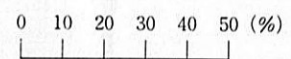
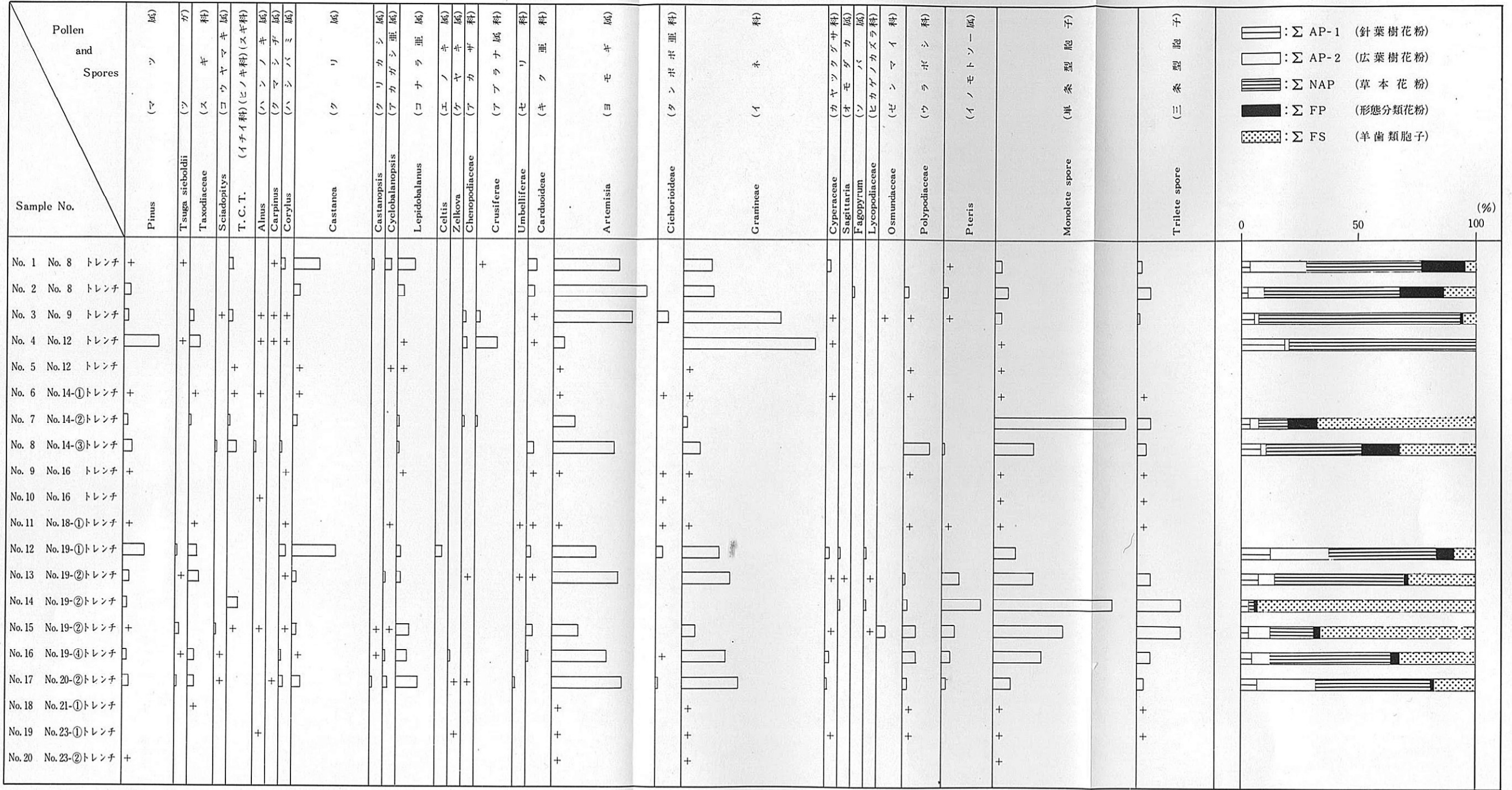
※：A：多い、C：普通、R：少ない、RR：極稀れ

Explanation of Plates

Photo No.	Sample No.	Pollen and Spores
PLATE 1		
1	No. 3	Pinus (マツ属)
2	No. 4	P.
3	No. 4	P.
4	No. 13	Tsuga sieboldii (ツガ)
5	No. 4	Cryptomeria (スギ属)
6	No. 13	Taxodiaceae (スギ科)
7	No. 4	T.
8	No. 9	Alnus (ハンノキ属)
9	No. 12	Castanopsis (クリカシ属)
10	No. 17	Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)
11	No. 16	Lepidobalanus (コナラ亜属)
12	No. 16	Zelkova (ケヤキ属)
13	No. 17	Lonicera (スイカズラ属)
PLATE 2		
14	No. 3	Caryophyllaceae (ナデシコ科)
15	No. 17	Chenopodiaceae (アカザ科)
16	No. 4	C.
17	No. 4	Crusiferae (アブラナ亜属)
18	No. 13	Carduoideae (キク亜科)
19	No. 13	C.
20	No. 4	Artemisia (ヨモギ属)
21	No. 17	A.
22	No. 3	Cichorioideae (タンポポ科)
23	No. 17	C.
24	No. 3	Gramineae (イネ科)
25	No. 4	G.
26	No. 4	G.
27	No. 17	Cyperaceae (カヤシクグサ科)
PLATE 3		
28	No. 15	Pteris (イノモトソウ属)
29	No. 15	Polypodiaceae (ウラボシ科)
30	No. 3	Monolete spore (単条型孢子)
31	No. 16	M. s.
32	No. 15	Trilete spore (三条型孢子)
33	No. 13	T. s.

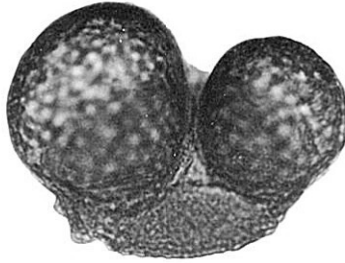
貝塚中央線トレンチ試料主要花粉孢子化石ダイアグラム

(分析担当: パリノ・サーヴェイ株式会社調査部)



+ : 1%未満の検出及び貧微化石試料における検出を示す。

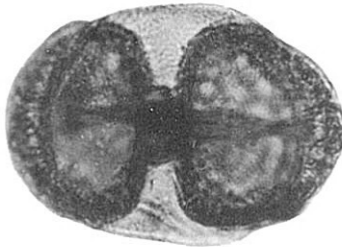
PLATE 1



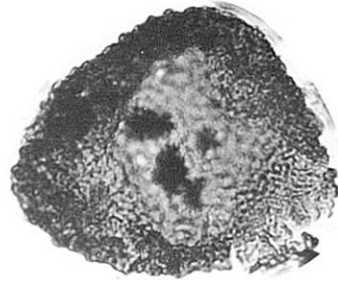
1



2



3



4



5



6



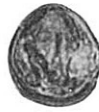
7



8



9



10



11



12



13

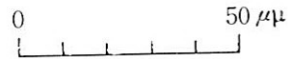


PLATE 2



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26

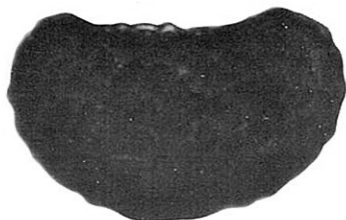


27

PLATE 3



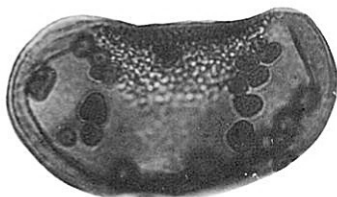
28



29



30



31

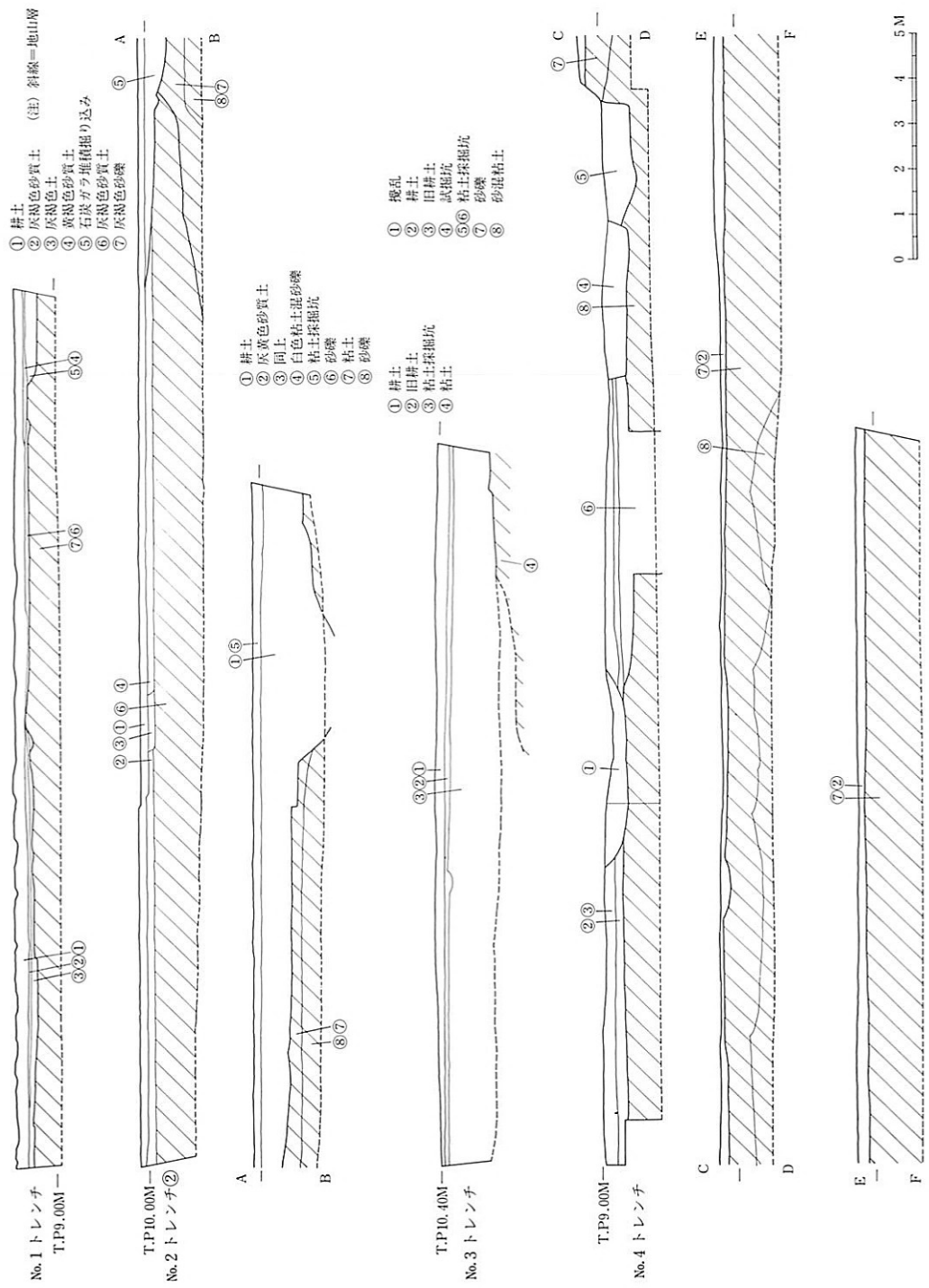


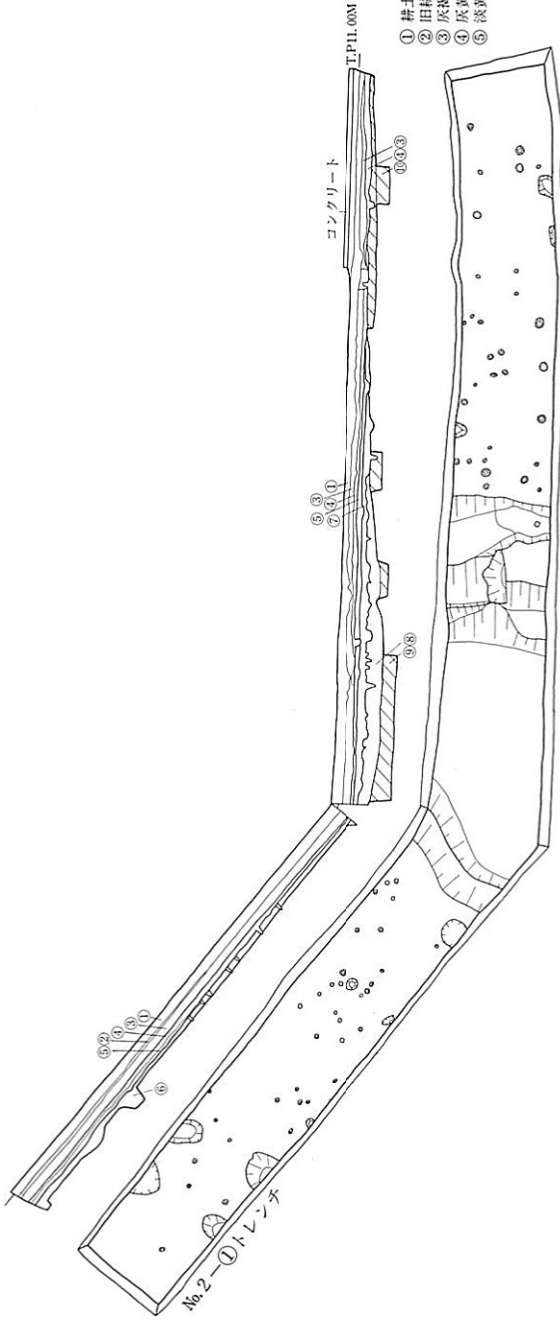
32



33

版 圖





- ⑥ 黄色粘土
- ⑦ 黒褐色粘土
- ⑧ 灰褐色土
- ⑨ 灰黄色粘土
- ⑩ 灰褐色礫

- ① 粘土
- ② 田耕土
- ③ 灰褐色砂質(マンガノ)土
- ④ 灰黄色土
- ⑤ 淡灰黄色微砂質土

No. 5-①トレンチ(南壁)



No. 5-②トレンチ(南壁)

第5-①、②トレンチ

- 粘土層
- 砂礫層
- 砂層



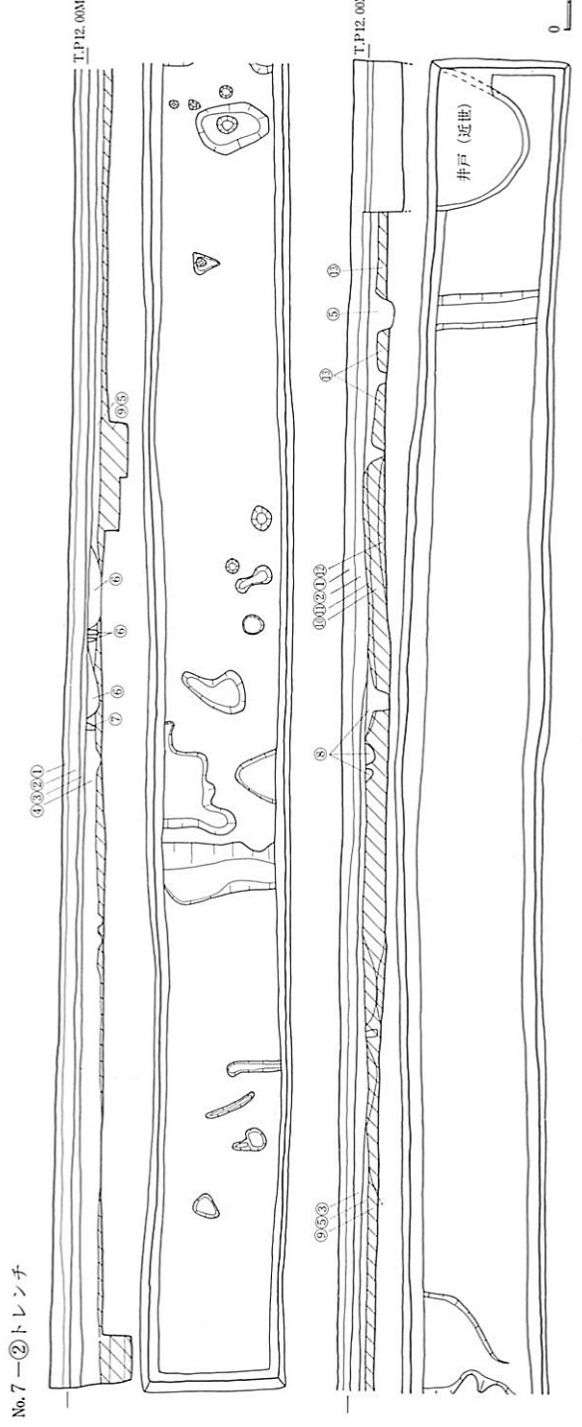
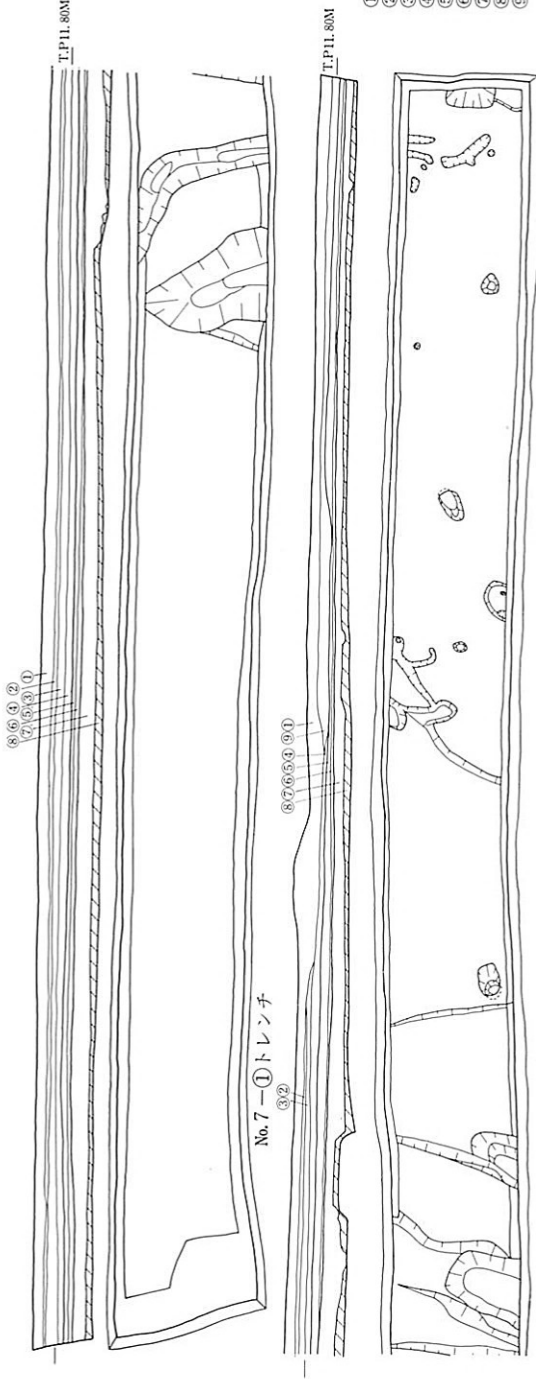
No. 6トレンチ(南壁)

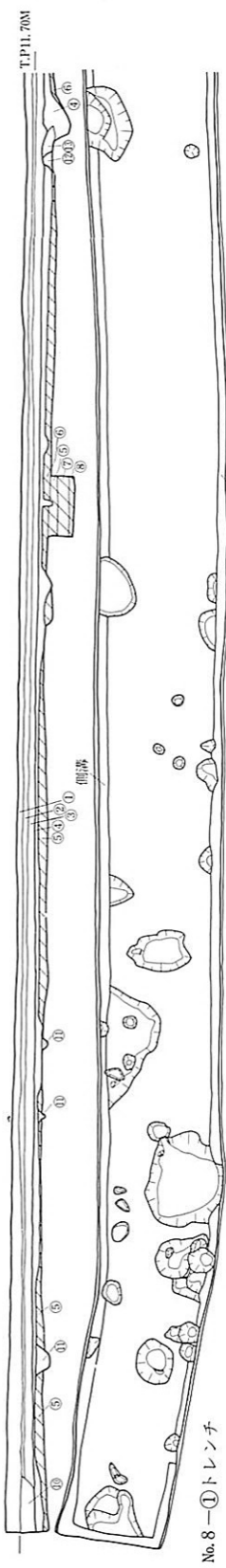
- ⑦ 黄褐色粘土
- ⑧ 淡灰褐色細砂
- ⑨ 黄褐色粘質土
- ⑩ 淡黄色土(礫混)
- ⑪ 黄褐色粘質土
- ⑫ 黄褐色砂礫

第6トレンチ

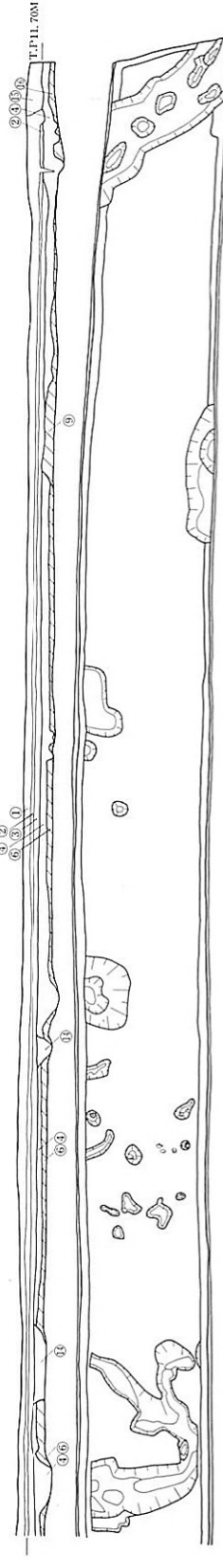
- ① 粘土
- ② 暗茶褐色土(礫混)
- ③ 粘土探照土
- ④ 灰褐色粘質土
- ⑤ 淡茶褐色砂
- ⑥ 黄褐色砂礫



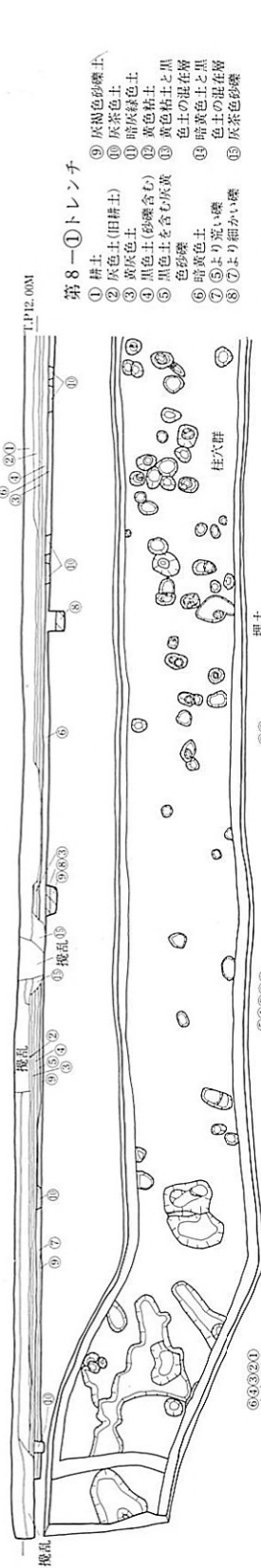




No. 8—①トレンチ



No. 8—②トレンチ

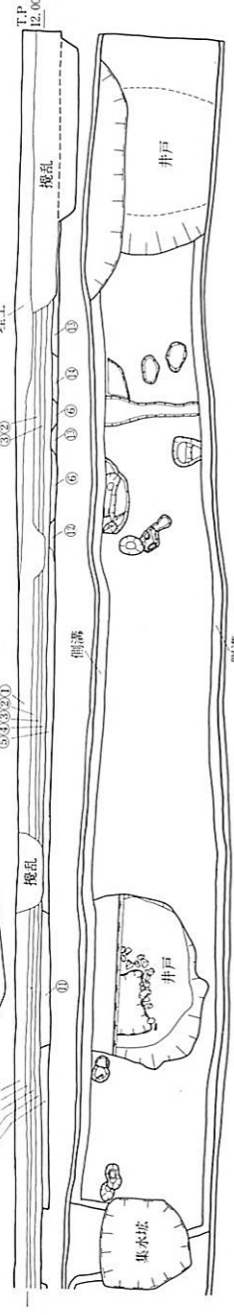


第8—①トレンチ

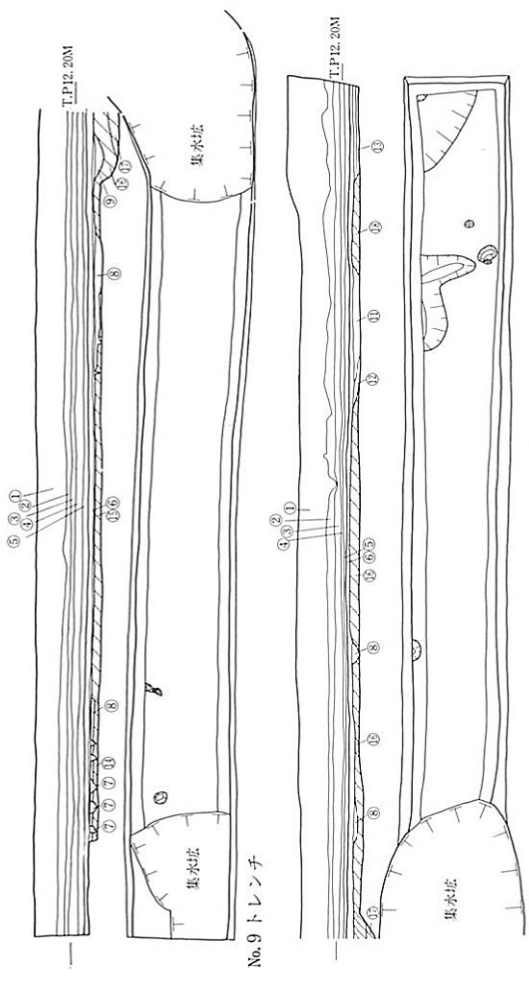
- ① 耕土
- ② 灰土 (田耕土)
- ③ 黄灰色土
- ④ 黒色土 (砂礫含む)
- ⑤ 黒色土を含む灰黄
- ⑥ 暗黄色土
- ⑦ ⑤より亮い、礫
- ⑧ ⑦より細かい礫
- ⑨ 灰褐色砂礫土
- ⑩ 灰茶色土
- ⑪ 暗灰緑色土
- ⑫ 黄色粘土
- ⑬ 黄色粘土と黒色土の混在層
- ⑭ 暗黄色土と黒色土の混在層
- ⑮ 灰茶色砂礫

第8—②トレンチ

- ① 耕土
- ② 灰褐色土 (一部では黒色土が混る)
- ③ ②より素味が強い
- ④ 灰黄色土
- ⑤ 茶黒色土
- ⑥ 黒色土
- ⑦ 礫を含む黒色土
- ⑧ 黄灰色粘質土
- ⑨ 黄灰色砂礫
- ⑩ (一部では黒色土が混る)
- ⑪ 暗灰茶色土
- ⑫ 灰褐色土
- ⑬ 暗灰黄色土
- ⑭ 茶灰色土
- ⑮ 暗茶灰色土
- ⑯ 灰土

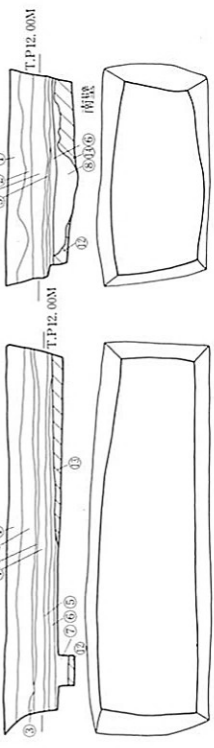


掘溝



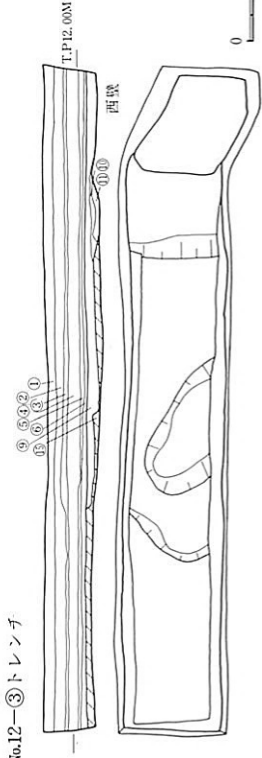
No.12-② トレンチ

No.12-① トレンチ



- 第9トレンチ
- ① 盛土
 - ② 粘土
 - ③ 旧粘土
 - ④ 黄褐色土
 - ⑤ 黄褐色土
 - ⑥ 黄褐色土
 - ⑦ 黄褐色土
 - ⑧ 黄褐色土
 - ⑨ 黄褐色土
 - ⑩ 黄褐色土
 - ⑪ 黄褐色土
 - ⑫ 黄褐色土
 - ⑬ 黄褐色土
 - ⑭ 黄褐色土
 - ⑮ 黄褐色土
- ⑬ 暗灰色砂 (鉄・マンガング粒を含む)
 ⑭ 灰黄色土
 ⑮ 灰黄色砂質土
 ⑯ 灰黄色粘質土
 ⑰ 灰黄色砂
 ⑱ 灰黄色砂礫
 ⑲ 灰黄色土
 ⑳ 灰黄色砂礫
 ㉑ 黒色土
 ㉒ 淡灰褐色砂礫

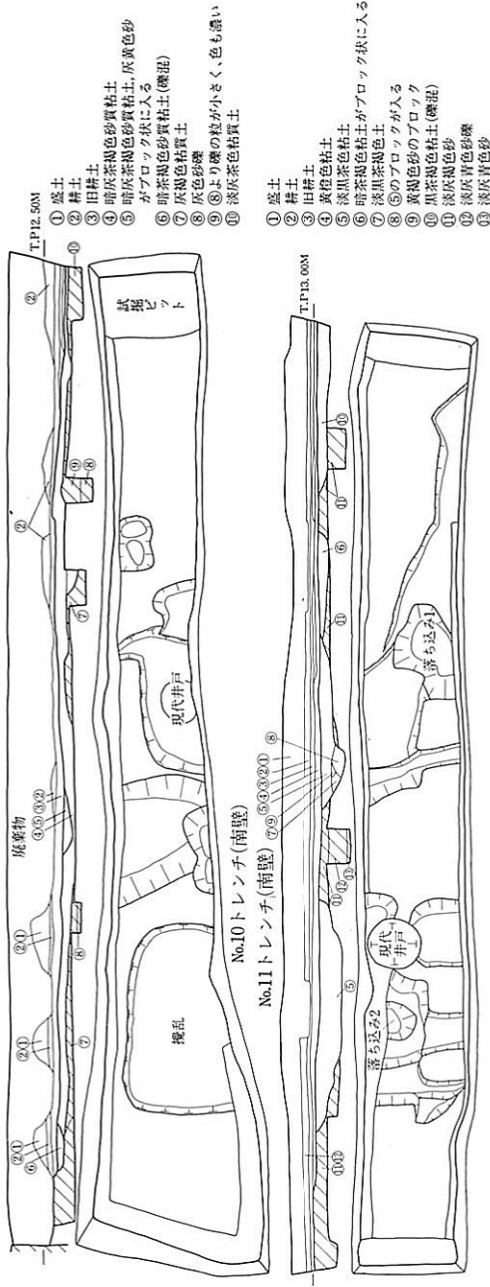
No.12-③ トレンチ



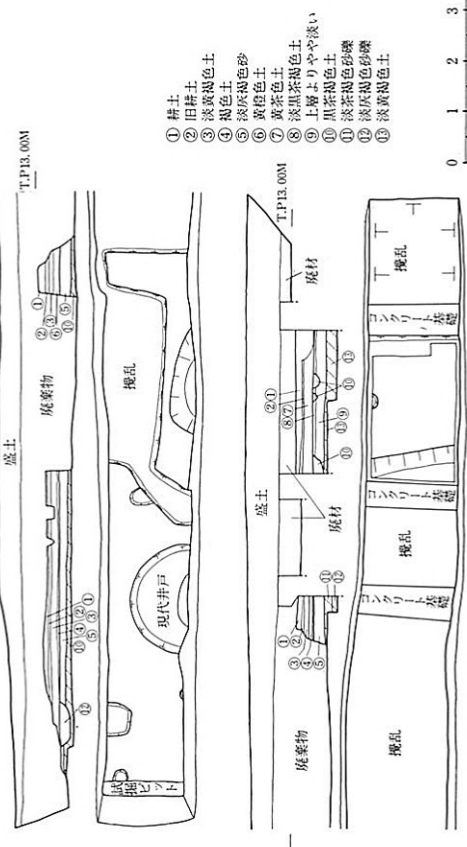
- 第12トレンチ
- ① 表土
 - ② 盛土
 - ③ 灰褐色土 (粘土)
 - ④ 灰褐色土 (褐色の粒を含む)
 - ⑤ 灰褐色土
 - ⑥ 灰褐色土 (鉄・マンガング粒を含む)
 - ⑦ 灰褐色粘質土
 - ⑧ 灰褐色砂 (1~5cmの礫を含む)
 - ⑨ 黄褐色粘土 (黒色粘土がプロットで混入)
 - ⑩ 黄褐色粘土
 - ⑪ 黄褐色砂
 - ⑫ 黄褐色砂
 - ⑬ 黄褐色砂
 - ⑭ 黄褐色砂 (鉄・マンガング粒を含む)
 - ⑮ 黄褐色粘土 (黒色粘土がプロットで混入)

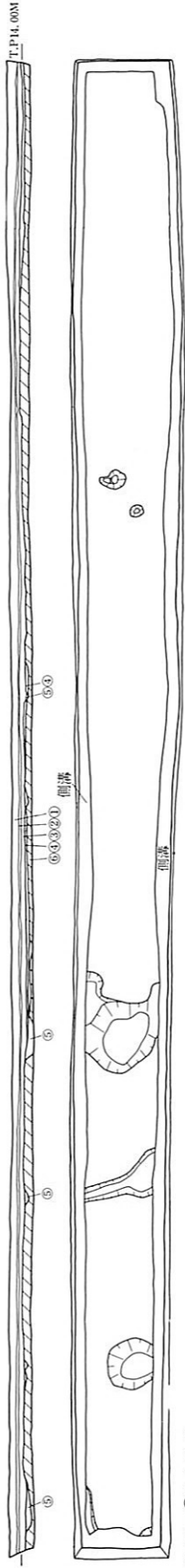


図版第六
No. 10 · No. 11 · No. 13 トレンチ断面・平面実測図

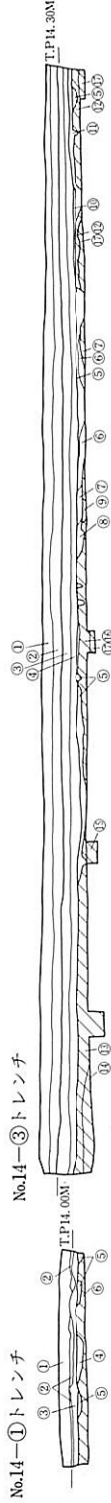


No.13 トレンチ

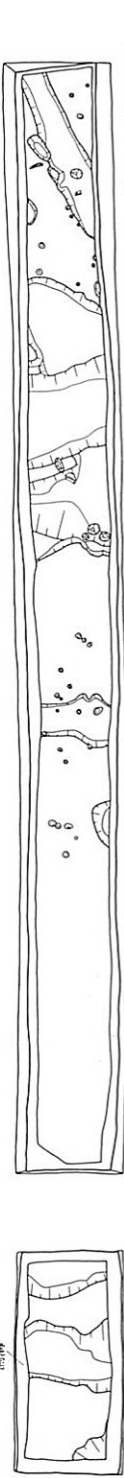




No.14-②トレンチ



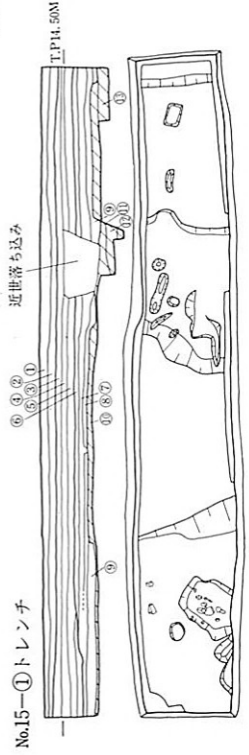
No.14-③トレンチ



No.14-①トレンチ

第14-①トレンチ

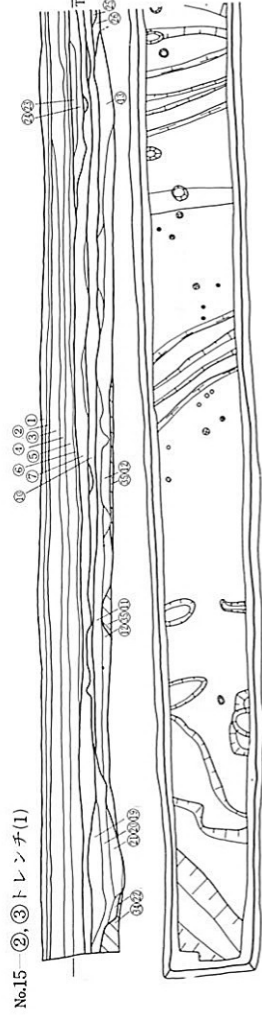
第14-③トレンチ



No.15-①トレンチ

第14-②トレンチ

第14-③トレンチ



No.15 ②、③トレンチ(1)

第15-①トレンチ

第15-②、③トレンチ(1)

⑧ ⑥に較べて黄色味が強く粘土質も増す
⑨ 黒褐色粘質土
⑩ 褐黄色粘土
⑪ 褐色砂
⑫ 明黄色粘土
⑬ 黄褐色砂質土

⑧ ⑥に較べて褐色味がわずかに強い
⑨ 明黄色粘土
⑩ 暗褐色土
⑪ ⑥に較べて褐色味がわずかに強い

① 粘土
② 黄褐色粘質土
③ ②に較べて黄色味が強い
④ ③よりさらに黄色味が強い
⑤ 灰色砂質土
⑥ 暗褐色土
⑦ ⑥に較べて褐色味がわずかに強い

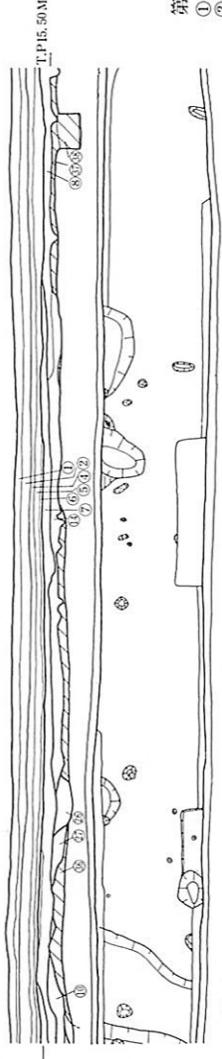
① 粘土
② 灰白色土
③ 黄褐色粘質土
④ 黒色土
⑤ 灰黄色土
⑥ 淡灰色砂礫

① 粘土
② 灰白色土
③ 黄褐色粘質土
④ 1cm以上礫を多く含む
⑤ 茶黒色土
⑥ 灰褐色砂礫 (1-5cmの礫多い)

① 灰茶色砂質土
② 淡灰色砂質土
③ 暗茶灰色土
④ 灰黄色砂質土
⑤ 灰黄色砂礫
⑥ 灰黄色砂
⑦ 灰黄色土
⑧ 淡灰黄色砂質土
⑨ 灰黄色粘土

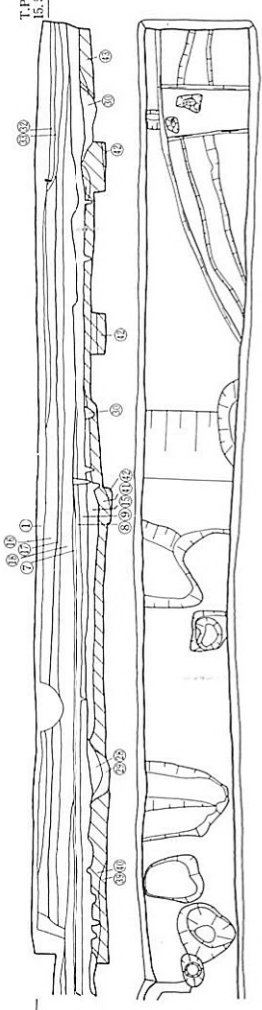
① 粘土
② 灰褐色砂質土 (1-2cmの礫含む)
③ 灰黄色砂質土
④ 淡灰褐色砂質土 (鉄・マンガング粒を含む)
⑤ 茶黒色土
⑥ ⑤よりやや茶色味強い
⑦ 灰茶色土
⑧ ⑤よりやや灰色味強い



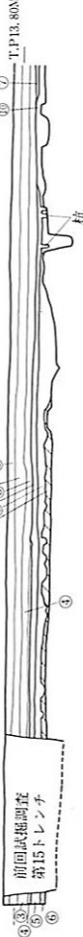


No.15—②、③トレンチ(2)

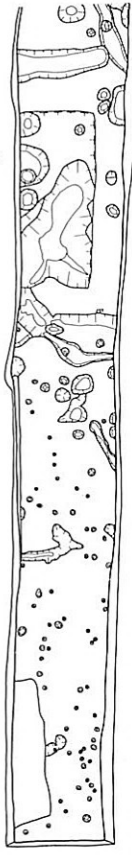
- 第15—②、③トレンチ(2)
- ① 粘土
 - ② 淡灰茶色土
 - ③ 淡灰褐色土
 - ④ 淡灰黄色土
 - ⑤ 黄白色土
 - ⑥ 淡茶色粘質土
 - ⑦ 黒色粘質土
 - ⑧ 黒褐色粘質土
 - ⑨ 茶褐色粘質土
 - ⑩ 淡灰褐色粘質土
 - ⑪ 淡灰褐色粘質土
 - ⑫ 淡茶褐色粘質土
 - ⑬ 淡茶褐色粘質土
 - ⑭ 淡灰褐色粘質土
 - ⑮ 黄褐色土
 - ⑯ 淡灰白色土
 - ⑰ 淡灰白色土
 - ⑱ 灰褐色粘質土
 - ⑲ 淡茶褐色粘質土
 - ⑳ 茶褐色粘質土
 - ㉑ 灰褐色粘質土
 - ㉒ 淡茶褐色粘質土
 - ㉓ 灰褐色粘質土
 - ㉔ 淡茶褐色粘質土
 - ㉕ 黄褐色粘質土
 - ㉖ 黄褐色粘質土
 - ㉗ 黄褐色粘質土
 - ㉘ 黄褐色粘質土
 - ㉙ 黄褐色粘質土
 - ㉚ 黄褐色粘質土
 - ㉛ 黄褐色粘質土
 - ㉜ 黄褐色粘質土
 - ㉝ 黄褐色粘質土
 - ㉞ 黄褐色粘質土
 - ㉟ 黄褐色粘質土
 - ㊱ 黄褐色粘質土
 - ㊲ 黄褐色粘質土
 - ㊳ 黄褐色粘質土
 - ㊴ 黄褐色粘質土
 - ㊵ 黄褐色粘質土
 - ㊶ 黄褐色粘質土
 - ㊷ 黄褐色粘質土
 - ㊸ 黄褐色粘質土
 - ㊹ 黄褐色粘質土
 - ㊺ 黄褐色粘質土
 - ㊻ 黄褐色粘質土
 - ㊼ 黄褐色粘質土
 - ㊽ 黄褐色粘質土
 - ㊾ 黄褐色粘質土
 - ㊿ 黄褐色粘質土



No.16トレンチ



前面実測調査
第16トレンチ

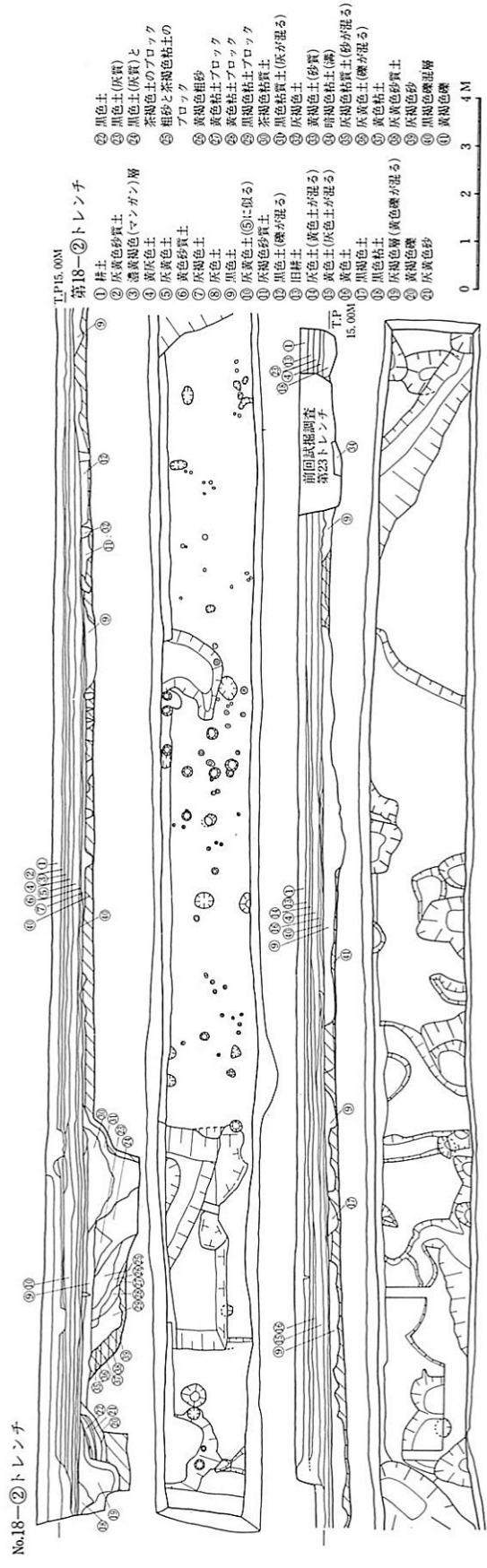
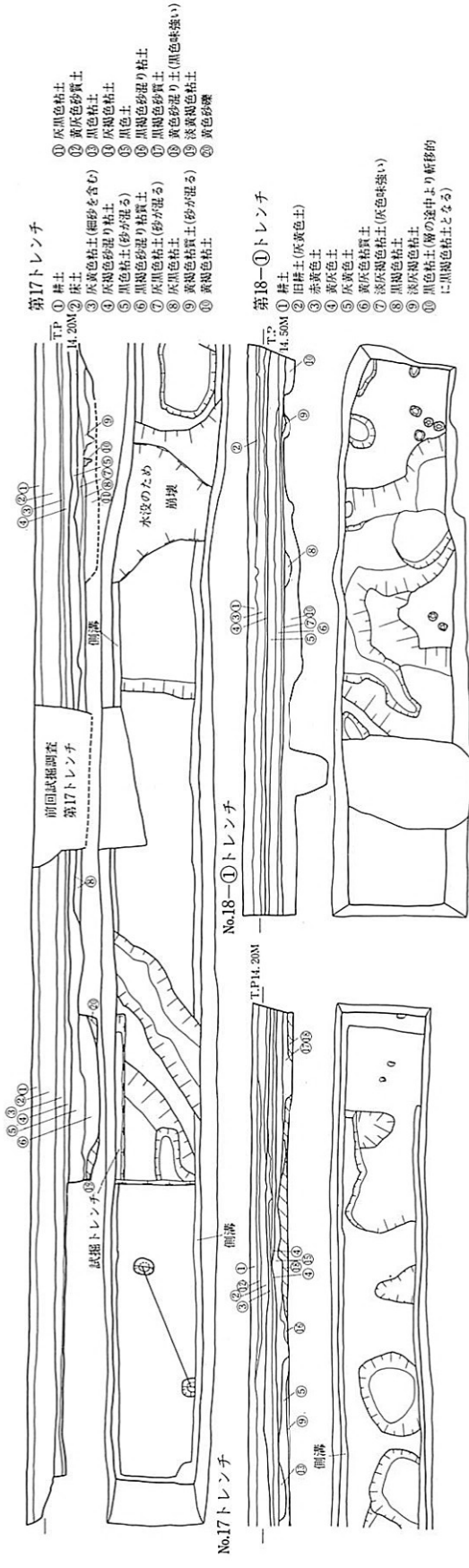


第16トレンチ

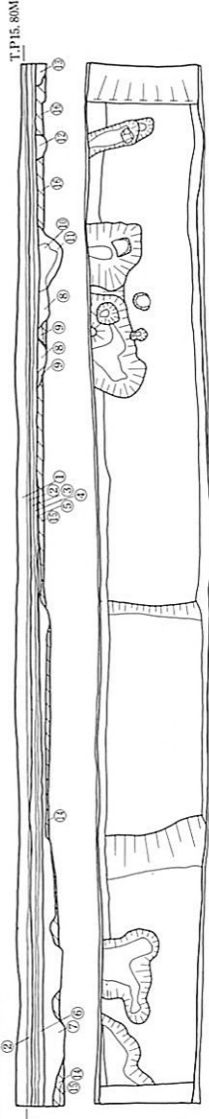
T.P. 13.80M

- ① 粘土
- ② 灰土
- ③ 灰土(黄色粘質土)
- ④ 灰黒褐色粘質土
- ⑤ 黒色粘土(細砂含)
- ⑥ 黒色粘土(粘土分強い)
- ⑦ 黒褐色土
- ⑧ 黒色粘質土
- ⑨ 黄褐色粘質土(黄色細砂混)
- ⑩ 砂混り黒褐色土
- ⑪ 暗灰色粘質土
- ⑫ 黒褐色粘質土
- ⑬ 灰褐色粘質土
- ⑭ 淡黄色細砂
- ⑮ 黄褐色粘質土
- ⑯ 淡黄褐色細砂

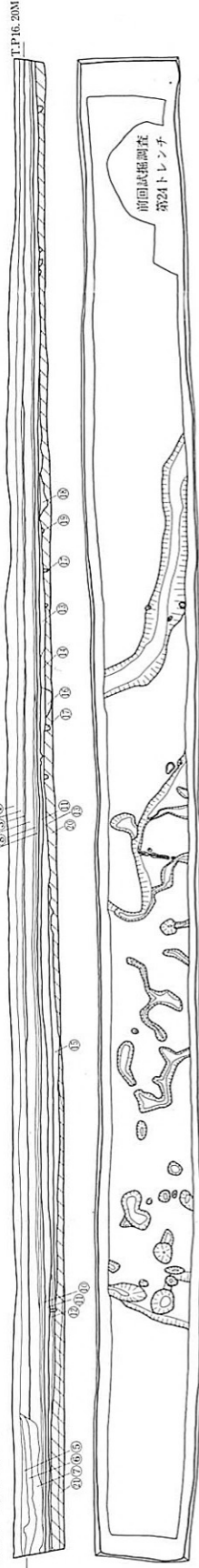




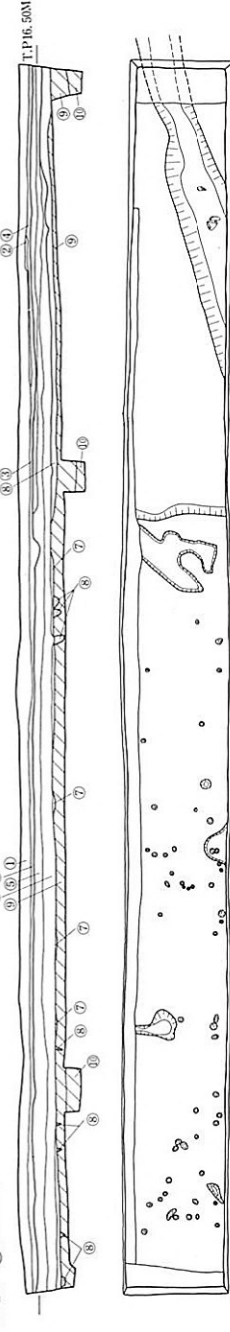
No.19—①トレンチ



No.19—②トレンチ



No.19—③トレンチ



第19—①トレンチ

- ① 粘土
- ② 灰黄色土
- ③ 淡灰褐色土
- ④ 黄色土
- ⑤ 淡灰黄色土
- ⑥ ③より灰黄色味強い
- ⑦ 暗茶灰色土(礫多く 西方では黒色味強い)
- ⑧ 茶灰色土(礫多い)
- ⑨ 灰黄色土(礫多い)
- ⑩ 黒茶色土(礫多い)
- ⑪ ⑩よりやや淡い
- ⑫ 茶黒色土(やや粘質)
- ⑬ 茶灰色粘質土
- ⑭ 灰黄色粘質土
- ⑮ 灰黄色粘質土(礫のしみこみあり)
- ⑯ 灰黄色粘質土
- ⑰ 灰黄色粘質土

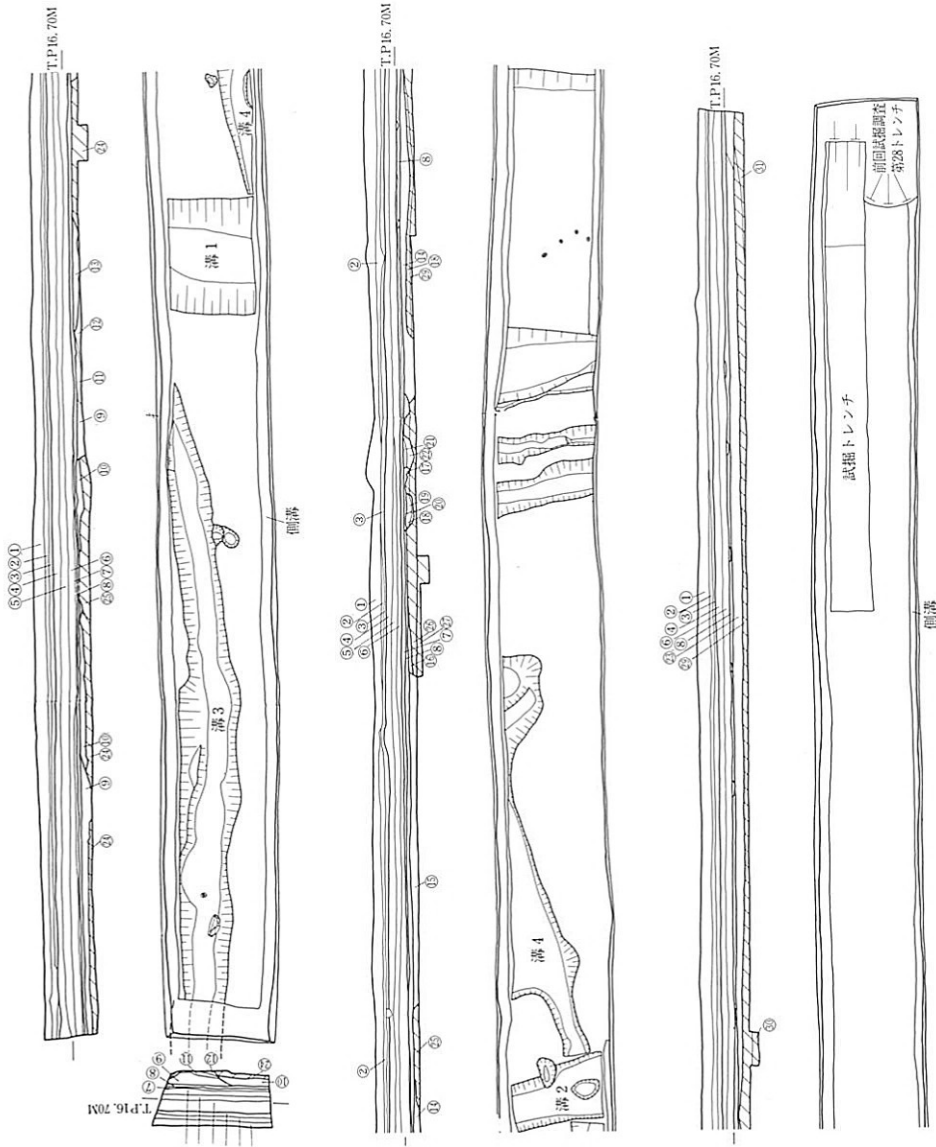
第19—②トレンチ

- ① 粘土
- ② 黄灰色土(鉄・マンガン 粒含む)
- ③ ②より黄色味強い
- ④ 灰黄色土(鉄・マンガン 粒含む)
- ⑤ 淡灰黄色粘質土
- ⑥ 黄褐色粘質土
- ⑦ 淡灰色粘質土と 淡黄色砂の互層
- ⑧ ④より黄色味強い
- ⑨ 淡灰黄色土
- ⑩ 黄灰色土(砂を含む)
- ⑪ 暗茶色土(砂を含む)
- ⑫ 淡灰茶色土
- ⑬ 暗灰黄色土
- ⑭ ⑬よりやや黄色味強い
- ⑮ 淡灰褐色土 (炭化物を含む)
- ⑯ 淡灰黄色粘土
- ⑰ 淡灰茶色粘土
- ⑱ 淡灰黄色土
- ⑲ 黄色粘土
- ⑳ 灰黒褐色土
- ㉑ 淡灰褐色土

第19—③トレンチ

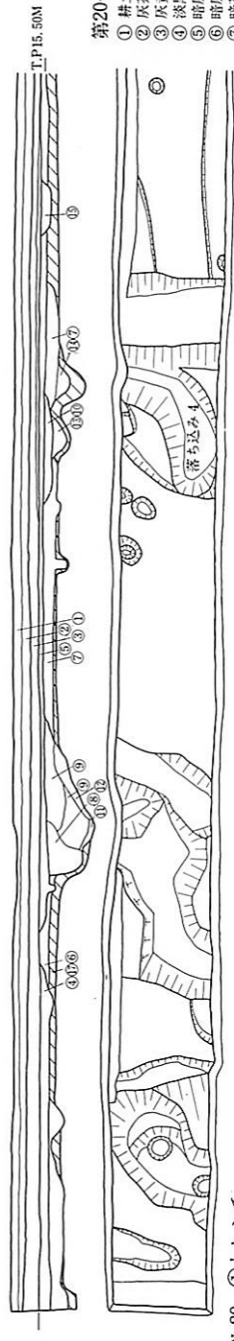
- ① 粘土
- ② 淡黄褐色土
- ③ 淡茶色土
- ④ 灰黄褐色土
- ⑤ 淡灰黄色土
- ⑥ 灰黄色土
- ⑦ 黄色粘質土
- ⑧ 暗茶褐色粘質土
- ⑨ 淡黄褐色粘質土
- ⑩ 淡灰黄色粘質土
- ⑪ 淡灰褐色粘質土
- ⑫ 黄褐色粘質土
- ⑬ 黄褐色粘質土
- ⑭ 黄褐色粘質土
- ⑮ 黄褐色粘質土
- ⑯ 黄褐色粘質土
- ⑰ 黄褐色粘質土
- ⑱ 黄褐色粘質土
- ⑲ 黄褐色粘質土
- ⑳ 黄褐色粘質土
- ㉑ 黄褐色粘質土
- ㉒ 黄褐色粘質土
- ㉓ 黄褐色粘質土
- ㉔ 黄褐色粘質土
- ㉕ 黄褐色粘質土
- ㉖ 黄褐色粘質土
- ㉗ 黄褐色粘質土
- ㉘ 黄褐色粘質土
- ㉙ 黄褐色粘質土
- ㉚ 黄褐色粘質土
- ㉛ 黄褐色粘質土
- ㉜ 黄褐色粘質土
- ㉝ 黄褐色粘質土
- ㉞ 黄褐色粘質土
- ㉟ 黄褐色粘質土
- ㊱ 黄褐色粘質土
- ㊲ 黄褐色粘質土
- ㊳ 黄褐色粘質土
- ㊴ 黄褐色粘質土
- ㊵ 黄褐色粘質土
- ㊶ 黄褐色粘質土
- ㊷ 黄褐色粘質土
- ㊸ 黄褐色粘質土
- ㊹ 黄褐色粘質土
- ㊺ 黄褐色粘質土
- ㊻ 黄褐色粘質土
- ㊼ 黄褐色粘質土
- ㊽ 黄褐色粘質土
- ㊾ 黄褐色粘質土
- ㊿ 黄褐色粘質土





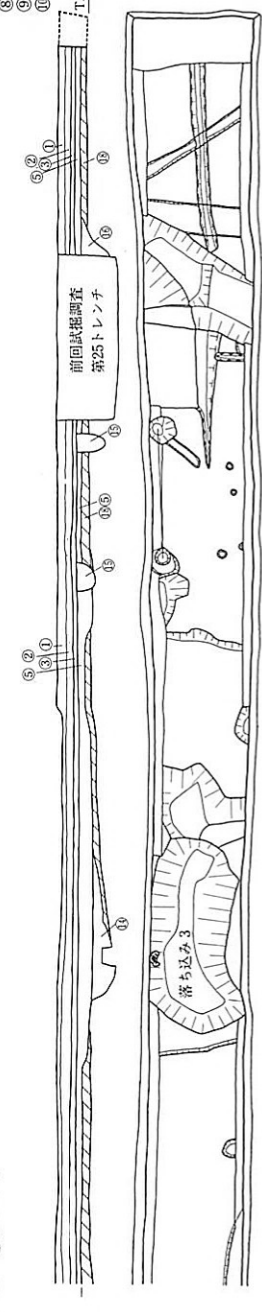
- ① 粘土
- ② 灰土
- ③ 黄褐色土
- ④ 淡黄褐色土
- ⑤ 黄褐色土
- ⑥ 灰褐色土(鉄・マンガン粒含む)
- ⑦ 黄褐色土
- ⑧ 黄褐色粘土
- ⑨ 暗茶灰色粘質土(砂を含む)
- ⑩ 暗茶灰色粘質土(砂を含む)
- ⑪ 茶黒色土
- ⑫ 灰褐色粘質土
- ⑬ 黒色土
- ⑭ 暗灰色土
- ⑮ 灰褐色土(砂を含む)
- ⑯ 灰褐色土
- ⑰ 灰褐色土(砂を含む)
- ⑱ 灰褐色土(砂を含む)
- ⑲ 灰褐色粘土
- ⑳ 灰褐色粘土
- ㉑ 暗灰色土
- ㉒ 暗茶褐色粘質土
- ㉓ 茶褐色粘質土
- ㉔ 淡黄褐色土
- ㉕ 淡黄褐色粘質土(砂礫を含む)
- ㉖ 淡黄褐色粘質土
- ㉗ 灰褐色粘土
- ㉘ 灰褐色粘土
- ㉙ 黄色粘土
- ㉚ 暗灰色土
- ㉛ 灰褐色砂質土
- ㉜ 茶褐色土
- ㉝ 茶褐色土

0 1 2 3 4 5 M

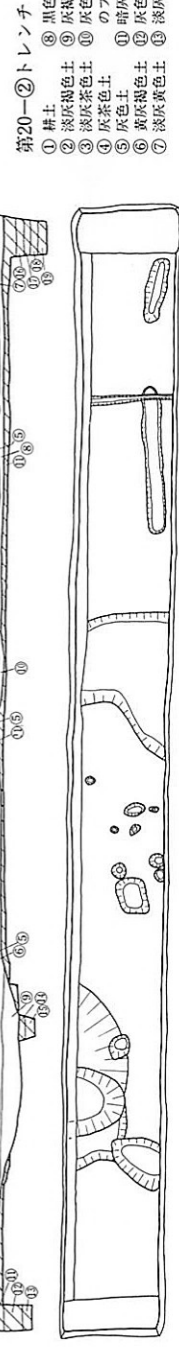


第20-①トレンチ

- ① 粘土 (白黄色粘土のアロックが入る)
- ② 灰黄色土
- ③ 灰黒色土
- ④ 淡黒灰褐色土
- ⑤ 暗灰褐色土
- ⑥ 暗茶褐色土
- ⑦ 暗茶褐色粘質土
- ⑧ 黒茶褐色粘質土
- ⑨ 暗褐色粘質土
- ⑩ 茶褐色粘質土
- ⑪ 黄褐色粘質土
- ⑫ 灰茶褐色粘質土
- ⑬ 黒色土
- ⑭ 淡灰褐色粘土
- ⑮ 灰褐色粘土
- ⑯ 灰褐色粘質土
- ⑰ 灰褐色粘質土
- ⑱ 灰褐色粘質土
- ⑲ 灰褐色粘質土
- ⑳ 灰褐色粘質土



No.20-②トレンチ



No.20-③トレンチ

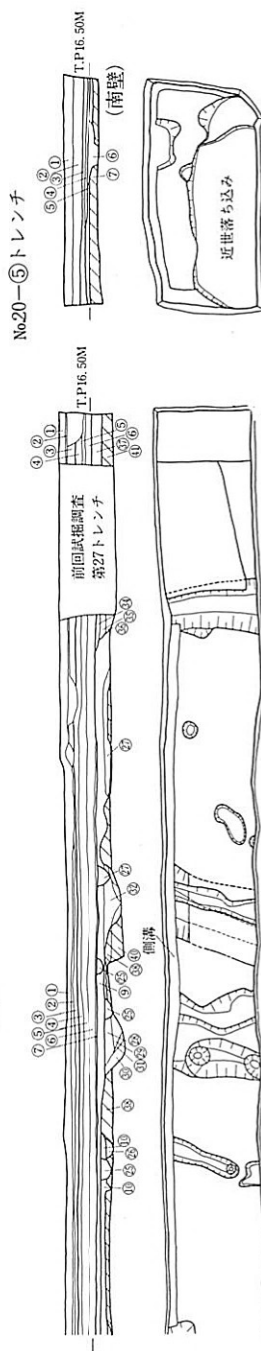
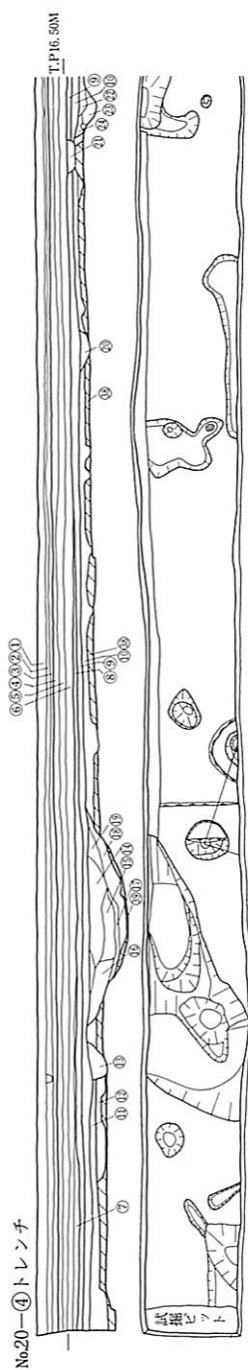
第20-②トレンチ

- ① 粘土
- ② 淡灰褐色土
- ③ 淡灰褐色土
- ④ 灰褐色土
- ⑤ 灰褐色土
- ⑥ 黄褐色粘土
- ⑦ 淡灰黄色粘砂
- ⑧ 黒色土
- ⑨ 灰褐色粘土
- ⑩ 灰褐色粘土
- ⑪ 暗灰褐色粘土
- ⑫ 暗灰褐色粘土
- ⑬ 灰褐色粘土
- ⑭ 灰褐色粘土
- ⑮ 灰褐色粘土
- ⑯ 灰褐色粘土
- ⑰ 灰褐色粘土
- ⑱ 灰褐色粘土
- ⑲ 灰褐色粘土
- ⑳ 灰褐色粘土

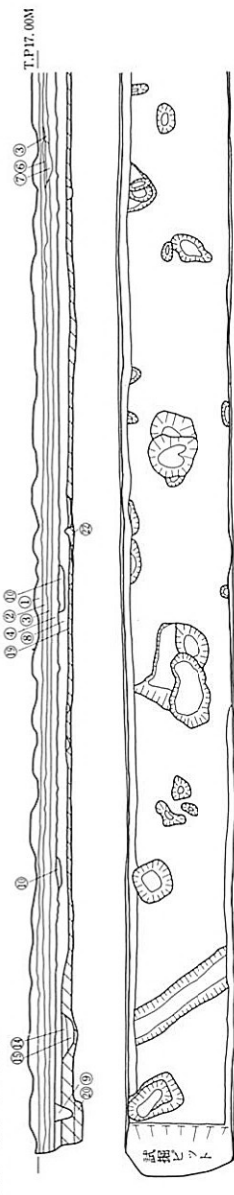
第20-③トレンチ

- ① 粘土
- ② 旧粘土
- ③ 淡灰褐色土
- ④ 淡灰黄色土
- ⑤ 灰黄色土
- ⑥ 灰褐色土
- ⑦ 褐色土
- ⑧ 暗褐色土
- ⑨ 淡褐色土
- ⑩ 茶褐色土
- ⑪ 暗茶褐色土
- ⑫ 旧粘土
- ⑬ 暗灰褐色土
- ⑭ 淡灰褐色土
- ⑮ 黄色粘土
- ⑯ 黄色粘土
- ⑰ 黄色粘土
- ⑱ 黄色粘土
- ⑲ 黄色粘土
- ⑳ 黄色粘土





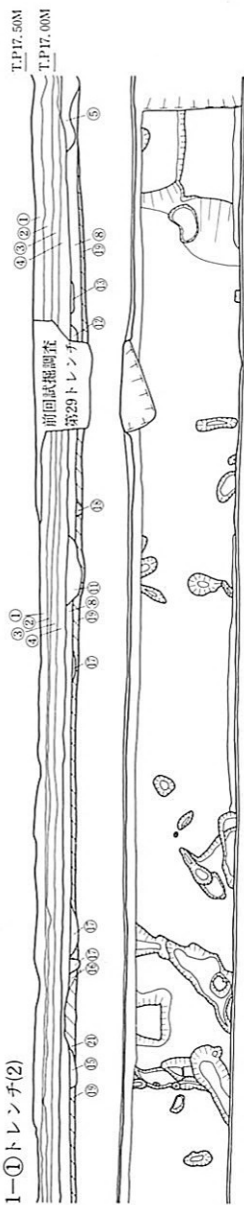
No.21—①トレンチ(1)



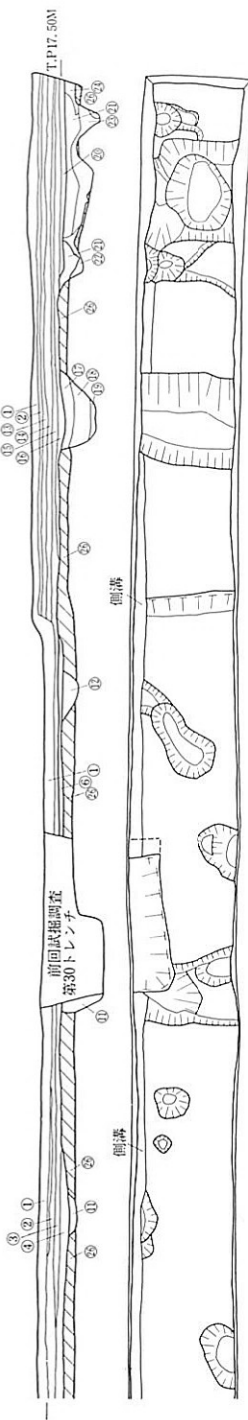
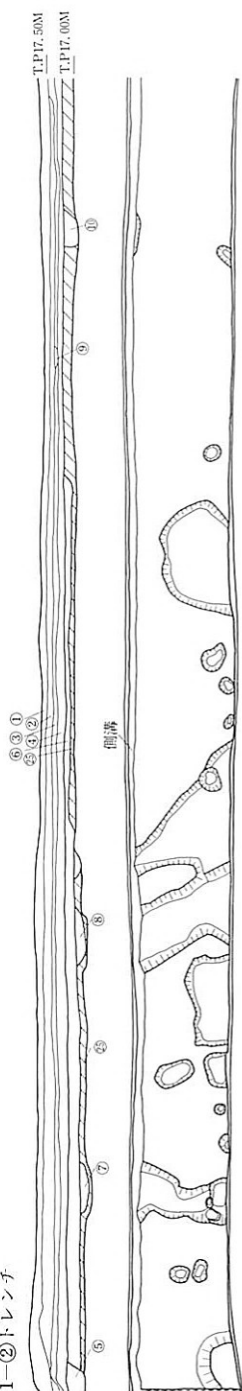
- No.20—④トレンチ
- ① 粘土
 - ② 田耕土(灰色粘質土)
 - ③ 灰黄色粘質土(灰味強い)
 - ④ 灰黄色粘質土(灰味強い)
 - ⑤ 茶灰色土
 - ⑥ 黄褐色粘質土
 - ⑦ 黄褐色粘質土
 - ⑧ 黄褐色粘質土
 - ⑨ 黄褐色粘質土
 - ⑩ 黄褐色粘質土
 - ⑪ 黄褐色粘質土
 - ⑫ 黄褐色粘質土
 - ⑬ 黄褐色粘質土
 - ⑭ 黄褐色粘質土
 - ⑮ 黄褐色粘質土
 - ⑯ 黄褐色粘質土
 - ⑰ 黄褐色粘質土
 - ⑱ 黄褐色粘質土
 - ⑲ 黄褐色粘質土
 - ⑳ 黄褐色粘質土
 - ㉑ 黄褐色粘質土
 - ㉒ 黄褐色粘質土
 - ㉓ 黄褐色粘質土
 - ㉔ 黄褐色粘質土
 - ㉕ 黄褐色粘質土
 - ㉖ 黄褐色粘質土
 - ㉗ 黄褐色粘質土
 - ㉘ 黄褐色粘質土
 - ㉙ 黄褐色粘質土
 - ㉚ 黄褐色粘質土
 - ㉛ 黄褐色粘質土
 - ㉜ 黄褐色粘質土
 - ㉝ 黄褐色粘質土
 - ㉞ 黄褐色粘質土
 - ㉟ 黄褐色粘質土
 - ㊱ 黄褐色粘質土
 - ㊲ 黄褐色粘質土
 - ㊳ 黄褐色粘質土
 - ㊴ 黄褐色粘質土
 - ㊵ 黄褐色粘質土
 - ㊶ 黄褐色粘質土
 - ㊷ 黄褐色粘質土
 - ㊸ 黄褐色粘質土
 - ㊹ 黄褐色粘質土
 - ㊺ 黄褐色粘質土
 - ㊻ 黄褐色粘質土
 - ㊼ 黄褐色粘質土
 - ㊽ 黄褐色粘質土
 - ㊾ 黄褐色粘質土
 - ㊿ 黄褐色粘質土
- No.20—⑤トレンチ
- ① 粘土
 - ② 田耕土(灰色粘質土)
 - ③ 灰黄色粘質土
 - ④ 灰黄色粘質土
 - ⑤ 茶灰色土
 - ⑥ 黄褐色粘質土
 - ⑦ 黄褐色粘質土
 - ⑧ 黄褐色粘質土
 - ⑨ 黄褐色粘質土
 - ⑩ 黄褐色粘質土
 - ⑪ 黄褐色粘質土
 - ⑫ 黄褐色粘質土
 - ⑬ 黄褐色粘質土
 - ⑭ 黄褐色粘質土
 - ⑮ 黄褐色粘質土
 - ⑯ 黄褐色粘質土
 - ⑰ 黄褐色粘質土
 - ⑱ 黄褐色粘質土
 - ⑲ 黄褐色粘質土
 - ⑳ 黄褐色粘質土
 - ㉑ 黄褐色粘質土
 - ㉒ 黄褐色粘質土
 - ㉓ 黄褐色粘質土
 - ㉔ 黄褐色粘質土
 - ㉕ 黄褐色粘質土
 - ㉖ 黄褐色粘質土
 - ㉗ 黄褐色粘質土
 - ㉘ 黄褐色粘質土
 - ㉙ 黄褐色粘質土
 - ㉚ 黄褐色粘質土
 - ㉛ 黄褐色粘質土
 - ㉜ 黄褐色粘質土
 - ㉝ 黄褐色粘質土
 - ㉞ 黄褐色粘質土
 - ㉟ 黄褐色粘質土
 - ㊱ 黄褐色粘質土
 - ㊲ 黄褐色粘質土
 - ㊳ 黄褐色粘質土
 - ㊴ 黄褐色粘質土
 - ㊵ 黄褐色粘質土
 - ㊶ 黄褐色粘質土
 - ㊷ 黄褐色粘質土
 - ㊸ 黄褐色粘質土
 - ㊹ 黄褐色粘質土
 - ㊺ 黄褐色粘質土
 - ㊻ 黄褐色粘質土
 - ㊼ 黄褐色粘質土
 - ㊽ 黄褐色粘質土
 - ㊾ 黄褐色粘質土
 - ㊿ 黄褐色粘質土
- No.21—①トレンチ
- ① 粘土
 - ② 田耕土(灰色粘質土)
 - ③ 灰黄色粘質土(灰味強い)
 - ④ 灰黄色粘質土(灰味強い)
 - ⑤ 茶灰色土
 - ⑥ 黄褐色粘質土
 - ⑦ 黄褐色粘質土
 - ⑧ 黄褐色粘質土
 - ⑨ 黄褐色粘質土
 - ⑩ 黄褐色粘質土
 - ⑪ 黄褐色粘質土
 - ⑫ 黄褐色粘質土
 - ⑬ 黄褐色粘質土
 - ⑭ 黄褐色粘質土
 - ⑮ 黄褐色粘質土
 - ⑯ 黄褐色粘質土
 - ⑰ 黄褐色粘質土
 - ⑱ 黄褐色粘質土
 - ⑲ 黄褐色粘質土
 - ⑳ 黄褐色粘質土
 - ㉑ 黄褐色粘質土
 - ㉒ 黄褐色粘質土
 - ㉓ 黄褐色粘質土
 - ㉔ 黄褐色粘質土
 - ㉕ 黄褐色粘質土
 - ㉖ 黄褐色粘質土
 - ㉗ 黄褐色粘質土
 - ㉘ 黄褐色粘質土
 - ㉙ 黄褐色粘質土
 - ㉚ 黄褐色粘質土
 - ㉛ 黄褐色粘質土
 - ㉜ 黄褐色粘質土
 - ㉝ 黄褐色粘質土
 - ㉞ 黄褐色粘質土
 - ㉟ 黄褐色粘質土
 - ㊱ 黄褐色粘質土
 - ㊲ 黄褐色粘質土
 - ㊳ 黄褐色粘質土
 - ㊴ 黄褐色粘質土
 - ㊵ 黄褐色粘質土
 - ㊶ 黄褐色粘質土
 - ㊷ 黄褐色粘質土
 - ㊸ 黄褐色粘質土
 - ㊹ 黄褐色粘質土
 - ㊺ 黄褐色粘質土
 - ㊻ 黄褐色粘質土
 - ㊼ 黄褐色粘質土
 - ㊽ 黄褐色粘質土
 - ㊾ 黄褐色粘質土
 - ㊿ 黄褐色粘質土



No.21—①トレンチ(2)



No.21—②トレンチ



第21—①トレンチ(2)

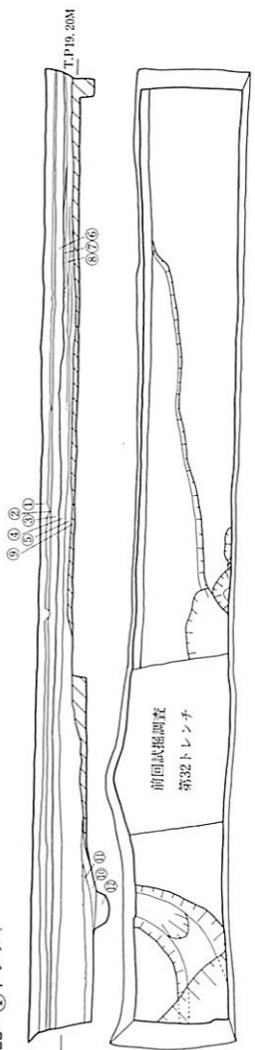
図版十三の第21—①トレンチ(1)の層名を参照のこと。

第21—②トレンチ

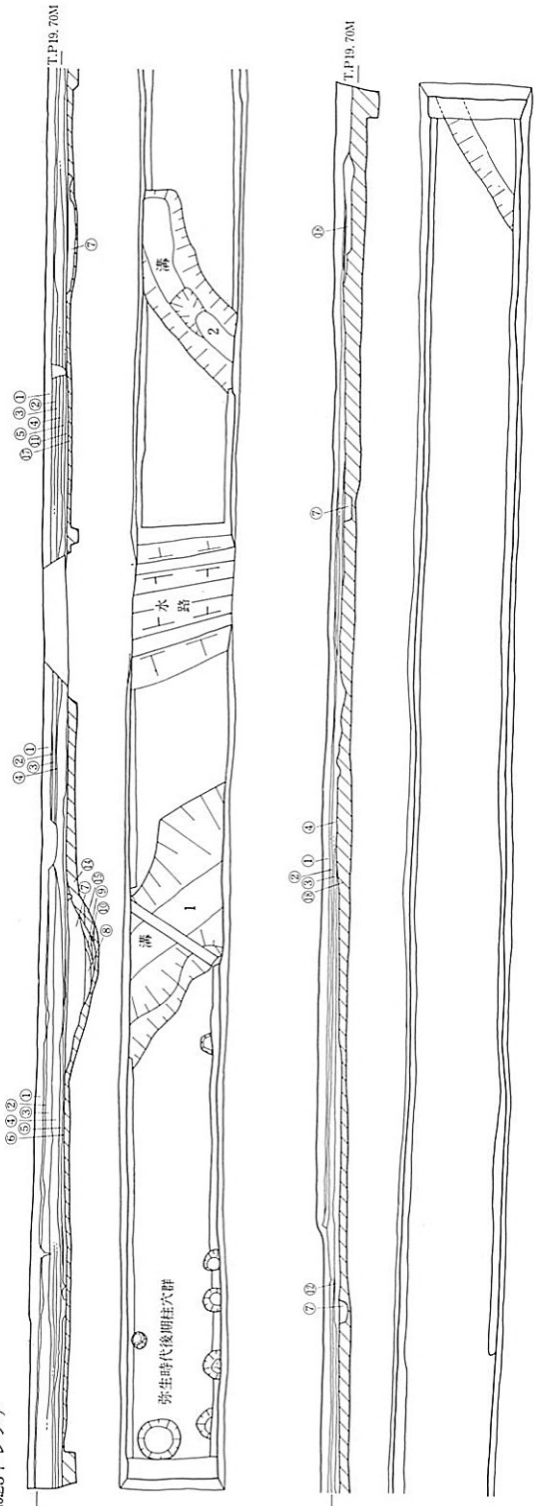
- ① 粘土
- ② 灰黄色砂質土(灰色味強い)
- ③ 灰黄色砂質土(黄色味強い)
- ④ 灰黄色砂質土(灰色味強い)
- ⑤ 茶灰色土
- ⑥ 茶黒色土
- ⑦ ⑥よりやや淡い
- ⑧ 暗茶褐色土
- ⑨ 灰紫色土
- ⑩ 黒褐色土
- ⑪ 暗茶黒色土(やや粘質)
- ⑫ 暗茶黒色土
- ⑬ 灰黄色砂質土(褐色味強い)
- ⑭ 灰黄色砂質土(灰色味強い)
- ⑮ 灰黄色砂質土(黄色味強い)
- ⑯ 灰黄色砂質土(黄褐色味強い)
- ⑰ 灰黄色砂質土(黄褐色味強い)
- ⑱ 暗茶褐色土
- ⑲ 暗茶灰色土
- ⑳ 黄褐色土
- ㉑ ⑳より淡く砂質
- ㉒ 黒茶色粘質土(礫多い)
- ㉓ 暗黄褐色土(礫多い)
- ㉔ 茶褐色土(鉄・マンガンを含む)
- ㉕ 淡茶黒色土
- ㉖ 暗茶褐色土
- ㉗ 暗茶灰色土
- ㉘ 黄褐色土
- ㉙ 暗灰茶色粘質土
- ㉚ 茶黒色砂礫



No.22—①トレンチ



No.23トレンチ



第22—①トレンチ

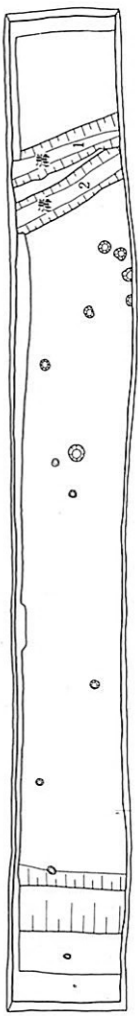
- ① 粘土
- ② 灰白土
- ③ 灰黄色砂質土
- ④ 黄褐色土
- ⑤ 灰褐色粘質土
- ⑥ ③より黄色味強い
- ⑦ ③より灰黄色味強い
- ⑧ ③より茶色味強い
- ⑨ 赤褐色砂礫層
- ⑩ 灰黄色粘質土
- ⑪ 灰褐色粘質土
- ⑫ 灰褐色粘質土

第23トレンチ

- ① 粘土
- ② 黄褐色土
- ③ 黄褐色土(礫混)
- ④ 黄褐色土(礫混)
- ⑤ 黄褐色粘質土
- ⑥ 灰褐色土
- ⑦ 灰褐色土(②とは異なる)
- ⑧ 黒褐色土(礫混)
- ⑨ 黄褐色砂
- ⑩ 黄褐色土(礫混)
- ⑪ 灰黄色粘質土
- ⑫ 灰黄色土(②とは異なる)
- ⑬ 灰黄色砂質土
- ⑭ 茶褐色土
- ⑮ 黒褐色土
- ⑯ 茶褐色砂質土
- ⑰ 明黄褐色砂
- ⑱ 黒褐色土(砂礫混)
- ⑳ 黄褐色砂質土

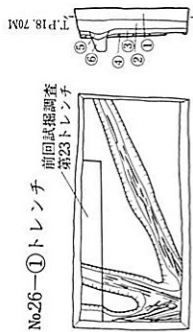


No.25—①トレンチ

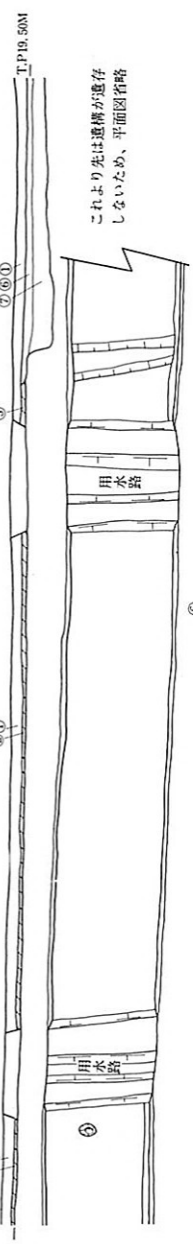
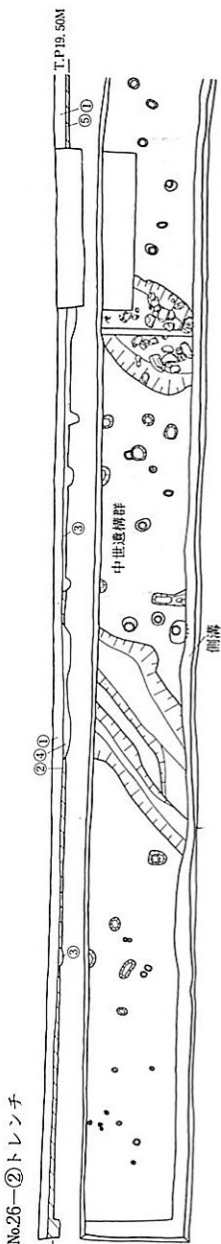


前回は調査
第23トレンチ

No.26—①トレンチ



No.26—②トレンチ



第25—①トレンチ

- ① 粘土
- ② 旧粘土
- ③ 黄色粘土
- ④ 灰色砂層
- ⑤ 黄色粘土(灰色混)
- ⑥ 黄灰色土
- ⑦ 灰色土
- ⑧ 灰色粘土(黄褐色混)
- ⑨ 灰色砂質土
- ⑩ 黄色、白灰色ブロック粘土

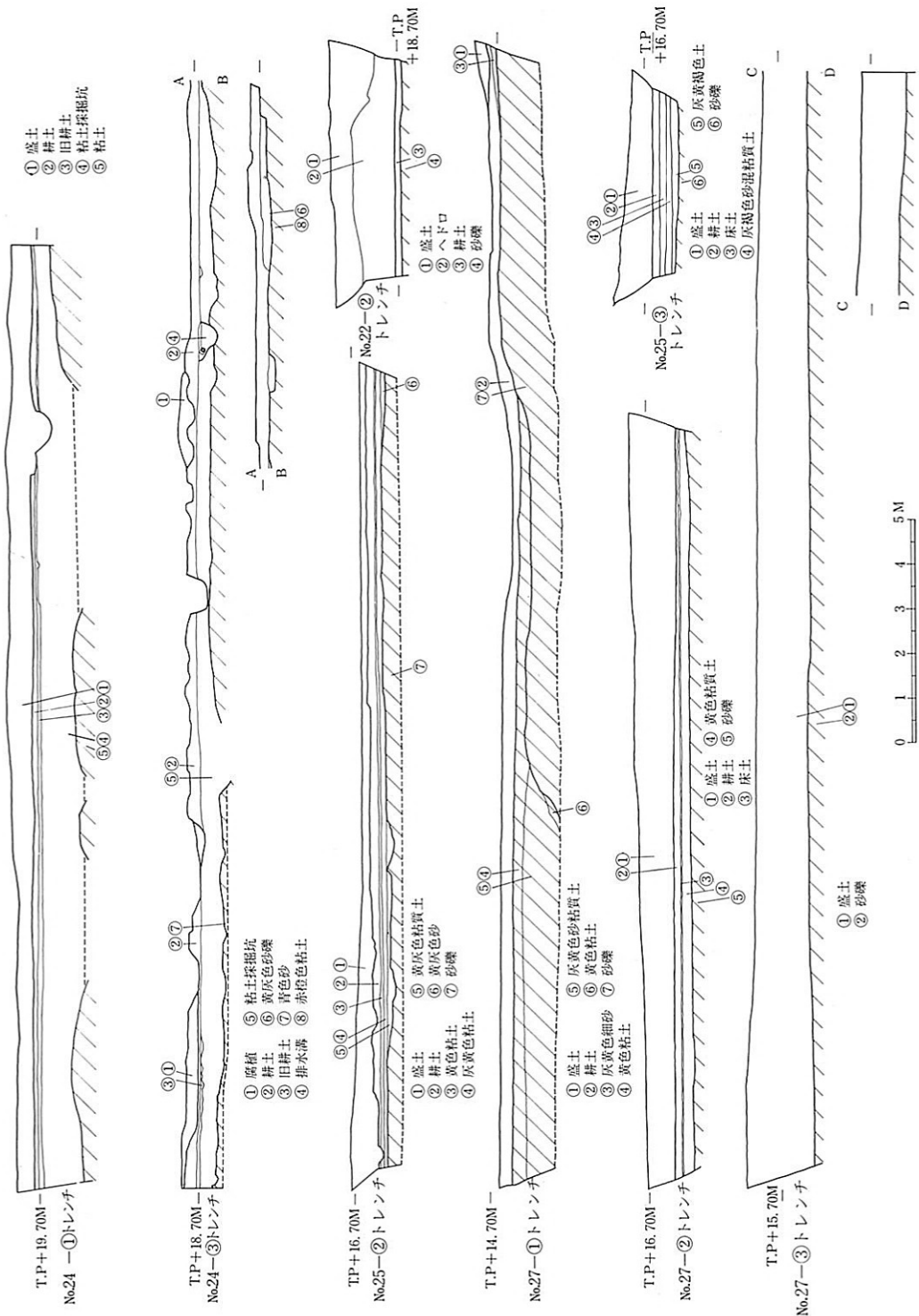
第26—①トレンチ

- ① 粘土
- ② 黄灰色粘土
- ③ 黄灰色粘土と灰色粘土が混る
- ④ 赤褐色砂(粘土混)
- ⑤ 灰色粘土(黄色粘土混)
- ⑥ 灰色粘土

第26—②トレンチ

- ① 黄色粘質土
- ② 黄灰色砂質土
- ③ 黄灰色砂質土
- ④ 灰色砂質土
- ⑤ 黄色粘土(砂礫混)
- ⑥ 黄灰色土
- ⑦ 粘土探掘跡
- ⑧ 灰白色粘土





図版第十七
 No. 22 — ② · No. 24 — ① ③ · No. 25 — ② ③ · No. 27 — ① ② ③ トレンチ断面実測図



府教委調査地
より海側方面



府教委調査地
より山側方面



貝塚市役所より
調査地方面



No. 1 トレンチ 断面



No. 2 - ② トレンチ 断面



No. 2 - ① トレンチ 遺構面



No. 4 トレンチ 断面



No. 5 - ① トレンチ 断面



No. 6 トレンチ 断面



No. 7-① トレンチ 遺構面



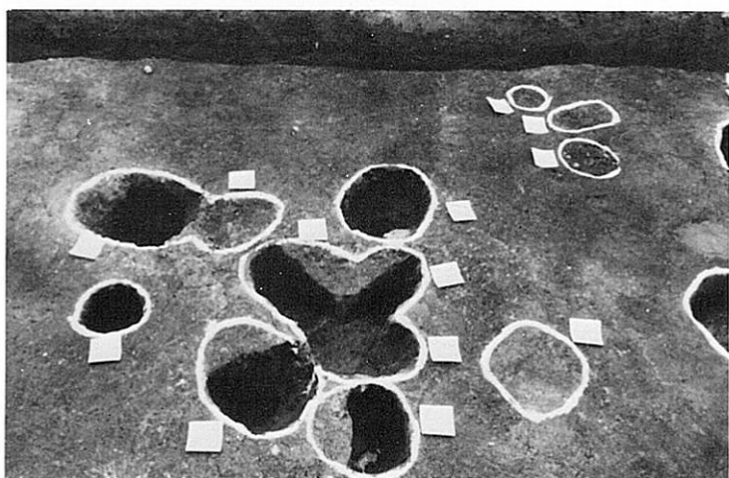
No. 7-① トレンチ 落ち込み



No. 7-② トレンチ 遺構面



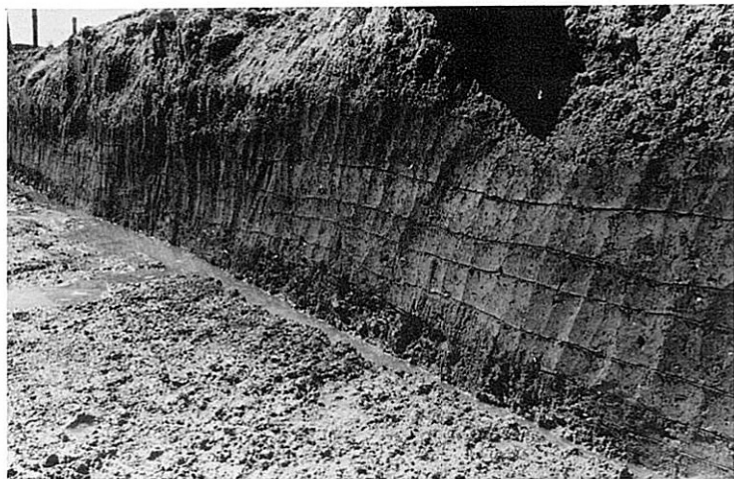
No. 8 ー① トレンチ 遺構面



No. 8 ー② トレンチ 柱穴群



No. 8 ー② トレンチ 柱穴群



No. 9 トレンチ 断面



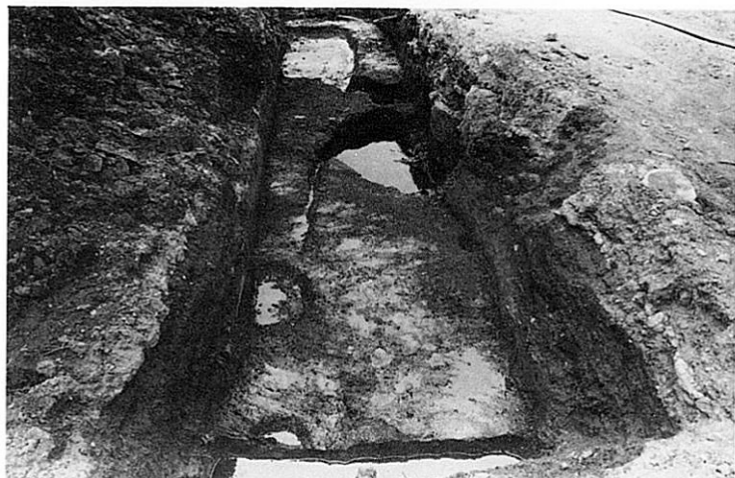
No.11 トレンチ 遺構面



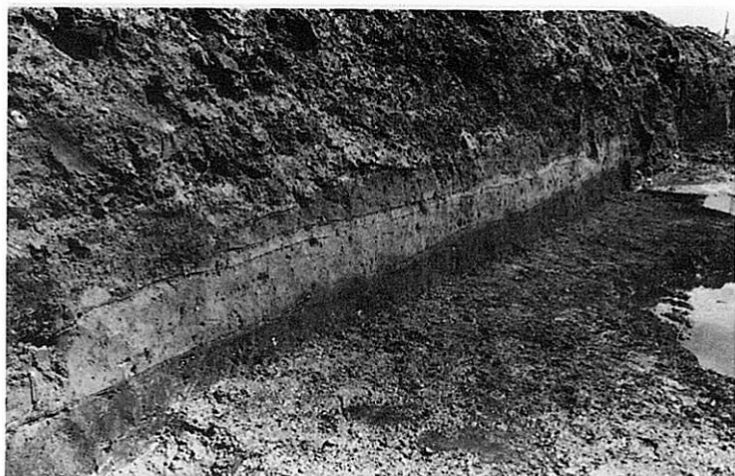
No.10 トレンチ 遺構面



No.12-③トレンチ 遺構面



No.13トレンチ 遺構面



No.13トレンチ 断面



No.14-①トレンチ 遺構面



No.14-②トレンチ 遺構面



No.14-③トレンチ 遺構面



No.15—①トレンチ 遺構面



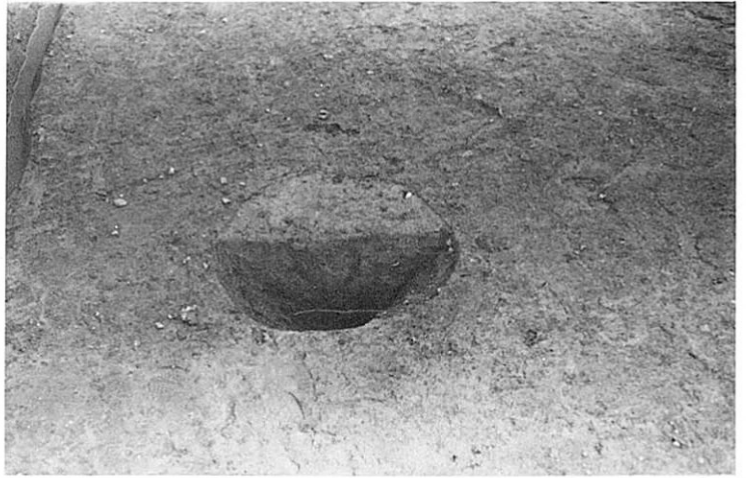
No.15—②・③トレンチ 遺構面



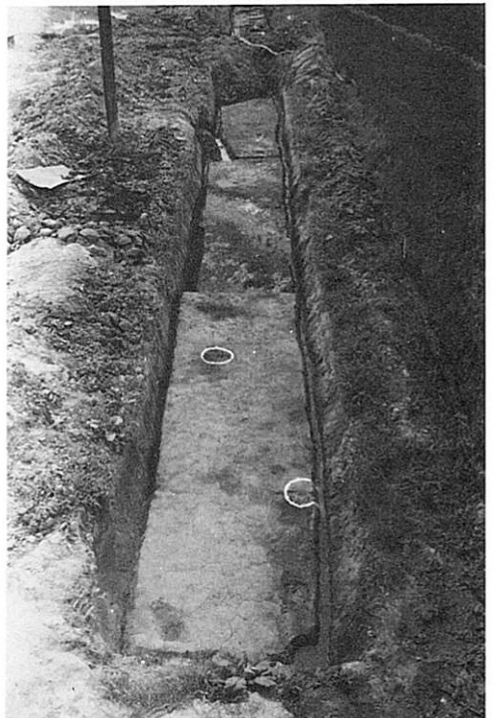
No.15—②・③トレンチ 断面



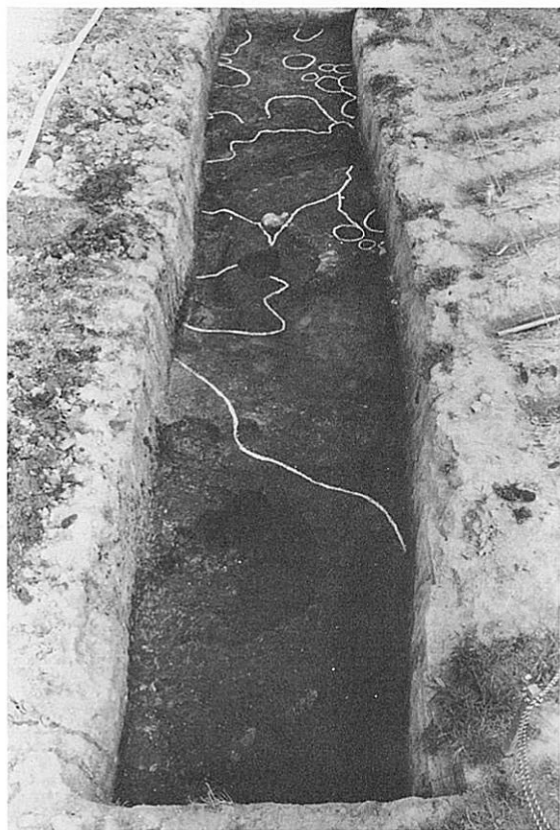
No.16トレンチ 遺構面



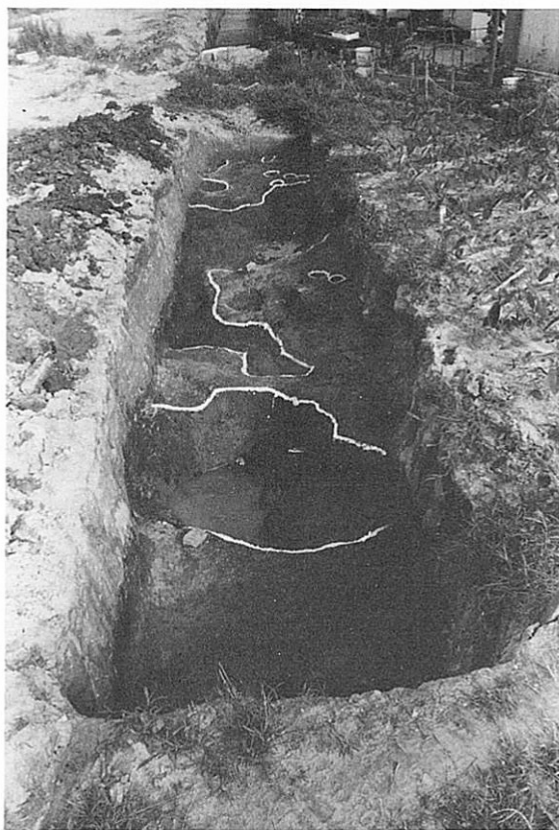
No.17トレンチ 柱穴



No.17トレンチ 遺構面



No.18-①トレンチ 黒褐色砂礫土遺構面



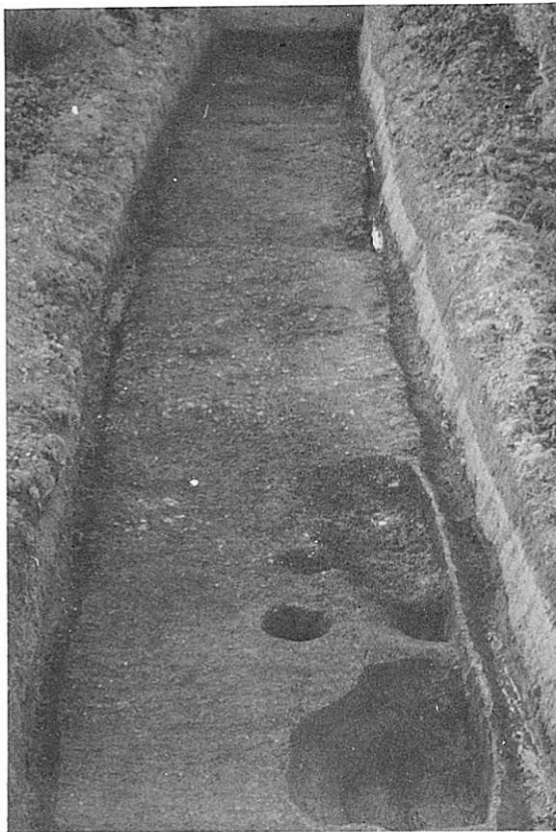
No.18-①トレンチ 地山遺構面



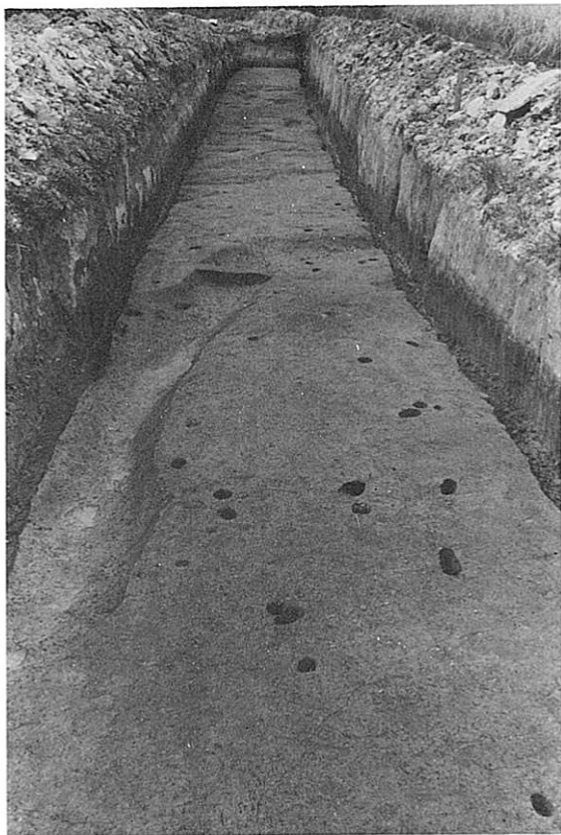
No.18-②トレンチ 遺構面



No.18-②トレンチ 柱穴群



No.19-①トレンチ 遺構面



No.19-②トレンチ 遺構面



No.19-③トレンチ 遺構面



No.19-④トレンチ 遺構面



No.20-①トレンチ 遺構面



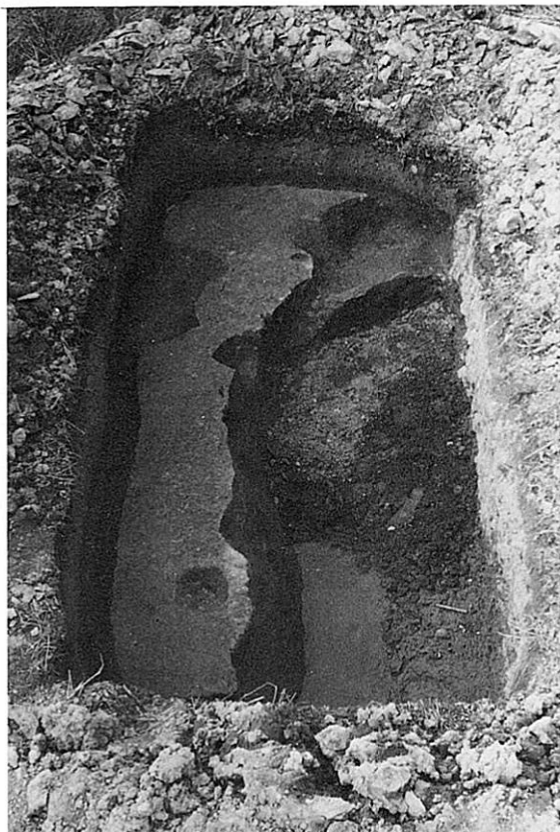
No.20-②トレンチ 遺構面



No.20-③トレンチ 遺構面



No.20-④トレンチ 遺構面



No.20-⑤トレンチ 遺構面



No.21-①トレンチ 上層遺構面



No.21-①トレンチ 下層遺構面



No.21-②トレンチ 遺構面



No.22—①トレンチ 遺構面



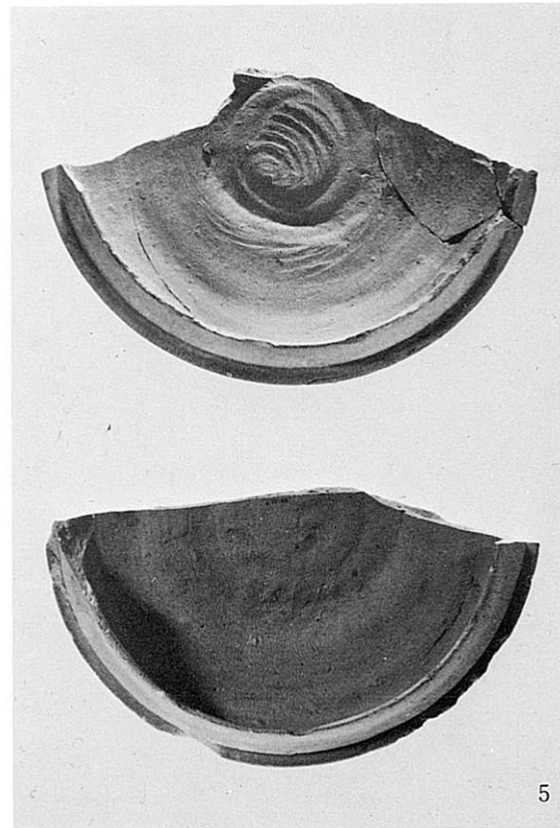
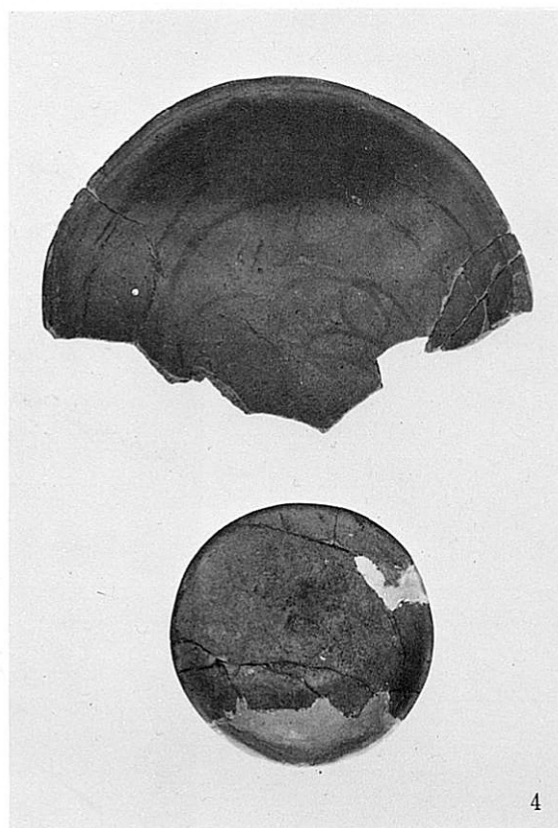
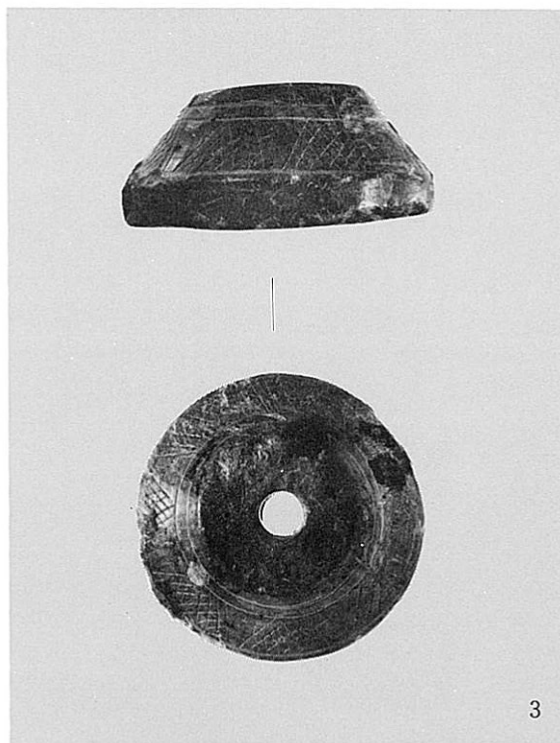
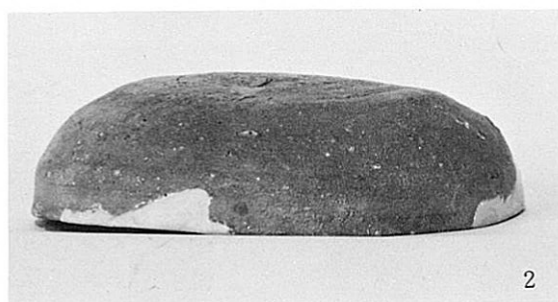
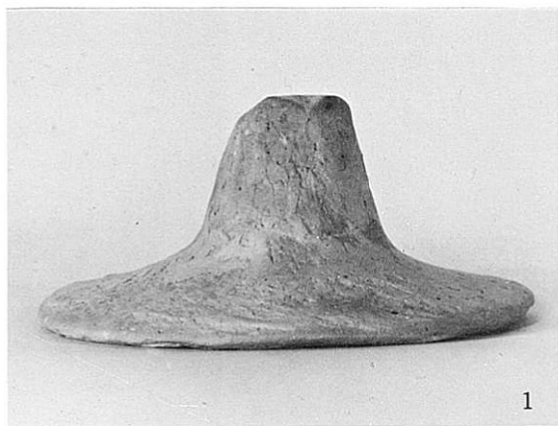
No.23トレンチ 遺構面



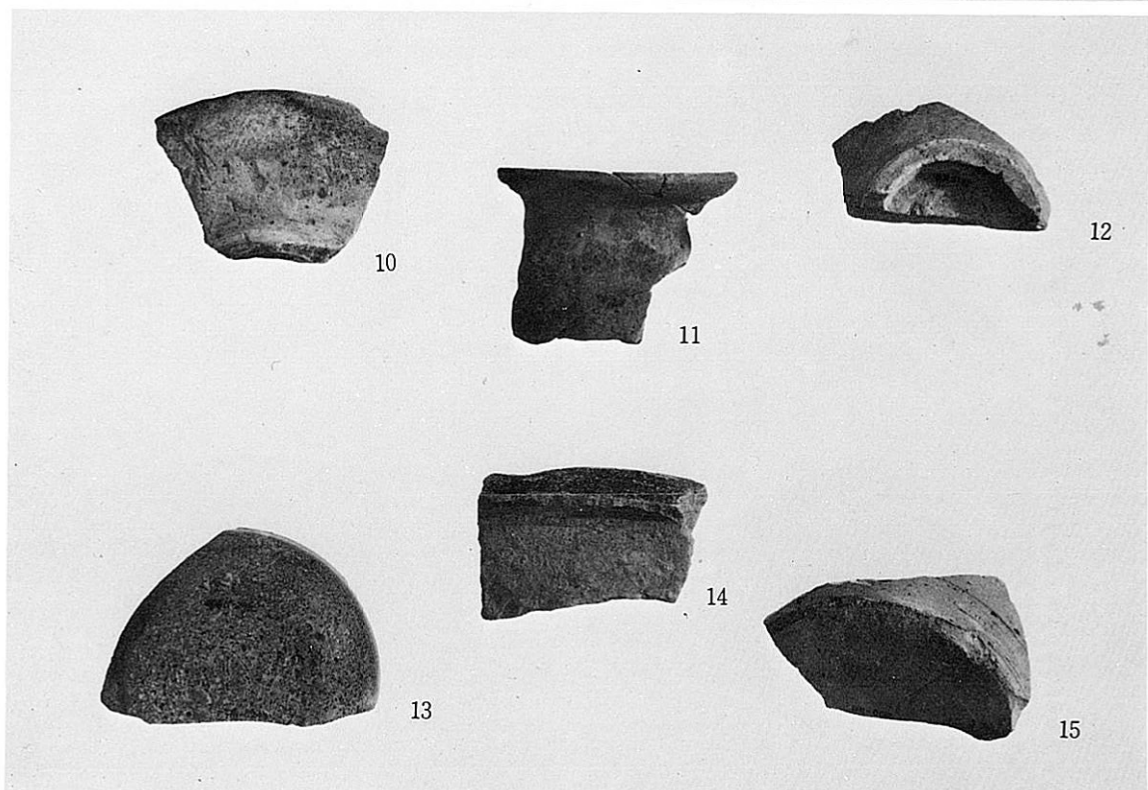
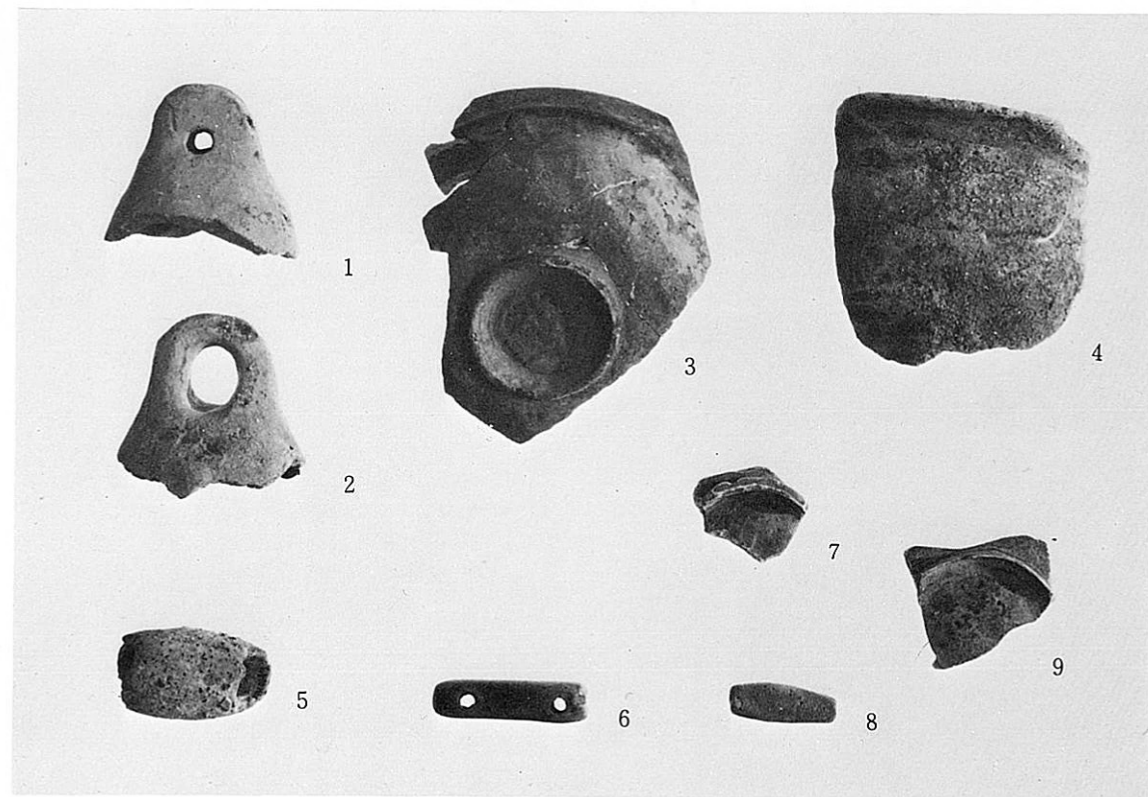
No.25—①トレンチ 遺構面



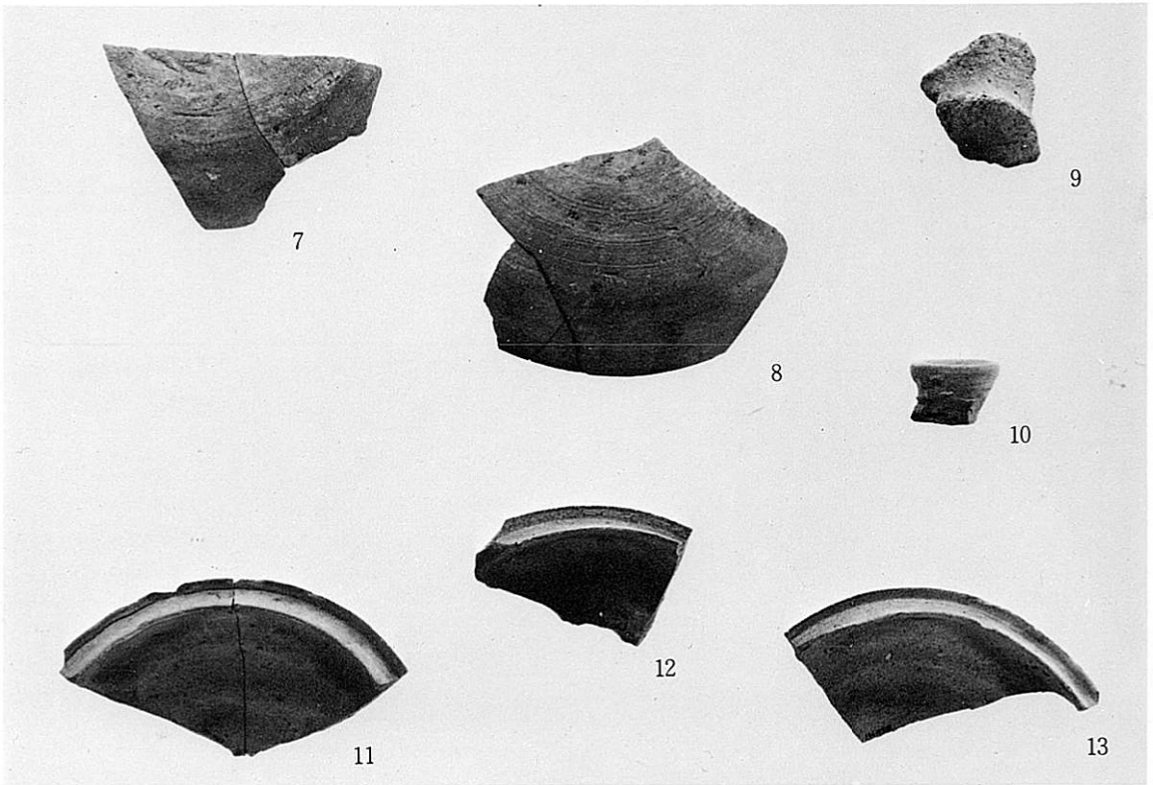
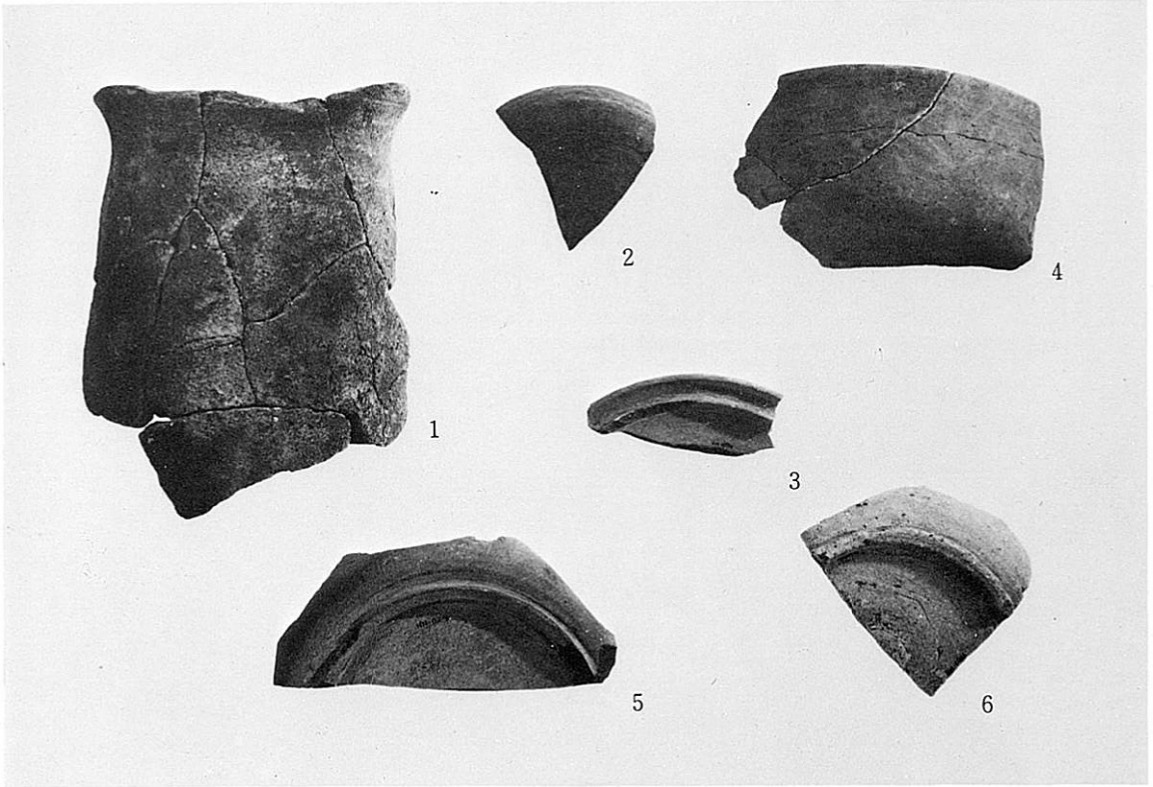
No.26—②トレンチ 集石掘り込み



(1) 19-④トレンチ. (2) 20-①トレンチ落ち込み 3. (3・5) 23トレンチ溝
(4) 11トレンチ落ち込み 2.



(1・3・4・6・7・8・9) 8 トレンチ. (2・13) 19-④ トレンチ. (5) 18-① トレンチ. (10) 18-② トレンチ. (11) 14-③ トレンチ. (12) 15-② トレンチ. (14) 18 トレンチ. (15) 19-② トレンチ.



(1~6)20-①トレンチ, (7~13)23トレンチ.



全て No.26-②トレンチ